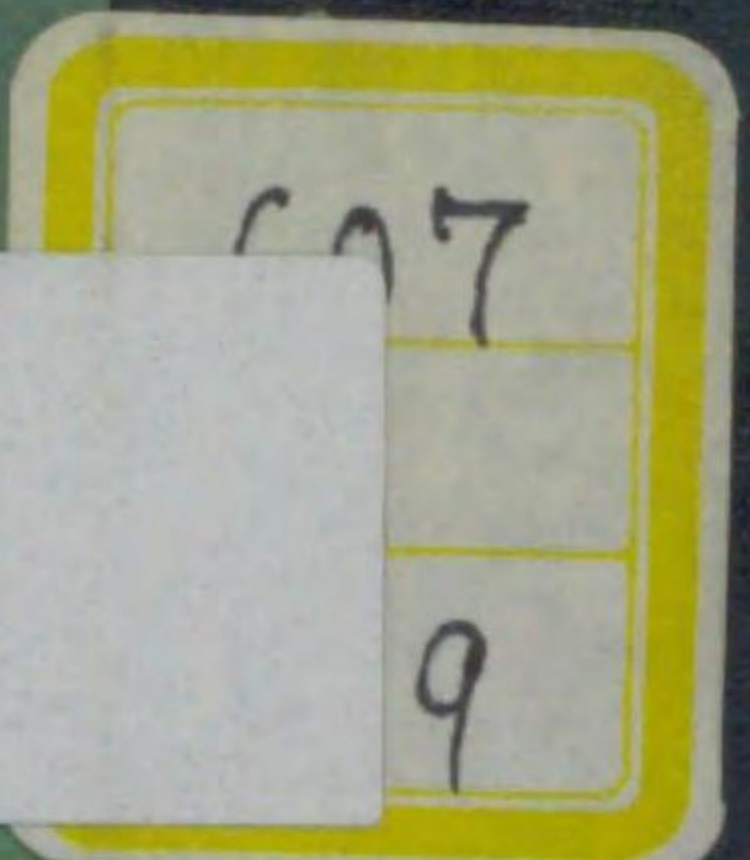


607-419



1200501533054





28.5.28



2772



戦術から見たナポレオン

尾池義雄著



春秋社

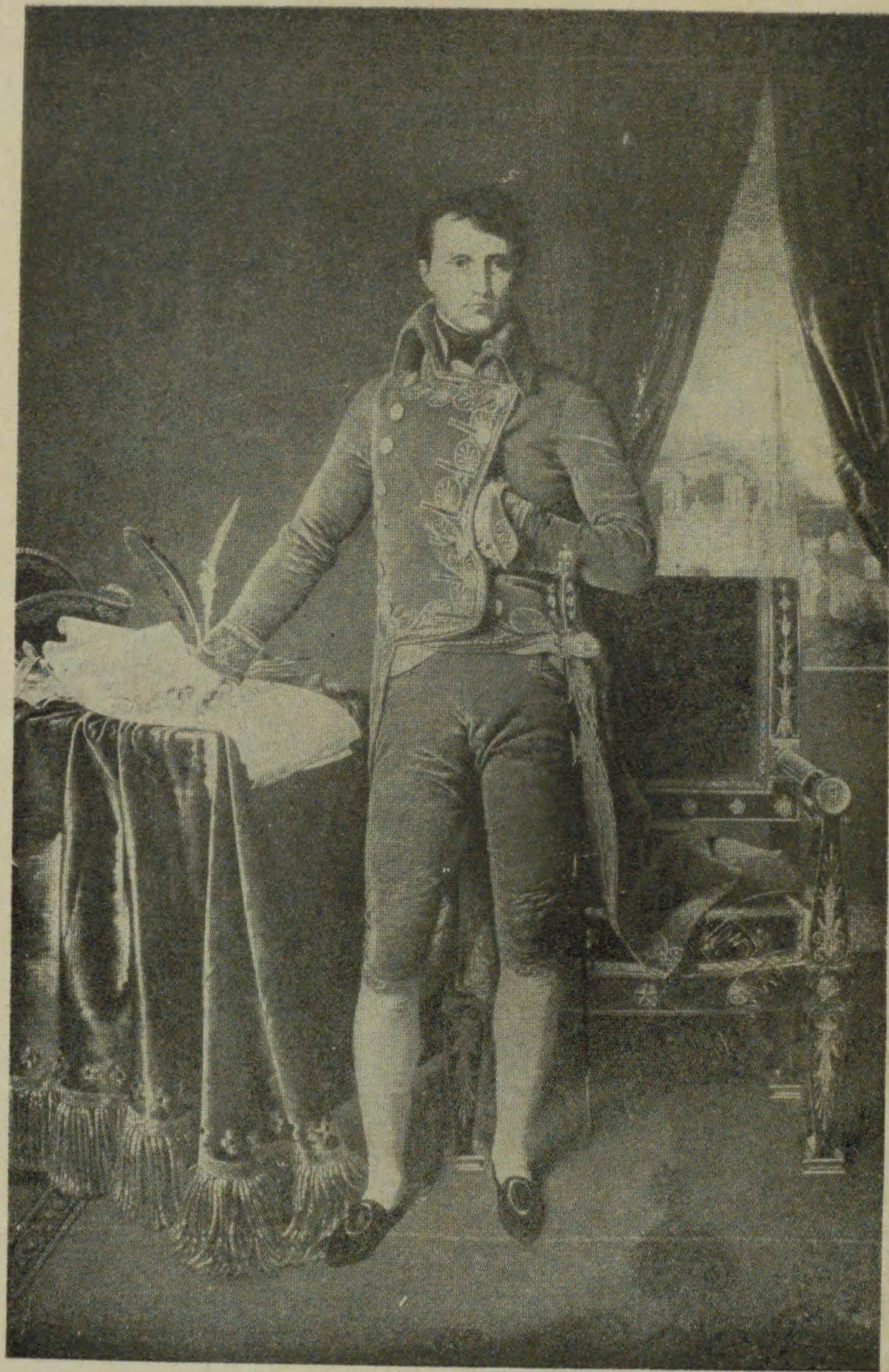




シオレボナの代時校學兵シエリア

—1783—





拿破侖の執政時代の肖像

## 叙

シーザーはもう出ないかも知れない、アレキサンダーはもう見られないかも知れぬ。だが、たれかナポレオンはもう出ないと断言し得る。

ナポレオンの精力、ナポレオンの手段等々を多分にもつたレーニンやムツソリニーの出現は現前の事實ではないか。

英雄は時代變形の使命をもつ役者である。彼れが登場には、時代々々によつて異なるものがある。主義において、理想において、威儀において、だが、英雄たるの本質において少しの變りもない。

ナポレオンが出ないにしても、ナポレオンに憧れる大衆や、ナポレオンを昇いだ民衆が、今や多くの大小ナポレオンを出しつゝあるではないか。

無内容なヒロイズムを輕信して、英雄にあこがれるものは論外である。いやしくも英雄の何たるかを知つて、英雄に學ぶところあらんと欲するものは、必ず先づコルスの巨頭兒ナポレオンに



學べ。彼れの頭は足と共に方向を同うしてゐるぞ。

一九三一・六・一

著者

607-419

凡例

- 一。ナポレオンの傳記や評論や、彼れに關する書籍は、一大書庫を用意しても入りきらないほどある。だが、彼れに對する正確な傳記は甚だ少い、ブリエンヌの「ナポレオン傳」とラカールズの「セントヘレナにおけるナポレオン回顧録」とが上乘の部に屬する。
- 一。本書は右の二書を根本史料とし、エミール・ルドウイツヒの「ナポレオン」その他の評傳を参考して編んだものである。
- 一。譯語は一に意譯に従ひ、原語に拘泥せず、且つ既刊の我が國における多くのナポレオン傳中から借用したのものもある。記して諸賢に謝意を表する。
- 一。地名や人名はその國の語によることにしたが、傳稱されて有名になつてゐるものは、どこの語たるを問はず、そのまゝにしておいた。
- 一。本書は正確にして手ごろなナポレオン傳を撰すると同時に、彼れに對して嚴正批判を下さんとしたものだが、なほ摸象掌跡の太だ及ばざるものあるを免れない。異日の補正を期する。

凡例



目次

一	偉人の力(上)	三
二	偉人の力(下)	五
三	ナポレオンの誕生	八
四	ボナパルト家系	一一
五	父母の事ども(一)	一六
六	父母の事ども(二)	一九
七	父母の事ども(三)	二三
八	父母の事ども(四)	二五
九	コルス一瞥	三〇
一〇	ナポレオンの幼時(上)	三四
一一	ナポレオンの幼時(下)	三七
一二	ブリエンヌ學生々活(上)	四一
一三	ブリエンヌ學生々活(下)	四五

目次



二四 バリー學生々活(上).....四九

二五 バリー學生々活(下).....五三

二六 一躍して少尉となる(一).....五七

二七 一躍して少尉となる(二).....六〇

二八 コルス獨立運動(一).....六四

二九 コルス獨立運動(二).....六八

三〇 コルス脱走(上).....七一

三一 コルス脱走(下).....七五

三二 フランス革命回顧(一).....七九

三三 フランス革命回顧(二).....八三

三四 フランス革命回顧(三).....八七

三五 フランス革命回顧(四).....九一

三六 フランス革命回顧(五).....九五

三七 フランス革命回顧(六).....九九

三八 フランス革命回顧(七).....一〇三

三九 小説的結婚(一).....一〇七

三〇 小説的結婚(二).....一一一

三一 小説的結婚(三).....一一五

三二 ジョセフィンヌ(一).....一二〇

三三 ジョセフィンヌ(二).....一二四

三四 ジョセフィンヌ(三).....一二八

三五 ジョセフィンヌ(四).....一三二

三六 ジョセフィンヌ(五).....一三六

三七 執政官から皇帝に(一).....一四〇

三八 執政官から皇帝に(二).....一四四

三九 執政官から皇帝に(三).....一四八

四〇 執政官から皇帝に(四).....一五二

四一 執政官から皇帝に(五).....一五六

四二 執政官から皇帝に(六).....一六〇

四三 執政官から皇帝に(七).....一六四

四四 再婚.....一六八

四五 マリー・ルイズ(一).....一七二



目次

四六 マリー・ルイズ(二).....一五  
 四七 マリー・ルイズ(三).....一六  
 四八 ロールマ王.....一六  
 四九 ナポレオンの風姿(一).....一六  
 五〇 ナポレオンの風姿(二).....一七  
 五一 ナポレオンの風姿(三).....一七  
 五二 ナポレオンの機智(一).....一七  
 五三 ナポレオンの機智(二).....一七  
 五四 ナポレオンの機智(三).....一八  
 五五 ナポレオンの機智(四).....一八  
 五六 ナポレオンの機智(五).....一八  
 五七 ナポレオンの戦術(一).....一九  
 五八 ナポレオンの戦術(二).....一九  
 五九 ナポレオンの戦術(三).....一九  
 六〇 ナポレオンの戦術(四).....二〇  
 六一 ナポレオンの戦術(五).....二〇

六二 ナポレオンの戦術(六).....二〇  
 六三 ナポレオンの戦術(七).....二〇  
 六四 ナポレオンの戦術(八).....二一  
 六五 ナポレオンの戦術(九).....二一  
 六六 ナポレオンの戦術(一〇).....二一  
 六七 ナポレオンの戦術(一一).....二二  
 六八 ナポレオンの戦術(一二).....二二  
 六九 ナポレオンの戦術(一三).....二二  
 七〇 ナポレオンの戦術(一四).....二三  
 七一 ナポレオンの戦術(一五).....二三  
 七二 ナポレオンの戦術(一六).....二四  
 七三 ナポレオンの戦術(一七).....二四  
 七四 ナポレオンの戦術(一八).....二四  
 七五 ナポレオンの戦術(一九).....二五  
 七六 ナポレオンの戦術(二〇).....二五  
 七七 ナポレオンの政治(一).....二六

目次



尾池義雄著  
 戦術から見られたナポレオン

一生涯、この創造者の空想は、創造者を思ふこと  
 によつて悩まされつゞけた。  
 この人間の支配者は、人間のすべてを支配するも  
 のは一人もゐないといふことで、いたく悩んだ。

エミール・ルドウイツヒ

目次終

七八	ナポレオンの政治(二)	二六一
七九	ナポレオンの政治(三)	二六四
八〇	ナポレオンの政治(四)	二六七
八一	ナポレオンの政治(五)	二七〇
八二	ナポレオンの外交	二七二
八三	ナポレオンの理想	二七五

目次

六



### 一 偉人の力（上）

『世界を變化させた伶俐な男は、指導者たちを動かさず、民衆を動かして成功した。プリンスを動かすものは、たゞの陰謀家ではその結果は大したものではないが、民衆を動かすものは、大地の面を變へる。』とはナポレオンの言葉であるが、そのやうにナポレオンは民衆を動かした。彼れは彼れが言へる大地の面を變へるとの言葉のやうに時代の變形委員であつた。彼れは民衆と共に在つて、民衆を驅り立てたものである。エミール・ルドウイツヒはいつた。『民衆はプリンスと同じやうに彼れの目的のために使はれた』と。

そしてかうしたことはエマルソンがいつたやうに彼れに在つては何でもなかつたものである。それは丁度美人がそのみめかたちをわれ／＼に見せるやうなものであつて、何の手數もいらなかつた。偉人といふ變つた大なる性格が人をして酔はせることは、何の造作もないものであるが、ナポレオンといふ天才兒には、人をして憧憬させる性格が多分に賦與されてゐた。



ナポレオンには温粹玉の如きものはなかつたが、嚴乎たる風姿があつたので、一目見たものは必ず電氣にうたれたやうになつてしまふ。同時に又春風佳氣の如きものがあつたので、人を恐れさせるばかりでなく、懐かしく慕はせもした。

ナポレオンに對して人々がいかに畏服し、いかに恍惚となつたかを二三舉例しやう。彼れがエ  
ルバ島を脱してパリーに突進せんとする時であつた。前日一朝の敗に由つて己れに叛いたネー將  
軍が、しかも己れを伐ち取らんために、途中に擁したにも拘はらず、單身、馬を躍らしてネーの  
陣中に入り『ネーはをらぬか、元帥はどこに』とたづね回り、ネーを見つけると馳せ寄つて抱き  
ついた。その磊落豪放にして大膽不敵な行動には、敵も味方も目を丸くした。ネーはこれを見て  
『オ、陛下』

とばかり平伏し、どうすることも知らず、遂に復た彼れの旗下に附してしまつた。又ナポレオンがワートルローに大敗して帝冠を擲ち英船ベロフォン號に投じて一身を英國に委ねた時であつた。ベロフォン號の一水兵はその船長のメートランドに下の如くいつた。

『多くの英人は今ナポレオンを貶して已まないが、それは彼れを知らないからだ。彼等多くの

英人がもし一度われくのやうに彼れを知ることができたら、彼等はきつとナポレオンの髪の毛一本でも害うことはしないだらう』

又ロルド・ケースといふものもナポレオンを一見するや、たちまち叫んだ。

『彼れを處刑せよ、彼れがもし攝政殿下と語らうものなら、それこそ殿下は彼れに魅せられて、彼れは英國の最親なる友人となつてしまふわ』

と、果してナポレオンを乗せた船がボレモスの港に着するや、彼れを見んとて來り集つたものは、さながら雲霞の如く、そしてその群衆の態度を見れば、宛然醉へるものがなほ新しき甕に集うたやうであつた。この時ナポレオンにしてもし甲板上から一場の演説でも試みやうものなら、皇帝萬歳の聲はたちまち四方に起つたらうとのことであつた。

## 二 偉人の力(下)

ナポレオンは實に人を引きつけ、人を屈服させる偉大な力をもつてゐた。チャールズ・ラムが



その友に語つた左の一言は、よくこれを説明してゐる。

『ナポレオンは壯快な男だ。おれは彼れが没落の間際に仕へて、食卓の傍に佇立するともかまはない。』

伯爵ド・ラ・カーズが書いた『セントヘレナに於けるナポレオン回顧録』といふ本の序文には、

『わたしは初めこの英雄のひととなりを知らず、たゞモウ感激の餘りに隨行した。そして後にひととなりを知つてからは、感激が尊崇に一變し、終に永久、つかへることになつてしまつた。』

とある。この感激の餘りの一句が即ち恍惚といふものである。ナポレオンはしかく人をして恍惚たらしめる性格を有し、そして全歐洲を震撼した。全歐洲を震撼したわけは、彼れがコルス氣質に加ふるにフランス國民性を以てしたからである。

ナポレオンはフランス國民性の代表であつた。佛國民はナポレオンが大帝國建設を見てこれに酔ひ、そこで當時は世界一統的大帝國を夢想したのである。フランス國民は他國民に異なつたおもしろい性格をもつてゐる。ナポレオンを観察するには、先づこの國民性を觀察しておく必要が

それはイー・ハリソン・バーカーに聞くがよい。彼れは『フランス人のフランス』なる一書に記していつた。

『フランス國民は古來別種の感性を有し、これを地球の全面に及ぼしてゐる。佛國民の特性を有することは、識者に異論のないところである。政治、文學、技藝、科學、哲學、戰爭に由つて佛國民がいかに人類を鼓舞作興したか。フランス國民が全世界に及ぼした感化力は、全然その性情と方面とを異にしてゐるため、人をしてその矛盾撞着に驚愕し又怪異させる事がないでない。十字軍と十八世紀の革命とはその一例だ。前者が中世期のキリスト教徒を煽動して、宗教的熱情をあふつたに反し、後者は大聲疾呼して思想界を警醒し、一般思潮を逆流して實驗哲學に向はしめ、且つこれに科學的民主的精神を發生瀰漫させたのである。フランス人のうちには滾々湧き出でて盡きない心泉がある。且つその泉源は幾多の事物に富んでゐる。時に或は熱烈の如き情炎を噴き、時に或は微妙神の如き機智を沸かせ、本能的直覺力もこれから逆り、美術の好愛心もこれから溢れ、科學的觀察力も、思想澄清の能力もこの中から發する。一呼して天下の民を振蕩するのはこの民の天稟であり、全天下をして響應景從させ、或る時は異邦人



に猜心を起こさせる。これがフランス國民の特性で、古來その内外に紛擾を惹き起して寧日ない所以である。フランス國民は一方に牽引力を具へ、他方に反撥力をもつてゐる。一面には熱烈な同情を寄せさせながら他面には猛烈な嫌厭を起させる。列國に親愛と憎惡から離れた立場に立たせることのできない運命をもつてゐるのである。』

と、ナポレオンの性格や鴻業を知るものは、必ずこの言葉が期せずしてナポレオンの全傳の抽象されたものであることに氣付くであらう。ナポレオンはフランスの國民性の殆ど全部を露呈し發揮してゐる。日本に太閤があつて彼れによつて日本の國民性を發揮されてゐるやうにフランスも亦ナポレオンがあつて、これによつてその國の國民性が發揮されてゐる。

### 三 ナポレオンの誕生

氣機關を發明して、世界の産業に大革命をあたへたワットが、その機關を發明して特許を得たのは西曆紀元千七百六十九年に、他日全歐を震蕩した英雄ナポレオンが、若き美人

の腹中からころげ出た。

ちやうど八月十五日のマリア昇天祭當日の正午ころであつた。二十歳ばかりのまだ裏耻き美人が、太鼓のやうな腹をわづかに服で隠して、けふ一日を人と共に祝はんと寺に詣うで、途中で俄に産氣づいて、急いで家に歸るなり、産室に入るまもなく、玄關先でバツタリ倒れ、そこで一兒を産み落した。これがナポレオンであつて、母なる美人はレチシャといふものであつた。

ところはコルス島のアジャシオ市で、家は四階建とはいへ、見すばらしい陋屋に過ぎなかつた。そのうへ父は辯護士であつても生活は慘憺たるものであつた。

わが豊太閤が尾張の中村に産れた時、父は木下彌右衛門といひ、織田家の足輕で、そして廢兵賜暇の身となり、中村に貧しき生活をしてゐたものであつた。辯護士と足輕とは固よりその品位を異にするが、彼我の貧しかつたことは同じであつた。世を異にし處を異にしながら、いづどこにおいても、偉人が概して貧家に出るのは、又一奇ではある。

英雄の産まれるときには、何かそこにきつと奇瑞がついて廻はる。太閤は日の神の申し子であつて、天文五年正月元日申の一天に産れたといつて、日輪の奇瑞がついて廻つてゐるが、ナポレ



オンにもホームメル詩中の英雄オヂツセーがついてゐる。母なる人が玄關先で産み落した時、下にはオヂツセーが毛氈に畫かれてあつたといふことだ。

英雄人を欺くといふが、太閤の日輪説は全く人を欺かんとする一種の英雄術に外ならなかつた、それは實際とは——出生年月まで違つてゐるのでわかることであるが、ナポレオンのオヂツセーはどうであつたらう。これ亦ナポレオンが太閤式英雄術に出でた細工でないとするも、所詮は眉唾ものである。その繪のオヂツセー説が、後年にはナポレオンの崇拜したシーザーやアレキサンダーに變つてゐるなどは笑はせるではないか。

ナポレオンには誕生の年についても異説がある。千七百六十九年とは、今日は定論になつてゐるが、従来史家は六十九年と六十八年の兩説に別れて議論をたゞかはしてゐたものであつた。

太閤も今なほ天文五年の申歳生れだといつて、確實な六年酉歳を否定するものがある。太閤とナポレオンが等しく英雄であつて、このやうなことがあるのは更に奇妙な感じがする。しかしながら、人の年齢なるものは、満年でいふ時と算年でいふ時とで、そこに一年の相違が生ずる。古人の年齢調は先づこのことから考へてかゝらねばならない。さうでないといふ正しさを得ることは難

い。九星見からのことは知らぬが、史家にあつては一年の年齢の相違ぐらゐは、さしたる問題ではない。

更に一言を加へて置きたい。それはナポレオンなる名のことである。この名はボナバルト家が數代相ひ繼いで名乗つて來た名であつて、元はイタリイ名將傳中のナポレオン・デ・ウルシンといふ名將の名から出たものである、と、ラ・カーズは記してゐる。この名はイタリイ人が昔から第二子に附ける名であつて、ナポは谷、レオンは獅子で、谷の獅子といふ意味だ。ボナバルト家は、この風習に従つて名づけたものであるとも言ひ傳へてゐる。どちらにでも首肯されることではあるが、後者の方が眞に近い。ナポレオン自身も後者と信じてゐたやうである。人の名に動物の名を採用するのは、世界一般古來の風習である。我國には現に熊吉、虎藏、牛郎がある。谷の獅子と名づけたからとて、不思議でも何でもない。

#### 四 ボナバルト家系



ボナバルト (Bonaparte) なる姓は、ナポレオンの家の本姓ではない。本姓はブオナバルト (Buonaparte) である。ナポレオンの父はブオナバルトと稱し、ナポレオン自身も中年までは、ブオナバルトと稱してゐた。然るにグオナバルトはイタリア語であるので、ナポレオンはこれをフランスにおいて稱することを好まず、フランスにおいて事を爲さうと思ひ立つた頃から、uを省いてボナバルトと稱し、しかく自署することになつた。これは彼れが中年以降のことである。そこで面白いことがある、神経質で細心家たる彼れはイタリア征伐の當時、ボナバルトとブオナバルトとの二様の使ひ分けをした。イタリアに對しては己れをイタリア人と思はせんがためブオナバルトと稱し、フランスに對してはフランス人と思はせんものと、ボナバルトと稱した。

現に當時の文書でイタリアに遺れるものにはブオナバルトとあり、イタリアの陣中からフランスのジョセフィンヌに送つた手紙にはボナバルトとある。

ナポレオンの祖先はイタリア人である。そのブオナバルトすなはちナポレオンが自稱のボナバルト家は、その昔イタリアのトスカヌから出で、一時は小國ながらもトレヴィーズといふ國の王さまにもなつた家である。この名門がなぜ後世、地中海の一小島なるコルスにゐたかといふに、

それには事情がある。王さまにもなつたほどの家柄であるから、數次の政變に遭つた。さうして世を経、代を改むる間に、一起一仆、遂にコルス移住の落人となつてしまつたのである。コルスに移つたのは千五百二十九年であつたが、ナポレオンはこの移住後丁度二百年目に生れた。

ナポレオンは最初の間こそ、ブオナバルトと書いたり、ボナバルトに訂正したりしたが、志を爲した後は、系統調を大に嫌ひ、これが調査を禁じ、その談話をも拒絶した。或るものがボナバルト家は北國の王家から出たものだとし記した系譜を公にする、とナポレオンはこれを阿諛的著作だとして態々公文書を以てその編者を愚弄した。そればかりでなく一日トレストにおいて岳父の塙國皇帝フランソアと會見した際、フランソアがナポレオンに對し

『陛下の祖先はトレヴィーズの國王であつた、朕は親しくこれを調べたからきつと保證の位置に立たう』

といふ、とナポレオンは言下に

『折角ですが、さやうなことは知らないでもよいです。いつそ先祖が塙國皇室の創設者であつてほしい』



と對へた。フランソアは累代王家の人であるから、家系を重んずること尋常でない。重ねて、

『さうではない。祖先が富者とか貧者とかいふのなら格別取るには足りないが、いやしくも一國の君主であつたといふことは、無上の榮譽である。これをマリー・ルイズ(境國の皇女にしてナポレオンの皇后)に聞かせたら、マリーはどんなに喜ぶことだらう。マリーはきつと大悦びをするに違ひない』

と曰つた。ナポレオンは、これを聞いてどんなに思つたらう。このおいばれめ、今時、系圖調など時代後れも甚だしいや。これだから娘もくれ、巴里にも朝するのだ。と喉下でクス、やつたらう。

ナポレオンが、しかく系圖に重きを措かず、これが調査を嫌つたわけは、彼れが寒微から起つたせいもあらうが、餘りにばかぐしさを感じたためもあるだらう。まことに系圖調などをして、祖先の祖先と探し廻はつてゐると、遂にはダーウイン爺の鑑定を仰がなくてはならなくなつてしまふだらう。馬鹿の骨頂、イヤ猿の骨頂サ。

ナポレオンは家系のことゝなると、必ずそれを一笑に附した。で近侍の者でさへナポレオンの平生の談話中から、このことを聞き得なかつた。家兄のジョセフが家系關係の書類を蒐集するの

を見てナポレオンはいつも曰つた。

『兄は系圖作りだ。』

と、これは秦の始皇が己れの死後は、己れに始皇と諡し、次からは二世、三世と諡せよと命じたり、太閤が豊臣の新姓下賜を奏請したのと、同じ心意氣である。我より古を爲せば可なり、何ぞ祖先を訪ねて箔を附するを用ゐんや、とはナポレオンの意衷氣魄であつたらう。日本人は祖先崇拜といふ國民性を有する故もあらうが、家系を云々したがる癖がある。明治維新の當初、日本人が如何に家系を重大視してゐたかの實證が見られた。それは宮内省から各藩に系圖差出を命じたが、氏素性のあやしい各藩が何れも差出した系圖は、源平藤橘菅家の類であつた。たゞその中に一つだけ太閤やナポレオンのお氣に召す調書があつた。それは蜂須賀家のものである、同家は宮内省の命だから巳むを得ないとあつて提出したが、書中に

『我が祖、姓は蜂須賀、名は小六、元龜天正の際、尾濃の間に剽掠を事とし、後豊太閤に事へて云々。』

との意味を記入したさうな。宮内省ではこれを讀んで失笑し、系圖調を中止したといふ。家系重



視の日本に在つて、殊に藩主であつたものがこのヤリ口は、大に見上げたものである。太閤、時に在つたら『蜂須賀出かした』といつたらう。ナポレオンにしてこれを見たら『東洋人にこれ有るか、さてくウイ奴』と褒めたらう。

## 五 父母の事ども(一)

ナポレオンの父はシャルル・ボナバルトといつて、千七百四十六年コルスに生れ、千七百八十五年モンペリエ市に客死した。又母はマリー・レチシア・ラモリノといひ、千七百五十年コルスに生れ、千七百六十四年シャルルに嫁し、千八百三十六年イタリーにおいて崩じたが、行年八十七であつた。

シャルルは十四歳で父を失つたが、コルスの豪傑バスカルパオリーの立てたコルスの中學を出で、後コルスの大學、ビザの大學等に學び、法律を専攻して辯護士となつた。ボナバルト家はシャルルの先代から辯護士であつたから、シャルルは父の業を繼いだのである。然るに當時コルスの風雲は、シャルルを辯護士に甘ぜさせない、シャルルはパオリーがコルス獨立の軍を起してゼノアと戦つた時、この軍に投じて奮戦敢闘し、遂にゼノア人を島外に驅逐した。かゝる勇士であつたからコルスの臨時議會がコルスを舉げてフランスに服屬せんことを提議した時、シャルルは慨然として

『自由が一に意志に繫るとするなら、どの人民でも自由となり得ないはずはない。然るに歴史の上において、この自由の恩恵に浴するものゝ例に乏しいのはどうしたわけか。それは他でもない。精力勇氣及び必要の武徳を缺いてゐるからだ。』

と絶叫した。この演説は彼れが二十歳の時であつたが、青年の熱心は恐ろしいものだ、いたく満場を動かした。その後コルスがフランスと戦つて大敗し、パオリーが英國に亡命する時、シャルルはパオリーと與に落ちんとし、そして思ひ止まつて佛國に降つた。そこでパオリー一派のものは、シャルルを異口同音に變節漢と呼んだ。ド・ラ・カーズはこの事を記して、その罪を一に老伯父ルシアン大補祭に被せていふ『ルシアンがその餘の家族の上に父權を振り、強めてシャルルを歸國させたのだ』と。これはカーズが折角の辯護ではあるが、その變節の當事者がシャルルであ



る以上、シャルルの變節はルシアンが歸國させたと否とに關はらない。到底シャルルは變節漢であつた。ラ・カーズの筆はわれらに幾分の情狀酌量をさせるに過ぎない。たゞしこれを以て變節行爲とすればこそ悪むべきだが、もしこれを、機敏な行動とする時はどうであらう。ナポレオンは幼年時代にフランスへ渡つて學校に通學し、フランス人から附庸國の少年として輕蔑さるゝを憤慨し、その極、父の變節をも回顧して憤慨したが、そのナポレオンも亦後年パオリーに對して、掌を翻す如き態度を取つた。後の人は、これを稱して機敏といつてゐる。これが機敏なら、シャルルの行動も機敏であつた。その名分の如何は、機敏の二字の前には問ふところでない。兎に角シャルルは機敏に立ち廻る明のあつた人である。シャルルは、亦凡庸の一紳士に過ぎなかつたといふものがあるが、教育があつて勇氣もあり、熱情もあり、才智にも秀で、名譽心も強く、歌も咏へば、詩も作つた。といふことだから、たとひ俊傑ではなかつても凡庸漢ではなかつたらしい。これを凡庸と見たのはナポレオンの如き大天才の光輝に打たれた人々だけであつたらう。シャルルが、もしナポレオンの如き大天才を生まなかつたら必ず凡庸扱ひはされなかつたらう。又多くの史家はナポレオンが家庭から得た資質と感化とを記し、ナポレオンはその鴻業を成就すべき資

質と感化とを母から受けた、全然母から受けて父からは、すこしも受くるところなかつたといひ、ナポレオンも亦一切を母に負ふたと自言してゐるが、その勇氣や熱情や才智や名譽心や將又詩歌を弄ぶ點に至つては父から受けないとはいへない。シャルルは堂々たる美丈夫で、熱情漢であつたが、その熱情はやゝもすれば、直に冷めた。又貴公子だけに贅澤であつた。父から譲り受けた財産は、全部贅澤と政争運動とに蕩盡してしまつた。だが甚だしく貧乏に陥つても、振ひ起つて貧から脱することができなかつたといふ史家の言は、シャルルを認めるものである。

## 六 父母の事ども (二)

シャルルは桑樹の開墾地を得、又鹽田を造り、ひたすら家産恢復に努力した。シャルルはフランスに降服後、コルスの貴族となり、大守の顧問官に任せられ、貴族院議員に選ばれ、末には島から派遣の駐佛代表となつて、常に政治圏内から離れなかつた。そして千七百八十五年二月二十二日、巴里行の途中、三十八歳を一期として、モンペリエー市に客死した。病は後年ナポレオ



ンをも殺した胃痛であつた。シャルルは重き病の枕に就くや、遂にバリーにあるナポレオンの身の上に感慨を馳せて

『ナポレオンの劍は、列國の君主を戦慄させ、世界の面目を一變させるだらう』  
といつた。又まさに幽暗の境に入らんとして彼は叫んでいつた。

『ナポレオンよ、ナポレオンよ、長劍を横へて來れ。』

當時ナポレオンは漸く十六歳で、なほ巴里の士官學校に在學中であつた。後年ナポレオンが第一執政官となるや、モンペリエーの有志は、シャルルのために記念碑建立のことを内務總長まで請願に及んだ。總長がこれをナポレオンに申し出るとナポレオンはその好意を謝し、巨頭を横に掉つて曰く

『ありがたいことはありがたいが、死人の安らかなる眠りを妨げてはならぬ。遺骸は靜かにしておくがよい。予は父ばかりでなく、祖父と曾祖父をも喪つたが、これに對してなにもすることができなかつた。先人の喪が昨今のことなら、記念物もよからうが、既に二十年もの昔となり、現世と何の關係もない。そんなことは、話そのものからして休めやう。』

父は父、自分は自分、自分が光つたからといつて、光りもしなかつた父に、附け光りをしたとて何の益もない。且つ喪はその時の境遇に適應してをればよい。一人だけ抜いて改葬したり、記念碑を建て、特に表頌したりするのは、他の死者に對して無禮である、といふのがナポレオンの意中であつたらう。孟軻氏は父の喪に遭つた時頗る貧しかつたから、これに對して粗末な葬を發したが、母の喪の時分は多少の富があつたので、盛大な葬式をした。そこで人が軻に對して、父に薄く母に厚きを詰り、弟子も亦軻にこの事を聞いたが、軻はその時『人には分限あり、貧富あり、分限にして厚葬を容るさざる場合は、たとひ爲し得る貨財があつても、厚葬の悦を爲す可きでない。又分限が厚葬を容しても、貧乏で貨財がなければ厚葬の悦を爲す可きでない。分限格式の厚葬を爲すことを得て、加ふるに貨財もあれば、古人はみな古來の式を用ゐて厚葬した。予だけが、どうして獨りさうしないであらう』と對へた。この心はすなはちナポレオンの心であつた。太閤はその父彌右工門はもちろん、異父の竹阿彌から先祖代々の墓をみな京都へ改葬した。だが當時流行の父に對する贈位などは奏請しなかつた。この事は太閤が、おれは天子の落胤である、と人を欺いたことに由るものではあるが、無名の匹夫に贈位を奏請して、光りもせぬも



のに附け光をして見たところで始まらぬ、との考もあつたためらしい。その證據には改葬しても一向改葬の見榮のしない仕方をした。これから察してもこの舉は恐らく大政所が、墓參に一々尾張まで歸へるのを不便とし、強つて請うて改葬したものであらう。ナポレオンがこの點に對する態度は、太閤とよく似て、しかも太閤に勝つてゐる。東洋と西洋と、その祖先に對する觀念が異つてゐるからであらう。

## 七 父母の事ども (三)

マリー・レチシア・ラモリノは、花ならばまだ蕾の十五歳でシャルルに嫁した。時は千七百六十四年六月二日で、シャルルが漸く十九歳であつた。ボナバルト家が久しき以前にコルスへ移つて來たやうに、レチシアの生家も數世紀の前に移つて來て、ボナバルト家と同じくアジャシオ市にゐたものであつた。レチシアは世に稀れな美人であつた。コルスに在つては島中第一と呼ばれ、全く第一の選に入つたことがある。又ナポレオンがなほブリエンヌの幼年學校に在學中、レチシ

アは我が兒を一目見んものと、遙々ブリエンヌに出かけ、その序でを以て巴里に入つた時にも、巴里で亦美人の譽を取つた。睫毛が長くて黒く、鼻が長くて形好く、口元には愛嬌があり、齒は皎くて美しく、顎が少し出でゐた、といふことであるから『目元バツチリ鼻高く口元尋常で齒は皎し』の格であつたらう。レチシアは容貌風姿既に美なるが上にその心性も亦美しかつた。レチシアは意志が飽まで強く、膽力が充分にあり、霸氣と勇氣とに満ち、活動的でそして貞操觀念がつよく、儉素を遵つた。且つ機を見るにも甚だ敏で、やゝともするとその智に人を驚かせた。かかる女傑であつたから、ナポレオンは曾てレチシアを評して

『損失と疲労と困苦と饑渴と、これらのものは一つも母を挫折させない。母は悉く、これに耐へ忍んでをる。母を一口に評するなら、女の胴に男の首を載せたものだ。』

と曰つた。まことにレチシアのコルス生活は損失、疲労、困苦、饑渴であつた。ナポレオンが巴里の士官學校に在學中、ナポレオンから三フラン即ち一圓二十錢の金を借りて、ナポレオンから返濟の請求をされたことさへある。この一事を以て見るも、如何に貧乏神と戦つてゐたかゞ知れる。ナポレオンは又



『母は超人的勇氣と膽力とを具へてゐる。その一生は實に婦女の龜鑑だ。』

と曰つたが、レチシアはコルス獨立戰の時に、戰場に出で、彈丸雨下の間に立ち、聲を擗つて味方を勵まし、或は崖下の急流に馬諸共落下するや、人が馬を捨てよといふのを聽かず、馬に乗つたまゝ崖上に上つた。勇氣膽力がなくては、この落着はらつた行動はできない。美人でそして勇氣あり、膽力ある點は宛もわが巴御前ではないか。ナポレオンは又曰つた

『母は予のためには一枚の夏衣をも賣らうとした。母が予に對してした養育の感化は、他日大に予の功業に及ぼした。』

文天祥の母は、天祥を教育するために簪まで賣り、そして天祥を、あのやうな俊傑にした。レチシアが汗衫を賣つてまで、その子を教育しやうとしたのは、天祥の母同様のヤリ口で、まことに賢母の行といふべきである。かゝる母の感化は終世その身に及ぼさずにはゐられない。ナポレオンが剛毅果斷なところは殊にレチシアの感化に待つてゐる。ナポレオンがエルバを脱して再擧を計らんとしたのは、果斷のヤリ口であるが、この果斷は實にその母の賛成に待つたのである。レチシアは亦大節に臨んで奪ふべからざる婦人であつた。バオリーが英國の援助に待つて、コルス獨

立の再擧を計つた時、ナポレオン兄弟がみなバオリーの擧に反對する、とレチシアも亦その子に従つて反對の地位に立ち、バオリーが『御子息の態度は不都合である。けれども貴女が御子息に反對するなら、貴女の財産だけはそのままにしておかう』と言ひ遣る、とレチシアは斷乎としていつた。

『わたしは今フランスの臣民ですから、どこまでもフランスに従ひます。忤のしてをることはわたしに勧めさせてをるのです』

かうした思ひ切つた言葉は、大事の場合決して尋常人の口からは出ないことである。これを言ひ得るものは必ず大節に臨むで奪ふべからざるものである。レチシアはこれがためバオリーからその家を焼かれることになつたが、フランスへ逃げ伸びて、穴藏の如き憐れな室を借りて辛抱をつづけた。

## 八 父母の事ども(四)



レチシアはかゝる婦人であつたから、その貞操を守ること尋常でなかつた。レチシアはシャルが逝いてからは終世寡婦で押し通したが、名にし負ふ美人であつただけに、コルスにおいてもフランスにおいても煩さいほど戀の矢文を射かけられた。たがそれには少しも目をくれず、甚しきはその當人を面辱までした。即ちレチシアが皇太后として巴里の宮中に在つた時である。さる大僧正が一念ムラ／＼と起つて道鏡式舉動に及び、早速口説き落さん、と先づ媚態百出、諛辭千言、偏にレチシアの意を迎ふことに腐心した。するとレチシアはこれに對し

『マア一寸お待ちなさい。今日左様に澤山お褒なされると明日は種切れになりますよ』

と冷かした。随分皮肉な冷かし方ではないか。それにしてもおかしいのは、かゝる深宮を侵すやつが、大概東西共に神佛の冠をかぶり、道德の衣を着た坊主であることである。けだし『三十後家は徹されぬ』といふ俚言の、必ずしも明言でないことをレチシアにおいて見ることを得た。レチシアは亦ナポレオンを教養しつつ、コルスの貧婦であつた時も、ナポレオンのお蔭で皇太后の榮位についてゐた時も、ナポレオンに對する態度を同様にして、少しも變へなかつた。政治上のことにはもちろん容喙はしなかつたが、家庭上のことには儼然たる態度を持して、しば／＼ナポ

レオンをキメ附けた。その例の最も著しいのを擧げてみよう。西洋では皇帝が臣民の前に手を出すと、臣民は悦んでこれに接吻するが禮である。で、ナポレオンは一日レチシアの前に手を差し出したが、レチシアはその手を振り拂つて、きつとなつた。ナポレオンは、むつとして

『わたしは貴女の皇帝ではないか。』

といふとレチシアは凜乎として

『わたしは貴郎の母ではありませんか。』

と撥ね返した。これを見てゐた皇后のマリー・ルイズが、ナポレオンのために

『母上、わたしはウインにゐました時、始終皇帝の手に接吻しました。』

といふと、レチシアは亦振りかへつてルイズに對し

『オースタリー皇帝は、貴女には阿父で、フランス皇帝は妾には子であります』

と覺した。これにはナポレオンもマリーも相顧みて言ふところを知らず、與に苦笑した。公式の場合皇太后も皇帝の前で臣下の禮を取らなければならぬ。レチシアはこれを知らないではない。この事が公の場所でのことであつたなら、レチシアは必ずナポレオンの手に接吻したらうが、こ



の場合は一家内でのことであつたから、レチシアは母たる威厳を保持したものであつたらう。この態度は誠に敬服に値するものである。レチシアには更に記しておかねばならぬ一事がある。それは彼れの敏靈なことである。長くて黒い睫毛の下に光れる彼れの眼は、物を観るにナカ／＼敏かつた。一日シエブリウーヴ侯爵夫人が初に謁見すると、その夫人が歸つた後

『彼の夫人は立派な人ですけれど、きつと心中で私共を憎んでゐます。あの顔には皇帝を悪んでゐることが書いてあります。』

と左右に語つたが、果せるかなこの夫人は、他日ナポレオンに對して陰謀を企てた。大策士のタレーランがナポレオンを顛覆しやうとした時にも、レチシアは人よりも早くこれを察してナポレオンを出征先から呼び戻して、危機を未發に防止した。そればかりでない、レチシアはナポレオンの行末を考へ、かれは到底盛運続きで終はるものでない、他日必ず大頓挫、大蹉躓、大失敗の時を迎へるのであらう、と察して取つてゐた。それが證據にはナポレオンが、法王ピウス八世を虐待した時、レチシアが異母弟のジョセフツウ大僧正に寄せた書に

『あなたの甥は自分で一家の没落を促してゐます。かれは既得のものに満足せず、この上なほ

多くを獲んとしてゐますが、これは一切を失ふの道でござります。わたくしはかやうに考へて來ますと夜もろく／＼寝られません』

といふのがある。あなたの甥とはいふまでもなくナポレオンのことである。孔子は足ることを知れと説いたが、レチシアはこの足ることを知つてゐた婦人であつた。この上に多くを獲やうとしてゐますがこれは一切を失ふの道でありますとは、足ることを知らぬナポレオンのために悲んで發した名言である。レチシアは足ることを知つてゐたから、皇太后になつて年金百萬フラン（四十萬圓）を得てゐた時にも、驕らず貪らずその金の大部分を貯蓄した。その儉素はコルスの前を忘れぬためでもあつたらうが、又ナポレオンが一切を失ふの時を察してゐたからであつたらう。レチシアは全くこの貯金があつたため、ナポレオンがセントヘレナへ流された後も、何不自由なくイタリーに退いて晩年を幸福に過ごした。説いてこゝに至つてこれを約するなら、レチシアは良妻賢母の鑑である。國母の粹であつた。この母にしてナポレオンを産む豈に偶然ならんやだ。ナポレオンの語を借用してこの婦人を一言で評するなら

『世界の最大偉人を生める母は世界中の最も偉大な婦人である』



## 九 コルス一瞥

ナポレオンがセント・ヘレナにおいて

『あの島は一切のものがみな優れてゐた。土地の香りさへさうであつた。眼を閉ぢてもありくとわかる。外に類のない島である。』

とほめちぎつたコルス島はどこであるか、どんな歴史をもつてゐるのであらうか。ナポレオンの生れ故郷として、多少はこれを知つておく必要があらう。コルスはイタリアとフランスとの間に介在して、或る時は地中海の主権者ともなつた。されどカーセージからも、ローマからも、ワンダールからも、ビザンツ帝國からも征服され、しばしば人の國に隸屬するが、この國の運命であつたと見え、ゼノア共和國の附庸ともなり、後亦ゼノアからフランスに賣渡され、遂にフランスへ併合されてしまつた。これがコルス滅亡史の要約である。コルスはかゝる歴史を有する島だけにその民は一風變つてゐる。しかし奴隷根性は少しもないばかりでなく、敵愾心の非常に強烈な人民である。

曾てフランスのナルネーといへる人が、コルス調査員となつてこの島を調査し、その報告書を政府に致したことがある。その書に由ればその當時は、島民には哲學的思想なく、公正の心なく、暗殺は十年間に百三十回も行はれ、裁判は陪審制度で弊害多く、徒黨を外にしては社會的團體の見るべきなく、黨争は盛んに行はれて勝者は敗者に復讐し、地方は安心して住まはれず、農夫は耕作するにも武器を用意し、護送者なくては一步も出られぬといふ有様であつた、とのことである。

ナルネーの觀察は確に的中してゐる。しかしそれはあまりに善くない一面のみであつて、他面になほ大に傳ふべきものがある。温良、寡欲、質素、謹嚴はかの島民の美點である。復讐心などはこの温良、寡欲、質素、謹嚴な性格の人にあることであつて、華美な、淫蕩なものには斷じてない。且つこの嶋の人民に稱すべき第一のものがある、それは獨立心だ。コルスは前叙の通り、古來あらゆる強者の迫害を受けて來たに拘らず、少しも奴隷的卑屈心を起さず、常に獨立自由の心を胸中に燃やしてゐたのは、大にほめねばならない美點である。



ナポレオンは一日コルスのことを語つて

『コルスの歴史は自由を獲得せんとする人民とそれを征服せんとする敵國との不斷の争闘史である』

といつたが、これは確にさうである。この争闘のできる所以のものは、畢竟、獨立自由の心が燃えてゐるからである。尋常普通の群衆心理ではできない藝當だ。

民約論を著して有名なルーソーは豫言的にコルス人を評して曰く

『ヨーロッパにはなほ自由獨立の氣象に富み、將來爲す有るの國民がある、それはコルス人である。この小島民は他年一日必ずヨーロッパを震撼するであらう。』

と。コルス人の自由獨立心はこれに由つても知られる如く、天下一般の認むるところであつた。そして他日歐洲を震撼するであらうとの豫言も的中してゐるからおもしろい。すなはちコルスは今こゝに記しつゝある、有史以來の大英雄ナポレオン一世を生み出し、それをして歐洲を沸熱震蕩させたではないか。

かゝる氣象の人民を産するには、亦おのづから理由がある。土地の上から一考するに、この島は旅行家フレッシュフィールドのいつたやうに、壯大と優美と二つの景を具へてゐる。この景色がその人民を、獨立的氣象に富ませ、しかも勇悍にさせたのであらう。

ついでにコルスなる名が、如何に優しく詩的なるかを記して置かう。口碑によると一匹の牡牛があつて、これがコルスに泳ぎ行き、他日非常に肥え太つて歸つて來た。それを見附けたのがコルスといふ一婦人であつた。そこで人々はその婦人を以て島の發見者開拓者同様に尊敬し、いつとはなしにこの島をコルス、コルスと呼びなして、遂にその名となつたとのことである。口碑や傳説は必ずしも信用すべきものではない。だが、いかにも優しくそして詩的であるから言ひ添へておく。

要するにコルスを一口に、そして平たくいへば喧嘩好きの人民である。この喧嘩好きの人民の間へ、移住したボナパルト家は、亦喧嘩好きのイタリー人ときてゐる。ナポレオンが天地震動の大喧嘩をやつたのも、畢竟は根が喧嘩好きのイタリー人の血を享けてゐる上に、喧嘩好きのコルスに育ちて、島人の感化を受けたからである。



## 一〇 ナポレオンの幼時(上)

『あの兒ときたら、それはもう將來の望みのない兒でしたよ。顔も兄のやうには奇麗でなく、頭といつたら馬鹿に大きく、目鼻立も他の小供のやうでなく、本當に無愛憎な小供でした。』とはナポレオンの乳母であつたイラリヤが、ナポレオン評である。人は己れの心鏡を以てその廣さ以上に、他人の心鏡の廣さを映すことはできない。人は己れの心泉を以てその深さ以上に、他人の心泉の深さを測ることはできない。

昔、信長は幼時、髪は茶筧に結び、紅糸、黄糸を巻き付け、腰には朱鞘の大刀を打込み、火燧袋をブラ下げ、そして口には柿や栗、さては餅の類を頬張つて、往來したものであつた。又その時は必ず従者の肩にブランコするのが癖であつた。そればかりでない、父の信秀の葬式に臨んで、抹香を攫んで靈前に投げつけ、塀の上から下往くものに放尿をする。又岳父の道三に會ふ時は、陰莖を畫いた羽織を着し、奇行至らざるなく、悪戯なさざるなしといふ體たらくであつた。

そこで臣下の面々は、もちろん遠近の人々は、織田の大迂氣と定評を下し、傳役の平出政秀も匙を投げて死諫するに至つた。しかもいづくぞ知らん、これは政秀を首め、織田の臣下の面々や、遠近の人々の心鏡心泉が、信長の心鏡の廣さを映し、心泉の深さを測ることができなかつたのである。當時一部の面々が、信長を迂氣といつたのは僅に迂氣らしき態度の一面を見たからに過ぎない。

ナポレオンの乳母がナポレオンを評して、將來の望のない小供であつたといつたのも、イラリヤが織田の臣下の如く、己れの狭く浅い心鏡と心泉でナポレオンを觀た結果である。その反證として左に二三の人のナポレオン評を記さう。ナポレオンの伯父の某はナポレオンが幼時小供にも似ず、事に處して何等遲疑せず、瞬間に言葉を構へて有利の位地に立つことに長じてゐることを聞いて、

『嘘を吐くから天下を治むるだらう』

と評した。ブリエンヌの陸軍幼年學校では、

『ナポレオンは主我的な野心に満ちた人物で、無限の向上的精神に富んでゐる。』



と一教官は評した。又視學官のケラリオは、

『この生徒には一條の光明がある、大に磨がいたがよい。』

といつた。ナポレオンの母のレチシアは、ナポレオンがまだ小學校に通學中、人一倍勉強するの  
で、大に將來を囑目して、ナポレオンの爲めに、特に別室を設けて勉強をさせた。伯父の某や、  
一教官や、さてはケラリオ、レチシア等が、かく見抜いたのは、丁度織田の臣下が信長を迂氣視  
せる間に、筑紫から來た旅僧が信長を一見して、他日天下を取るの器である、と感歎し、又齋藤  
道三が引見して、わが美濃は婚殿の引出物になつた、わが子孫は馬を彼れの門前に繋ぐであらう  
と慨歎した、と同じである。望み少しと見た乳母でさへ、ナポレオンの數學に堪能なものには驚い  
て『數學者』の尊稱を呈するを禁じ得なかつた。

ナポレオンは幼時、非常なヤンチャンであつた。いたづら小僧、悪太郎、茶目の統領で、漫畫  
小僧を遺憾なく發揮した。特に戰爭遊戲は最も好きで、喧嘩は飯の次といふ調子、又癩癩持ちで  
あつたことも尋常ではなかつた。彼れの幼時の事を詳記したものは乏しいが、諸書に散見するも  
のから抜いてみると、概見はできる。ナポレオンの物心づいての最初のいたづらは、洗禮の時の

ことであつた。一日レチシアは、ナポレオンの妹である嬰兒に、洗禮を受けさすため僧侶を自宅  
に迎へたが、ついでにナポレオンにも洗禮をといふことになつたところ、彼は頭に水かけられる  
のを嫌つて、

『厭だ〜』

と叫び、果ては怒つて暴れ出し、僧侶はもちろん親戚の人々の頭を、片ツ端から毆つて廻はつた。  
物の本にはこの事を彼れが二歳の時としてあるが、多分は四五歳になつてからのことだつたらう。

## 一一 ナポレオンの幼時(下)

ナポレオンは兄のジョセフとは能く遊んだが、よく喧嘩もした。小柄の彼れはいつも機敏に立  
ち廻はつて兄を泣かせ、そして兄に先を越して母にありし次第を訴へ、己れに利益あるやう陳述  
をしておく。ジョセフが泣く〜母の許に訴へ出る、とその都度ジョセフの方が却つて母から叱  
られるのが常であつた。ナポレオンは嘘をつきながらも、立ち廻はりが敏捷であつたから、人に



は断じてその嘘であることを覺らせなかつた。彼れは後年この時のことを回顧して

『自分は喧嘩好きだつたから、人を殴つたり怪我をさせたこと、度々あつた。けれどもはやい脚をもつてゐたから、現場を母に見とがめられたことはなかつた。元來自分は、何物も恐れない。みなが却つて自分を恐がつた。自分は兄を撲つたり、噛むだりした。兄が痛さに無我夢中でゐる間に、素早く母の許に行つて兄を訴へた。』

といつてゐる。

ナポレオンは、亦非常に強情な兒であつた。我慢が強かつたジュノー夫人はその一例を語つて

曰く

『或る日のことでした。ナポレオンは妹が伯父の畑で、果物を竊んで發覺した時、實は自分が竊んだと妹を庇つて、三日間押入に投げ込まれたが、それでもとうとう我慢を徹して三日の刑に忍んだ。こんな小供でしたから、鞭たれて涙を溢しながらも、決して御免なさいとはいひませんでした。』

この談は單に強情我慢を傳へたばかりでない。話中には妹の罪を引き受けるなど、義侠な味を遺

つてゐることが見えてゐる。強情で思ひ出すが、カール十二世は幼時極めて強情であつた。母后が一日太子のカールをつれてお寺詣りをしやうと、彼の室に行つて彼れを誘ふた。するとカールは悦ぶどころか、頭を振つて應じない。母后が理由を聞いてみると、彼れは斷乎としていふ『保姆やがこゝに坐らせた、歸つて來るまで動くなといつたから、動かないと約束した。だから母様の命令でも、この椅子は離れない。』と強情なこと約束を守ること、子供とは思へぬほどである。ナポレオンが妹のために罪を被て、三日間押入でゐどほしたのは、カール十二世の氣魄と同様であつた。一は妹のために罪をかぶり、一は保姆のために約を守る。事はちがうが心意氣は同じだ。

ナポレオンは喧嘩好きであつたが勉強も好きであつた。彼れはアジャシオにおいて、同地の小學校に入學すると、數學に興味を持ち常に優等の成績であつた。これがイラリヤのいはゆる將來の望みのない小供にできる藝當であつたらうか、乳母はこれがために彼れを數學者と尊稱したではないか。母のレチシアは庭の一隅に亭を設けて、彼れをこゝに入れて他の兄弟を避けさせ、そしてその特能を發揮させた。



こゝに至りて又わが太閤を想起する。彼れは幼時早くも俊敏な性質を露し、とても芋掘、みづ切で終はりさうになかつた。彼れの母は何とかして相當の教育を施したい、と彼れを光明寺に入れた。然るに彼れは喧嘩を好んで、勉學を嫌ひ、いくさごつこに日も足らず、戦争の話ときたら、耳を澄ませて聴くといふ調子であつた。寺ではこれを見て、持てあまし、丁度イラリヤがナポレオンを望みないものと見たと同様、見込のない少年と見做して、體善き言葉を構へて彼れを送り返した。太閤のこの點は、ナポレオンが喧嘩好きであつたと同時に、學問好きであつたのと違つてゐるが、ナポレオンと地を易へたら相同じであつたらうか。

ナポレオンは數學に堪能であつたが、太閤は經濟的特能をもつてゐたと見える。彼れは十五年にして生家を飛び出し、清洲に出で、縫針を仕入れ、これを賣りつゝ遠洲に至り、そして松下嘉兵衛に拾はれては亦その家の納戸役となつた。ナポレオンは數學的特能を學校において開發されたが、太閤は學校がなかつたので經濟的特能も教育的には開發されなかつた。ナポレオンは開發されて特能を發揮したが、太閤は開發されなかつたからその特能は生來の利發を自然のまゝに出した。ナポレオンは陶冶によつて立ち、太閤は生地のみで出た。

## 一ニ ブリエンヌ學生々活(上)

コルスの子ヤンチャン息子ナポレオンは、アジャシオの小學校で熱心に勉強し、非常にいたづらもして早くも十歳になつた。この時父母はナポレオンに適する業を考へて、軍人より他にはあるまいと信じ、時のコルス駐在司令官マルピユフといふものに推薦を願ひ、ナポレオンをシャンパーニュ州のブリエンヌに在る陸軍幼年學校に入學させた。これが實に千七百七十九年五月十九日のことである。これより先、ナポレオンはこの學校に入學準備として、三ヶ月ばかりアウトンの學校でフランス語を學んだ。でナポレオンがコルスを辭してフランスに渡つたのは、同年の一月であつた。

ブリエンヌの幼年學校は、ルイ十四世が貴族の子弟を教養せんとして、王費を支出して立てた學校であつた。その生徒はみな貴族の子弟だけに、又贅澤である。ナポレオンは貴族の子に違ひはないが、彼れはコルスの貧乏貴族の子である。パリツ子のチャキ／＼とは違つてゐる。贅をつく



さなればかりではない、風采も粗野、言語も島なまりときてゐるから、多くの生徒は申し合せたやうに彼れを輕蔑し、彼と一緒にならなかつた。ナポレオンは輕蔑され、齒されなければかりでなく、冷評の雨、侮辱のつぶてに遭ふこと度々であつた。

ナポレオンが島訛りで、自らナポレオンといふ、とその音が各生徒にはナポレオンと聞き取れず、ナポアイヨネと聞こえるので、各生徒は腹を抱へて笑ひ、遂にはこれを振つて、

『ラ、バイユ、オーネ』

と呼んだ。パイユ、オーネは鼻上の蕈といふ意である。かゝるあだなをつけて冷評するかと見れば亦

『屬國の貧乏貴族の子よ』

と頭ごなしに侮辱した。

ナポレオン、いかに偉いとはいへ、當時は小供である。かゝる冷評侮辱にどうして耐へられやう。入學後すなはち千七百八十年四月に、苦しき胸を打ちあけた一書を父のもとに送つた。その手紙は下の如きものであつた。

『父上よ、父上にして若し兒の名譽が十分に保たるゝやう、學費を給ふことが成り難いなら、何卒即時、兒を召し還へされたい、兒は到底只今の如き貧窮にては、學業を續け難し、殊に學科もできぬ癖に、金があるからとて、兒の貧窮を嘲ける無禮のやつばらと、ともに勉強することとは兒の堪へざるところです、速にブリエンヌよりお引取り下され、父上のお心のまゝに職工になりとして下さい』

職工になりとして下さい、とは何と悲しい聲ではないか。思ひ迫つて筆にした、この悲しい一句は、零丁孤苦、勉學を續けた、われらには餘人の知り得ない感じがする。定めし悲しかつたことであらう。しかしナポレオンにおいては、この悲しき音の底に、強烈な自負心が燃え、尊大な自主の念が潜んでゐた。この心念は彼れの手紙に迸發してゐるではないか。すなはち學科もできぬ癖に、金があるからとて、兒の貧窮を嘲ける無禮なやつばらとともに勉強することは、兒の堪へざるところです、とは彼れが強烈な自負心、尊大な自主の念の然らしむるところではなかつたか。父のシャルルはこの手紙を見て如何に思つたらうか。さぞ親心として泣かすにはゐられなかつたらう。けれどもシャルルはこれがためには彼れを引取るやうな子煩悩ではない。あくまでナポ



レオンを、不自由と戦はせつゝ勉學を繼續させた。

ナポレオンは叙上の如き境遇であつたから、己れも反撥心を起して、殊更に孤獨を好むの態度に出た。多くの生徒が戯れて遊んでゐる時に、己れは木陰や圖書室で、獨り讀書に耽つた。教師は彼れの讀書好きに感心して圖書の持ち出しを許した。彼れはこの特許を得る、と一倍精力を罩めて讀書に耽つた。従つて貸出係員から小言を頂戴することしばしばであつた。これは彼れが餘りに頻繁に借覽したからである。けだしこの時はもう書淫に陥つてゐた。讀書狂とならんばかりであつた。彼れはかくして果して何を讀みつゝあつたらう。主として歴史、傳記、哲學の書であつた。中にもブルタークの英雄傳、シーザーのガリア戰記さてはルーソーの作物など愛讀書として常に手から離さなかつた。彼れはギリシヤ、ローマの古代を知ると同時に、嚴格で勇敢なスパルタ人を好み、これを賞讃して口を絶たなかつた。そこで多くの生徒は亦彼れをあだなして『スパルタ人』と呼んだ。

### 一三 ブリエンヌ學生々活(下)

ナポレオンは讀書を好んで、篤學の幼童となつたのはいゝが、その結果憂鬱、陰氣な性質となり、激し易くなつた。一日彼れは何かの過失をして一教師から處罰されたが、その時憤激の極、母の名を呼んで

『おかあさま、おかあさま、あなたはいつぞや私におつしやつたでせう。人に屈してはいけません、頭は神さまにばかりお下げなさい、と』

と曰つた。この一言は彼れの激し易きを知ると同時に、又その強情をも知るに足るばかりでなく、母レチシアのユルス氣質が偲ばれる。ナポレオンの一言一行はこの調子であつて、他の生徒と大に違つてゐたため、自然校中の注目するところとなつた。或る教師はこの學校に

『彼れ——ナポレオン——は沈黙寡言で孤獨を好む、高慢で頗る自負心の強い兒童である。返辭は甚だ活潑——で即答剽切、要を得てゐる。彼れは主我的な野心満々の人物で、無限の向上



的精神に富んでゐる』

この記録を遺した。この記録はナポレオンを見抜いたものの手になつたものである。高慢で自尊心に強かつたことや、主我的で野心満々であつたことや、無限の向上的精神に富んでゐたことは、後年に至つて一層その度を強めた。

ナポレオンが孤獨を好んだのは、高慢心から來たものであるが、亦實に多くの生徒から排斥されたことが大に原因してゐる。そこで一人の知己があると彼は感謝の意を表して、親しくそれと交はつた。その知己は實にブリエンヌといふ少年であつた。ブリエンヌは多くの生徒がナポレオンを排斥するのを見て、ナポレオンに甚く同情し、鮑叔が管仲に對したやうにまでは、どうであつたかわからぬが、常に絶えずナポレオンの淋い冷い心の中に温い情を注いで慰めた。ナポレオンはブリエンヌに感謝していつた。

『君は僕を愛してくれる。』

と彼れはまことに嬉しかつたか、ブリエンヌには心の底まで打明けて、或時の如きは

『僕はできるだけ、フランス人を害してくれるよ。』

といつた。貴族の子弟から侮辱され、排斥されて恨、骨髓に徹せる餘りの一言である。ナポレオンの胸中には實にかやうな復讐心が燃えてゐた。こんなことまで打あける程にブリエンヌとは仲が善かつたが、果してナポレオンは後年ブリエンヌを召して己れの秘書官とした。

ナポレオンはブリエンヌの幼年學校で學べる科目中、平生何を好んでどういふものに優れてゐたかといふに、彼れは依然數學を好み、そして好きこそ物の上手なれで、數學にはいつも優等の成績を取り、校中抜群の譽を博した。これに反してラテン語やフランス文典は大嫌ひで、成績餘りに不良であつた。彼れは語學について下の如く曰つてゐる。

『動詞の第一變化はどの、第二變化はかうの、といつたとて、そんなことは知つても何の役にも立たない、死せる國語を學ぶのは無益の業だ。』

幼年の身で早くもかやうな一見識を具してゐたナポレオンは、偉人としてどこか幼時から異つてゐた。ナポレオンは偏に數學に専念したが、それがため數學教師からは特に寵愛された。これについて下のやうな話がある。ある日ナポレオンはちよつとした過失で一教師に處罰せられた。どんな處罰かといふに、教師はナポレオンに粗服を着せて食堂の入口に立たせたのである。ところ



がナポレオンはこれを非常な侮辱と考へ激昂の餘りその場で病氣になつた。通りすがりに見た校長は、教師が生徒の體質を顧みないで無暗に處罰することを詰つて教師を叱責したが、そこへ飛び込んで來たのは數學教師であつた。この教師はパトロールといつて有名な人であつたが、この體を見て大に怒り、わが數學の優等生を侮辱するとは怪しからぬ、と一教師に食つてかゝつた。

ナポレオンは數學においてその特能を次第々々に發揮し、見る見る驚くべき進歩をしめした。そこで五年後には、まだ適齡に達しないに拘はらず、パリーの士官學校の入學試験に應ずることを許され、これに應じた結果首尾よく及第して、ブリエンヌ幼年學校からパリーの士官學校に送られた。ナポレオンのパリ一行は千七百八十四年で、實に十六歳の時であつた。彼れが田舎のブリエンヌから、都のパリーに行くことゝなつた時の喜びはどうであつたらう。彼れはブリエンヌを出發すると、まもなく途上から一書を慈母に送つて曰く

『兒はホームルを懷にし、長劍を横へ、世界一統の征途に上る。』

とこれを見ても亦早くも矯々たる精魂、落々たる雄心が己に九昇回移してゐたではないか。

#### 一四 パリー學生々活(上)

ナポレオンはホームルを懷にしてパリに入つた。パリに入つた後のナポレオンはどうであつたらう。士官學校生徒としての新生活は、ナポレオンにどんな感じを興へたらう。士官學校のナポレオンは一言でいへば依然たるブリエンヌ幼年學校のナポレオンであつた。彼の周圍がブリエンヌ以上に彼れを冷遇したからである。士官學校の生徒はパリにあるだけ、それだけブリエンヌ幼年學校生よりも贅澤である。ナポレオンはブリエンヌよりも、ヨリ以上贅澤なところ來たのであるから、ヨリ以上不自由ならざるを得なかつた。そこでこの體を見た生徒達はブリエンヌの生徒以上にナポレオンを賤んだ。だがナポレオンは俄に我を折つて富貴の子弟に叩頭百拜し追従輕薄な態度をとることはしなかつた。彼れはその尊大倨傲な性質を彌が上にも凝り固め、孤獨を愛する念をますます強くし同窓の生徒達に遠ざかつてしまつた。多くの生徒が嬉しく楽しく遊んでゐる時、彼れはひとり運動場の一隅に陣取つて、空想に耽つてゐた。心中ではおれの意志



は他人の意志を制する、おれの氣に合ふものはおれについてくるがよい、と言つてゐた。これは彼れが後年、人に語つたところである。

この超然家であるナポレオンは、友人を選択するに當つてもナカ／＼に苦心した。懦弱懶惰な貴公子輩とは決して交はらなかつたばかりか、たまく友人がこれと交はる、とその不心得を戒めた。一日彼れは一友が悪友に誘はれて墮落せんとしてゐるのを見て慨然としていつた。

『君はいやな奴と交際するね、僕は君を善良に導かうと努力したが、君はいやなんだね、僕なんか斷じてあんな奴とは友達になれない、君は僕を採るか彼奴に寄るか、どつちかに決定したまへ。』

友人はこれを聞いてどう思つたか、一向に決定を語らない、依然悪友と交はつた。ナポレオンはこれを見て友人を捉へ

『君は僕の忠告を聽かないね、もう二度と口をきかない。』  
といつて、爾來その友人とは交を絶つた。

學究や浪人には得て絶交先生が多い、淺見綱齋の如きは絶交先生として有名な學者であつたが、

英雄の資を備へたものに潔癖なのは餘りその例を聞かない。ナポレオンの如きは稀れに在る潔癖の英雄であつたらうか。柳下惠に行かすして伯夷叔齊を慕ふの偉人であつたらう。

己れの意に満たない時は、多くもない友人とも絶交するほどのナポレオンは、その氣魄を以てコルスの愛護者となり、談、一朝コルスの事に及ぶと皆を決してフランス政府の對コルス横暴を叫んだ、會て陸軍大臣某がコルス征伐の主唱者であつたところから、彼は某の肖像を見ると憤然として引き裂いたこともあつた。彼れの憤慨は肖像ぐらゐで治まらぬ、彼れはその舌鋒を父のシヤールにまで向けた。彼れはシヤールがバオリーと別れてフランスに降伏したことを思ひ出すごとに己れの父たることを忘れた態度で、憤慨の餘り、甚くこれを攻撃した。或日の如き一友に對して曰く、

『バオリーは偉人だ、愛國者だ。彼れの副官でありながらフランスのためにコルスの議會に盡力した僕の父は、宥すことのできない變節漢だ。父は國の運命と共に死ななければならぬはずだつた。』

と彼れのこの熾烈なコルス熱は、苟もコルスを悪くいふものに出會せんか火の如くなつてハッ當



りに當つた。或るときの如きは教會で牧師某がコルス人を批難すると席にゐたナポレオンは赫となつて、

『コルス談を聞くために來たのではない、牧師輩がかやうな問題を捉へて説教するのは僭越の至りだ。』

と叫んだ。ナポレオンはコルスのためにしかく憤慨してゐた。そこで或る時は耐らなくなり、

『機至らば予はコルスへ走らう。バオリーと共にコルス救済に盡力しやう』

と揚言した。この揚言は口頭ばかりの揚言でなかつた。赤心の吐露であつた。彼れは革命時に際して數次コルスに歸つて獨立運動に従事した。ナポレオンが士官學校に在つて愛コルス熱に罹つてゐる、とボンチ畫に巧みな生徒は、ナポレオンが杖を携へてきつとなつて、あたかも「天南決<sub>レ</sub>皆故郷ノ山」といつたやうなところを畫き、その下に『ボナパルトがバオリー救助のために脱走するところ』と説明を附した。校長もうす／＼これを聞いてゐたが、生徒のボンチを見るに至つて、もしそれが政府や宮廷に知れたら由々しき大事とあつて、一日ナポレオンを呼び附け

『ボナパルトよ、お前は王室のお庇で勉強してゐるのではないか。それにコルスコルスといつ

てるのは、王室のお庇を忘れた態度だ。コルス熱を和げなさい、コルスはもうフランスの一部であつて獨立國ではない。』

と説諭した。けれどもナポレオンはこれを聞いて馬の耳に念佛ほどにも感じなかつた。あくまでコルスのために盡さうと決心してゐた。

### 一五 パリー學生々活(下)

父のことまで悪しざまに評して溜飲を下げ、校長の言ふことなど耳にも入れないナポレオンのその態度は、少年貴公子から擯斥された恨が大原因をなしてゐる。當時のナポレオンの日常生活は『極端に利己的だ、頗る自愛に富む、野心的だ、一切の方面に渴望してゐる、獨居を好む。』との士官學校の彼れに對する記録その儘であつた。孤獨、自愛の外に野心と渴望のあつたのは烈々たる功名心を有し、偉大なる希望を抱いてゐたことを説明するものである。これあるが故に、彼れは孜孜として勉學を怠らなかつた。これあるが故に、彼れは大精力を以て讀書を續けた。フラ



ンスの少年貴公子に對して『今に見ろ』との反撥心や負けぬ氣象を出したせいも、もちろんある。當時彼れの好んだ學科は依然として數學であつた。多くの生徒がラテンだ、ギリシヤだ、ドイツ語だ、と百舌鳥や鸚鵡にならうとする時に當つて、彼れは軍人に切要な數學を研鑽して止まなかつた。彼れのことだから百舌鳥や鸚鵡連の弱公子を見ては、胸中窃に『馬鹿々々語學で戦争ができるものか。』と嘲つたことだらう。

ある日のことであつた。彼れはドイツ語の課業時間に、その席にゐなかつた。ドイツ語の教師は一生徒に向ひ『ナポレオンはどうした』とたづねた。生徒『ナポレオンは今砲術試験最中です』教師は更に『ナポレオンには何か學び得たところがあるか』と問うた。生徒『先生はお知りになりませんかナポレオンは校中第一の數學生です』教師は感歎するかと思ひの外、失望の色を面に浮べて

『さうか、常に人に聞き、自分でも思つてゐるが、數學に堪能なものは馬鹿だよ』

馬鹿か、馬鹿か。己れの好むところに偏して、他人を測らうとする、このドイツ語教師のやうなものは、實に己れの愚を表白するものだ。古來語學に堪能で愚かであつたものは多いが、數學に堪能で愚かなものは聞かない。英雄得て數學に堪能だといふことを、ナポレオン以前の英雄について語らうなら、スエーデンから蹶起して全歐洲を震撼したカール十二世の如きはその一人だつた。カールは數學のことについては、「數學を知らないものは半人であつて決して全人とはいへない」といつてゐる。語學は英雄に附物ではないが數學が英雄に附物であることはこれでも知れる。數學は細心な思考力を養ふと同時に、緻密な工夫を凝らすによいものである。英雄が得て細心緻密なことは、この數學に特能があるからであらう。果してナポレオンはドイツ語教師の失望落膽したやうな馬鹿とはならないで、他日、その習ひ得た數學を應用して、全歐洲を震撼することカール十二世の上に出た。ナポレオンは他年一日帝座に在つて、彼のドイツ語教師を想ひ起し、侍臣に對して教師のひとつなりを評し、且つ己れを馬鹿だといつたことの當らなかつたことを述べて最後にいつた。

『きやつを今まで生かしておいたらおもしろかつたに』

明の無いものはみだりに人を批議すべきでない。みだりに批議してゐるとこのドイツ語教師の二の舞を演ずる。人物批評家歴史家はもちろん、いやしくも人を評せんとするものは、このドイツ



語教師に鑑みるがよい。

ナポレオンは數學に堪能な上に、文章にも長じてゐた。これは彼れが天才の然らしむるところであるが、また異常な讀書力のあつたことに原因する。多讀は彼れをして自ら文章を作るに妙ならしめた。彼れが幼少の頃の文章は、どんなものであつたか、士官學校の作文教師の言ひ傳へによれば、氣力があり、光彩があり、熱烈で誇張に富み、あたかも火中に熱してゐる堅石のやうなものであつたといふ。

要するに士官學校當時のナポレオンは、尊大倨傲、孤獨を愛し、良友を選び、讀書に耽り、そして文學に堪能であつたなど、すべてブリエンヌ時代において特長とされたところに是をかけたものであつた。但し特筆しておきたいものが一ツある。彼れが士官學校に入學する、と三百餘の生徒はさすがに貴族の子弟であるだけに、ほとんどみな贅を盡し、他日、國家の干城となるなど思ひも寄らぬ體たらくであつたが、これを見たナポレオンは、この懦弱な校風を革めんもの、と一の建白書を提出した。十六歳の少年が建白などゝは柄にもない遣り方であるが、早熟のナポレオンとしては、生意氣とも何とも思つてゐなかつた。傳記作者はこの建白書中に早くも彼れが成年時代の智識を見るといつてゐる。ナポレオン研究家の見のがせない逸事である。

## 一六 一躍して少尉となる(一)

顏淵、篤學といへども驥尾に附して行、ますく顯はる、と司馬遷は曰つたが、凡そ天下に赫赫の名を爲してゐるものはみな顏淵の孔子におけるやうなものでないものはない。ナポレオンは穎悟ではあつたが、士官學校の一生徒で、しかも新附のコルスの貧乏貴族である。彼れにして特に愛され、褒められ、揚げられ、獎められる人がなかつたら、その才の穎脱はむづかしかつたらう。彼れが幸にして穎脱し得たのは、實にアベ・レーナルと稱する一學者のあつたためである。

レーナルがナポレオンに對したことは、孔子が顏淵に對したやうであつた。ナポレオンはこの人に愛されこの人に頼り、そして校内にあつては諸教師に親愛され、校外にあつては諸名士の知遇を蒙ることゝなつた。かくて千七百八十五年九月彼れはメッツの砲兵學校の砲兵士官試験に應じ首尾よく及第して砲兵少尉となつた。十六歳の少年士官は、佛國でも珍らしいものゝ一ツであつた。



ナポレオンがその才學を認められ、この破格の試験を受くることになつたのは、實にレーナルのおかげである。父の死に由つて慈母奉養の義務が、俄に頭上に降りかゝつて來たことも受験成功の一ツであつた。

彼れがさきに『長劍を横へて世界一統の征途に上る』と意氣揚々、パリイに入るや、間もなく父は『長劍を横へて迎へに來い』と遺言して旅中に死んだが、この時彼れは父の死を以て神の命である、奈何ともしがたいと諦めはしたものゝ、同時に降りかゝつた慈母奉養の義務責任の一條には泣かざるを得なかつた。彼れがパリイの學窓から、はるかにコルス之母に寄せた一書に曰ふ『われらの慰藉となるべき人は、もはや母上一人となりました。父上の逝去がさうさせました。われらはます／＼母上に對する愛情を厚うし、母上が失はれた限り無き損失を、母上ができ得るだけ、失念されるやう盡力いたしませう。』

とたゞ一片の慰藉の手紙でなく、母上ができ得るだけ失念されるやう盡力いたしませう、とは實に奉養の義務を盡くして、慈母を辛き生活から救ひ、そして慈母をば、良人を失つた新愁裡からのがれさせやうとする孝心の吐露である。おもうてこゝに至ると砲兵士官に及第した一事は、レ

ーナルが推奨ではあるが、ナポレオンのこの孝心も亦大に手傳つてゐる。

幸運の神はナポレオンの決行を援けて、彼れを砲兵少尉にした。今やナポレオンは十七歳の少年だが、もう一人前の男である。少年士官ナポレオンは試験及第の翌月、早くもフランス駐在を命ぜられた。當時フランスにはラ・フェールの聯隊があつたが、彼れはこの聯隊附となつたのである。そして年俸は千二百法（わが四百八十圓弱）を給せられたが、この俸給は少尉の俸給としては、最高額であつたといふことだ。

ナポレオンはこの俸給の大部分を、故郷に送つて母の生計を助けてゐた。彼れは當時或る時は一日一食で濟ませたり、或る時は水とパンとで過したりしたり、居室の如きも書物の外に何もなく、頗る寂しきものであつたと傳へられてゐるが、これは少しく割引して聞かねばならぬ。なるほど彼れは平素儉約な性質であつたので、驕つた生活はしない。故郷への送金も事實であつた。しかし彼れは當時絶大の英雄の卵であつた。決して身すばらしい生活はしなかつたらう。その證據にはラ・カーズはナポレオンの當時の生活状態を記して、軍隊中には多少富裕な士官もあつたが、ナポレオンはその中でも最富裕な士官であつて、さながら大名の如き觀があつたといつてゐる。



る。

ナポレオンは當時盛んに交際社會に出入したため同僚から妬まれた。この點から見てもラ・カ  
ーズのいふところが眞に近いではないか。いかにナポレオンがゐらかつたといつても、水とパン  
で暮すやうな、身すぼらしい生活をしてゐては、交際社會は必ずこれを歓迎しなかつたらう。全  
く故郷への送金のため、己れの生活には不自由したに違ひない、苦痛を感じてゐたことは事實で  
あつたらうが、後人の傳ふるやうなものではなかつたらしい。貧乏といふも程度であることを知  
らなければならぬ。

### 一七 一躍して少尉となる(二)

ナポレオンはとかく同輩から、憎まれ嫉まれるたちの男であつたが、その代り先輩長者からは  
甚く愛された。同輩に憎まれ嫉まれたのは、彼れの才智が同輩に超邁し、彼れの尊大な點が同輩  
の癪となつたためである。その嫉まれたことには種々の原因のあることであるが、ワランス當時

に在つては、畢竟するに先輩長者の愛を一身に鍾めたからである。

ナポレオンはワランスに至るや、當時交際社會の花形であるコロンビエ夫人とて、五十ばかり  
の老婦人に甚く愛された。そしてこの婦人からワランスの交際社會へ紹介され、たちまち交際場  
裡の年少士官となつたが、ナポレオンを愛して彼れを交際社會に引き入れたのは、コロンビエ夫  
人ばかりでなく、夫人から紹介されたサン・ルフといふ人もその一人であつた。ナポレオンが交  
際場裡にもてはやされると、同僚の嫉妬はいよ／＼ますます／＼激しかつたが、幸に明察な司令官ド  
ルチユビーといふ人があつて、この人の公平な態度に頼つて、何等事なきを得た。

ナポレオンが一面交際社會に立ち、他面勉學を怠らず、長き日も短く暮してゐる間に、恩人の  
コロンビエ夫人の死に接した。夫人の將に死なんとする時、丁度革命が起つたが夫人は病床にこ  
れを聞いて、ナポレオンの身上に想到し、今や息の絶えんとするに際し、一語を遺して曰つた  
『年少士官ナポレオンは、その身に不幸がなかつたら、きつと大事を爲すであらう』  
とこの豫言は的中した。コロンビエ夫人も亦尋常婦人ではなかつたか。

コロンビエ夫人には一人の年頃の娘があつた。ナポレオンはこの娘と親しく交つたが、その交



りは遂に尋常の交りに終らず、生れて以來初めてする戀の交はりに陥つた。だがなぜか月下氷人は、この二人の戀を遂げさせなかつた。嬉しい初戀が成就しない間に、悲しい初戀にしてしまつた。ナポレオンがフランスを去るに至つたことが二人の戀の成立しなかつた原因である。

ナポレオンは後年リオンにおいて、この娘を見たが、彼れは直に娘を引見して舊誼を録する心持で『望があらば何でもかなへてあげる』

といひ、その娘の希望を容れて、皇后附の女官とした。ナポレオンがコロンビエ家を思うて忘れなかつたことは初戀した娘のあつたためばかりではない。實にコロンビエ夫人の知遇を感謝してゐたためである。彼れは死に至るまで夫人を忘れなかつた。死に至るまで感謝してゐた。夫人が自分を年少の時に引き立て、早くも自分を上流社會に結び附けたこの一事が、いかばかり自分の運命開拓に功があつたか、實に測り知られぬものがある、とは彼れが後年しばしば口にして感謝に代へた言葉であつた。

ナポレオンはフランスにおいて、樂い交際社會に遊び、嬉しい戀を夢みつゝも、軍隊における職務と性來好きな讀書とは毫も怠りなく、職務は人よりも忠實に、讀書は人よりも熱心で、讀

書の如きはフランスに三年間在勤中、その地の圖書館の藏書を読み盡くしてなほ足らず、再びこれを繰り返して讀んだ、と彼れ自ら公言してゐるくらゐである。かやうな讀書家であつたから、彼れはわざわざ遠くから書を取寄せてまで讀んだ。

ナポレオンの當時の愛讀書は例に由つて政治、文藝、哲學、歴史、傳記等であつた。彼れは文藝、歴史を愛讀するばかりか、劍を持つ手で筆を執つて、創作編纂を試みた『コルス島史』と稱する大冊を編纂したり『エセックス伯』と題する脚本をも創作したさうだが、なほ『幸福論』といふ長文の論説もある。これはリオンの學士院に出した懸賞論文で、頗る堂々たるものであつた。

ナポレオンはその勉學に由つて、學界の光彩といふ讚辭を得たが、筆硯は彼れの終世の目的でない。彼れはやはり劍を以て立たうと決してゐた。軍人で徹うさうと決心してゐただけに、その國を思ふの念は人一倍強烈であつた。彼れは當時非常に多感性となつて、何事にも感じ何事をも悲しみ、煩悶し厭世するとふ少年士官であつた。故郷コルスのことを思ひ出しては、身も世もあらぬ心地して、悲觀の極は死を望むの傾向さへ見えた。千八百八十六年五月に書いた彼れの雜記は悲憤と厭世とを織りませた痛烈な文字である。『……われ今故國に入らんか、我が眼前に展開



するものは何ぞ、同胞は鐵鎖に繋がれて震恐しつゝ、壓制者の毒手に接吻してゐる。彼れ等はや勇敢なるコルス人でない。佛人よ、汝は實に貴き我が國民性を奪ひ、且つわが國固有の道德を腐らせた。われコルスの現状を思ふごとに、これに對して回天の偉業を得ざるわが無力を怨み、且つこの境遇は亦われを驅つて心に好まず、むしろ卑めつゝあるものに從つて、これを尊敬しなければならぬことを慨歎する。職務上とはいへ、實にかやうなことは予の忍びないところである。これ予が世を辭せんことを欲する唯一の理由だ。』とは、當時ナポレオンが如何に故國のために煩悶しつゝあつたかゞ解る、と同時に佛國を憎む心のいかばかりひどかつたかゞ知れる。このいらだしい心は遂に二三ヶ月の後、彼れに故國の地を踏ませた。それは制規の賜暇を利用したのであつた。

## 一八 コルス獨立運動(一)

ナポレオンが山紫水明の故國コルスに歸つたのは九月であつたが、實に七年振で故山の土を踏

んだのである。そのよるこびはいかばかりであつたらう、それは察するに餘りがある。錦を衣て故郷に歸るとは彼れのことだ。十六歳で士官となり、十八歳で博學の名を取り、その年を以て故國に入つたのである。これこそほんとうの錦衣の姿である。しかし彼れは當時過度の勉強のため神經衰弱症となり身體の如きは瘦骨嶸々としていかにも貧相に見え、風采甚だ揚らなかつた。そこで彼れが心に着た錦を認むるものも、その風采には失笑を禁じ得なかつた。後年ジュノーの夫人となつたその女の妹の如きは、長靴を穿いた鬼の化物が來たとまで冷評した。けれどもこの鬼の化物は、ボナバルト家に取つては命の親であつたから、歸來、一家の喜びは非常であつた。母のレチシアは良人に別れて以來、細き煙を立てつゝひたすらにナポレオンの立身を念じてをり、家兄のジョセフも彼れに一目をおき、彼れの出世して一家の柱とならんことをこひねがふてゐたことゝて、彼れが歸つて家に入る、とたちまち一家は希望の光りを仰ぎ見た。火の消えたやうな家に俄に温い空氣が漂ふた。ジョセフは當時の事を叙して、『家弟は暇を賜ふて歸宅した。彼れの歸宅は慈母のため、余のために大なる幸福であつた。』といつた。ジョセフは元來僧侶にされやうとしたほどの男で、極めて優柔のものであつたから、なほ職には就かないで家に在つて、母の手



助をするぐらゐに止まり、三男のルシアンは通學の身であり、その他の弟妹も亦母に絆はる頑是  
ないものに過ぎない、その上、父の遺した桑樹開墾地の特許は取消され、鹽田に對する政府の補  
助金は下附されず、ために實業はバツタリ中止となり、ルシアンは月謝にも窮してゐる矢先に、  
ナポレオンは歸宅したのである。一家が冬枯れに思はぬ花の咲いた心地がしたのも道理である。  
シヨセフが母のためにも、余のためにも、大なる幸福であつたと叙したのは、さもあるべきこと  
ではあつた。

ナポレオンは才氣煥發の少年士官のことゝて、賜暇で歸つて家に在つても、一家の整理に着手  
し、亡父の遺業の開墾地や鹽田の事について政府に歎願書を送り、果てはわざ／＼パリイまで出  
かけて行つて、政府に陳情したりした。この陳情は無効に終はつたけれども、彼れが家のために  
奔走したありさまが推測される。賜暇の期限は一年と九ヶ月であつて、ほとんど二年に彌つた。  
隨分長日月の賜暇ではあつたが彼れは家のために奔走して寧日がなかつたから、案外短いもので  
あつた。期日が盡きやうとするころ、彼れはフランスに歸ることゝなつたが、當時所屬のラフェ  
ール聯隊はオーゾンヌに移轉してゐたから、彼れはオーゾンヌに入營した。これ千七百八十八年

六月のことである。彼れはこの月から翌年九月まで非常に讀書したが、同時に筆を執つて著作の  
事に従つた。前記の Kors 島史やその他の創作は大抵この時に書いたものであるさうな。

翌千七百八十九年九月、彼れは復び賜暇を得て故郷に歸つた。この時、佛國の天地はもはや従  
前の天地でない。この年七月、パリイにおいて暴動が起り、その暴動は延いて全國に互り、各地  
に暴兵暴徒が横行し、遂に一大革命となつて、政體はなほ一變しないが政治は既に革命黨の手に  
歸してゐた。この非常の時に際して入郷した彼れは、どんな偉圖を抱いてゐたらう。當時僅に二  
十一歳の年少ナポレオンは、その年齒は弱く、その體軀は矮く士官とはいへ、一小僧たるに過ぎ  
なかつた。だがこれは外見だけのことである。彼れの學問や彼れの識見は實に非凡であつた。學  
國の人心が革命を謳歌しつゝある時に當つて、彼れは革命の悲惨に慨き、無益に殺されるものゝ  
ために泣き、革命が必至の數であることを看取りつゝも、その害毒には攻撃の舌を禁じなかつ  
た。故郷に在つて這次革命の魁首であるジャコピン黨を攻撃し、これがためには演説をもし、文  
筆をも弄した。しかしながら當時の彼れの意圖といへば歸するところ Kors の獨立に在つたので  
ある。



## 一九 コルス獨立運動(三)

ナポレオンは故郷に在つて、獨立運動のために骨折つた。だが、その目的を達しきらない間に賜暇の期限が過ぎたので、またオーゾンヌに入營することゝなつた。これは千七百九十一年二月のことである。この時の彼れの生活は、弟のルシアンを食客にしてゐたので、甚だ困窮してゐた。こんな境遇にあつても彼れがコルスを懷ふことは一日寸時も廢しない。その年の夏第一中尉に陞進し、秋に入つて暇を賜ふところゝに三たびコルスに歸つて獨立のために畫策した。當時コルスには先年獨立運動に失敗して、英國に遁れてゐたパオリーが歸郷して、島主的權勢を揮つてゐたため、彼れは思ふ存分の行動ができないで、頗る苦慮した様子であつた。パオリーはコルスの義人として島民は神の如くに崇め、ナポレオンも亦曾てはこれを尊敬してゐた。それが今何故合はなくなつたのか。別段深い事情があつたわけでもなさうだから、英國式と佛國式の氣風の衝突でもあつたらしい、パオリーは英國氣質、ナポレオンは佛國氣質である。ナポレオンはフランス

を好かない、フランスを惡むこと甚しかつたが、でも多年フランスにおいて教育を受けたことだから知らず識らずの間に佛國氣質となつてゐたので、尊敬しつゝあつたパオリーに一とたび相ひ會ふて、その英國氣質に接すると厭氣がさして來たらしい。パオリーと行動を共にすることのできなかつたのはこんなことのためであらうか。此の氣風に原因して分離したのは、彼れとパオリーばかりではない。島民中佛國に接近して來たものは擧つてパオリーに反對してナポレオンに附いた。そこでコルス島はナポレオン派とパオリー派の二つに分かれた。かやうに分裂しては獨立運動がうまく捗るわけではない。この時ナポレオンは一方の旗頭となつて、パオリー派以外の行動を取り、獨立運動を繼續したが、思ふやうに行かないうちに、佛國政府から軍藉を除くとの通知に接した。これは彼れが賜暇の期限を経過したのに、入營しなかつたからである。一方には獨立運動意の如くならず、他方には除藉の通知を受けたためナポレオンは終に浪人となつてしまつた。ナポレオンはたちまち大に困窮したが、しかしそんなことでヘコたれるナポレオンではない。パリに行つたら亦浮ぶ瀬もあらうとはるゝパリイに出かけて行つた。當時パリイは革命騒動の最中であつた。青年浪人ナポレオンはこのさなかにおいて、パリイの宿舍に貧窮と戦ひつゝ、出



世の機會を捉ふることに汲々としてゐた。その間に革命黨はチュレリーの王宮に闖入し普墺の聯合軍はバリーに薄らうとし、延いてはコルスの動搖をも見るに至つた。コルスの動搖は場合が場合だから、佛國政府はいたく恐慌し、遂に本國同様の權利を附與することにして、コルス人の獨立熱を緩和しやうとした。この時ナポレオンは政府のこの處置を見て

『フランスはその懷を我等のために開いた。我等は今後佛國と同様の利害休戚を感ずるであらう。今や我等と佛國を隔絶するものは青き海水ばかりである。』

といつて、昨日までのコルス獨立運動はどこへやら、今日はもうコルスを一地方と見做し、コルス愛國心を擴充してフランス愛國心としてしまつた。心が向けば機も至る。機會は彼れに三たびコルスの地を踏ませた。この年は千七百九十二年であつたが、彼れは年の七月十日に思ひがけなくも、フランス政府から大尉に陞ぼすとの通達に接し、同時にコルス駐在を命ぜられた。彼れを大尉に陞し、コルスに駐在させた政府の意は他でない、彼れがコルス人であるから、これに恩惠を施してコルスの動搖を防止しやうとしたものであつた。

## 二〇 コルス脱走 (上)

千七百九十二年七月、命を受け、十月コルスに歸つたナポレオンは、國民軍の司令官としてアジャシオ市に駐在することゝなつた。然るにコルスはフランス政府からフランスの一部とされ、フランス同様の權利を附與されて自由の國民となつたに拘らず、動搖なほ熄まず、彼れの才智を以てするも、これを制することができなかつた。これはフランスの革命黨がルイ十六世を幽閉してその政權を握り、加へて殺戮を事として慘忍な振舞に及んだからバオリー等の憤慨するところとなつたせいである。バオリーは褊狹だが、仁人であり、義士である。故なく人を殺すやうな、いはゆる殺を嗜むものには、たとひ、その目的が己れの目的と同一であつても、斷乎としてこれに反對する人であつた。それ故革命政府の亂暴を憤つたバオリーは、力足らずして獨立することができないなら、むしろ島を擧げて英國に併合されやう、と丁度ナポレオンの歸つた當時は、その畫策に腐心してゐたところである。ところが折りも折り、フランス議會はルイ十六世及び皇后



を斷頭臺上の露としてしまひ、又バオリーをも捕縛しやうとしたので、コルス島民は激昂し、バオリーは擧島の人民に擁せられて獨立を宣言した。革命政府がバオリーを捕縛せんとするに至つたは、ナポレオンの弟のルシアンが、バオリーを弾劾してバオリーを島主たらしめんとする謀叛人だ、と言ひ觸らしたことに基因する。ルシアンが何故バオリーを弾劾したかといふに、これについては人は傳へていふ。ルシアンは當時十八歳の少年だつたが、バオリーの秘書役とならうとして、その願容れられず、遂にそれを根に持つて、弾劾するに至つたのだ。とこれだけを聞けばルシアンなるものは、卑劣な小人に過ぎない、筆に上すも汚ららしいが、それは全部さうかと信ずることはできない。バオリーは義人である、仁者に相違ない。だが、その性、褊狭で識は乏しく、理性よりは感情で動き、且つは當時獨立して島主とならうとして成り得ないことを知ると英國に併合されやうとまでしつゝあつた人である。謀叛人ではないまでも賣國奴たることは免れない。ルシアンは彈劾なるものは毫も虚構捏造したものではない。ルシアンを以て直に卑劣の人物とはいへない。

コルスが獨立すると同時に、災難はボナバルト一家にふりかゝつてきた。コルス政府はナポレオン兄弟を叛逆人として捕縛し、且つボナバルト一家を追放しやうとした、コルス議會はそれを決議した。母のレチシアはこれを聞くと先づナポレオンと兄のジョセフとを逃がした。兄弟は變装して逃げたが、度胸の据はつてゐる母は、幼兒と共に家に在つて、追放の命令の來るのを待つてゐた。夜に入つてナポレオンの友人のコスタといふ男が駆けつけてバオリーの軍隊がこの家を襲撃せんとしてゐる。一刻も早く逃げなさいといつた。レチシアは幼兒をつれたまゝ、取る物も取り敢へず家を抜け出て、沈々たる夜色に彩られた闇路をはるかに海岸へと落ちて行つた。

## 二二 コルス脱走（下）

落ちていつたレチシアは、二夜を海岸に明かし、三日目に佛國船に遭うて辛らうじてその船に乗せてもらつた。一足先に逃げたナポレオンは、母の身の上が案じられて、途中から引き返し、大膽にも復びアジャオへ入らうとした。途中まで追蹶して來たコルス兵に出會して危機眼前に迫まつた。敵はナポレオンを見つけて、包圍しやうとする。ナポレオンは海岸の一筋道において逃



れる餘地もない。まゝ天に任せとばかり、ドブーンと逆巻く怒濤の中へ飛び込んだ。運命の神が、もしも彼れを見放してゐたら、彼れはこの時海魚の腹中に葬られたのであるが、幸運の神は彼れを永劫の海路から引揚げた。佛國船がこれを見て救助したのである。これが實に千七百九十三年五月のことである。

ナポレオンのコルス駐在は、こんな事件に際會したため佛國政府の期待に反いた。ナポレオンはツーロン上陸後、一家を擧げてマルセーユに至り、そこで穴藏のやうな見すばらしい家を借りて住ひ、ジョセフを油會社へ、ルシアンを雇奉公に出し、己れは軍藉に附いて一日も早くこの窮困から脱しやうと奔走した。けれども物事は右から左と思ふやうに行くものでないから、彼れの奔走はその効なく、ために朝はバンのかげ一つで済まずといふ憐れな身の上となつた。孟子が「天此の人に重任を下さんと欲するや、先づ其の心志を苦しむ」といつたのは、ナポレオンのこの境遇などをいつたものであらうか。人は天から苦しめられることはむしろ幸福である、人は天から苦しめられる間、なほ前途に光明があり、希望を繋ぐことができるのだ。天とは神ではない、自然の環境だ。果してナポレオンは光明を得た。マルセーユに暴動が起つたことが、ナポレオンに

取つて大なる光明であつた。時は後世九十三年といつて革命の恐怖時代として、みな人の記憶してゐる年のことであるから、暴徒もなか／＼猖獗であつたが、ナポレオンは一揆鎮定を願ひ出で、志願かなつて何の苦もなく鎮定してしまつた。これから彼れはツーロンを攻撃し、パリを鎮定し、イタリーを征し、エジプトを夷げ、執政官となり、皇帝となり、それから世界一統の大理想、敢行の赫々たる鴻烈とはなつたが、露國に大敗するまでは、大概はトン／＼拍子で行つた。

ナポレオンがこの天地に生れ出で、社會の人となり、功名の園に一步を踏み込むまでの経歴は、ほゞ以上で叙しおはつた。これからいよく研究の課題に入つて、彼れの結婚、彼れの機智、彼れの戦術、彼れの政治など數題目を叙述しやう。

## 二二 フランス革命回顧(二)

いかに技倆があり、識見があつても、これを用ふるに足る、時と處とを得ないと草莽市井に朽ちてしまう。ナポレオンが草市に朽ちなかつたのは、時と處とを得たからである。處とは何であ



る、コルスの小島を思ひ切つてフランスの大國に出たことこれである。時とは何である、ルイ十四世の政の弊が十六世に至つてその極に達し、遂に大革命となつて、英雄豪傑が爲す有るに足るの時となつたことこれである。今やコルスの青年士官はフランスといふ大船に乗りこみ、大革命といふ巨浪に樽した。マルセーユの暴動は、彼れに取つては船出を祝する順風の一陣であつた。指して行くへはいはすもがなだが、この機會において少しく大革命といふ巨浪を一顧しておかう。

文雄韓退之は、物平ならざれば必ず鳴るといつたが、この一句は革命なるものを抽象的にいつたものである。革命は實に平ならざるが故に起るのだ。しかもそれは經濟的機構の崩壊に原因する。一定の生産關係に矛盾が生じて、そこに不平衡の現象が見られてくる。それが終に革命とまで押し及んでゆくのである。フランス革命はブルジョアが封建政治を打倒したものであつて、ツマリ石臼の破壊に原因する。

歐洲の中世紀は、文明がまだ四邊に光被しなかつた時に當つて、西ローマが亡んだので蠻民が四方に横行して殺戮、掠奪、強姦等々を事とし、社會は解體されて、秩序といふものが少しもなかつた。これを鎮壓して秩序恢復を圖るには勢ひ武力が必要であつた。必要のところに物は生ま

れる、英雄豪傑が競起して、武力を以て暴民を鎮壓し、各々國中に國を立て、秩序の維持に努力した。これが封建制度である。フランスは中世紀の變亂の影響を蒙つたが、さすがは大國だけであつて、その國は滅びず、封建が國內に布かれただけで済んだ。ところが、その後近古に至つて、時勢の進歩が地方的封建の持續を許さず、時勢の要求は中央集權を促し來つた。文明の發達が、國民の發展觀念を従來の對國內から對國外に一轉させた結果である。

アメリカ發見の如きは、觀念一轉の大原因であつた。中央集權は實に國民の要求であつて、要求するところに物は供給される。そしてこの封建制を打破して、集權の政を布くに適當した君主が出現した。それはルイ十四世である。ルイ十四世は英傑であつた。彼れは民意を代表して封建を打破し、以て集權の政を布いた。ルイ十四世は權力を集中し、この權力を以て國利民福を計つたが、最初封建を打破した時、その小君主を處分するに當り、これに社會上の特權を與へて優遇した。この特權なるものは、小君主の政權と引換へるに、必要なものであつた。僧侶も亦當時政權を持つてゐたため、王はこれに對して貴族同様特權を與へてその政權と交換した。この特權なるものが、後世、大革命の一原因とはなつた。嬰兒が母の腹から出た時は、既に一步を死境に近



づけてゐる。ルイ十四世もそのやうに、封建を打破して貴族僧侶の政權を奪取した時、既に一步をルイ王朝の轉覆期に近づけてゐた。特權とはどんなものであつたか、彼れ等を社會の第一階級に置き、これに遇するに名譽と利益と官職とを以てした事だ。貴族・僧侶はこの特權を利用して、社會上に跋扈すると同時に、大地主として勢力を張つた。これをわが國に例を取るなら、過去・現在が酷似してゐる。明治維新は浦賀における黒船の巨砲一發に驚いて、舉國の人民が對外觀念を起し、この觀念を起すと同時に、中央集權の必要を看得し、遂に式微の極に在る皇室を擁して封建を打破し、以て政權を中央に集めて、一段落を告げたのであるが、その後各藩主を華族として、社會階級の上位に据ゑ、これに與ふるに名譽を以てし、これに食はずに利益を以てし、以て皇室の藩屏として優遇するに至つたため、今日では一方には大地主として、他方には社會の上級者として跋扈しつゝあるではないか。事情は東西如何にも能く似てゐる。日本にはたゞこれと同列の僧侶の**ないばかりである**。僧侶がないのは足利氏の末に當つて信長、秀吉がこれを討伐し、既に政權をその手から撈ぎ取つてあつたからである。

### 二三 フランス革命回顧(三)

ルイ十四世の時、社會上の優越者として跋扈しつゝあつた貴族・僧侶は、ルイ十五世に至つてその跋扈が極點に達し、社會の害毒物となつてしまつた。故に社會は舉つてこの階級人を人に非ずとし、同時にこれを驅除することをしない王室を以て怨府とするに至つた。かくて十五世も崩じ、十六世の代となつたが、この時は最早中央集權の弊が政府と國民との間に積重して、破裂せざるを得ざる事情となつた。政府においては集權の政のために膨張した財政が紊亂し、國民にあつては集權の政のために拂つた犠牲的租税に困倒し、搗てゝ加へて司法は滅法、行政は亂暴といふ有様であつたから、これには政府も人民もともに苦んだ。なぜ司法行政が滅法亂暴であつたかといふに、これは少しく解説を要する。當時フランスの司法權なるものは、バールマンと稱する獨立の高等裁判所の手に在つた。しかしてその裁判官なるものは、從來支那・朝鮮あたりで行はれたやうに、金で買つてなれる官であつたから、悪い事をするやつはこの官を買つて、これを利



用しつゝ金儲をし、權勢を恣にするのである。一口にいへば悪い酷吏の集團である。かゝる有様であつては、政府が手を焼くのはもちろん人民もたまつたものではない。然らば行政の方はといふに、これ亦その長官たるものは貴族である。あだかも明治初年頃、各藩主を縣令などにしたやうなものであつたから、長官なるものは何にも解らない。いづれもこれを屬官任せにして平氣である。そこで行政の實は少しも擧らず、むしろ紊亂腐敗を見るばかりであつた。かくの如く財政と司法と行政との三ツに苦しめられてゐる人民はあはれなものである。心あるものは義憤の念にたへない。果せるかなこれが警鐘は思想界から始まつた。英國から自由言論を舶載して來るものがあれば、亦自國で自發の學説を發表するものもあつて、思想界は鼎の沸くが如くであつた。元來、貴族、僧侶なるものが、人の風上に立つてゐられたのは、宗教的感情、歴史的觀念に基づいてゐたからである。だからこれを打破するには、この舊式の感情、空疏な觀念を一般人民から取り去らねばならぬ。これを取り去るには、科學と哲學の力に待たねばならない。そこで學者は科學と哲學とを以て宗教と歴史の打壞に全力を傾注した。ルーソーやモンテスキューやコンドルセーはその優なるものであつたが、新思想を懷抱して革新を希望しつゝある牧師の如きも、平民に

同情して煽り立てたから、思想界は洋々浦々に至るまで、鼎の沸くが如きありさまとなつた。加へてアメリカ共和國建設成功の報を齎らすものがあり、且つはこれに應援した闘士が續々歸國して、共和國の美を語つて更らに一層煽動したので、天下の人心はみな共和を夢み、革命は必然の勢となつた。

天下の人心が革命をおもふの時、ルイ十六世はチウルゴーを起して財政整理を始めたが、業半ばにも至らぬうちに、チウルゴーを免職した。これはチウルゴーの整理改革に由つて、不利益を蒙むるものゝ讒奏に原因する。チウルゴーの後に、クリウーニーが藏相となつて、チウルゴーの計畫を打ち壞したが、彼れは十ヶ月ばかりで死んでしまつたので、今度はネツケルといふ銀行屋が藏相となつたが、この男は消極主義の男で緊縮政策の外に何事もなし得ず、末に至つて少しは改革を企てたが、貴族僧侶から打落された。ネツケルに次いで出たのが、シロンヌといふ男であつたが、この男も貴族黨から追ひのけられた。そこで今度は大僧正のド・ブリエンヌといふが用ひられたが、このブリエンヌの時に於いて、有名な三部會を召集することに決定した。三部會といふのは第一部貴族、第二部僧侶、第三部平民から成立せる國會であるが、これはフランスに昔



からある制度で、久しく召集されなかつたまでのものだつた。この時これを召集するに至つたのは、何故かといふに、カロンヌの時召集した名士會なる議會において、ラファイエットがこれを言ひ出したので、それに由つたものであつた。ブリエンヌは三部會に期待するところあつたが、この會の開會前に免職となつたので、この會の開かれた時の藏相は、再任のネッケルであつた。

#### 二四 フランス革命回顧(三)

千七百八十九年五月五日、三部會はベルサイユ宮殿の廣間で開會の式が擧げられたが、翌日から貴族部と僧侶部は、各々自分勝手に分立したので、第三部は大に憤り、自ら稱して國民議會といひ、六月二十日には議員一同テニスコートにおいて、憲法制定までは斷乎として解散しないと誓約した。これが第一に揚がつた革命の火の手であつた。王とネッケルはこれを聞いて大に驚き、この誓約を取消させやうとしたが、もう及ばなかつた。二十三日の議會では、王が退場の後、式部長のド・ブレイゼーが、第三部に退場を命ぜんと

『諸員は陛下の命令を聽いたらう』

といふと、場の一角から猛然起つて雷のやうな聲を放ち

『さうだ、われ／＼は人々が王にいはせた言葉を聞いた。だが君は議會における王の機關ではない。君はこゝに座席も發言權もない。君は勸語についてわれ／＼に注意すべき人でない、去りたまへ。君をこゝに來させた人々に言ふがよい。われ／＼は國民の意思に由つてこゝにをるのだ、銃劍の力でなければ放逐はされない。』

と叫んだ。この聲は實に天がこの人をして發せしめたものであつた。この時もしこの聲がなかつたら、議員は王命に従つて退場したか知れない。もしこの時退場でもしやうものなら、人民御し易しとなされ、革命はなほ數年の後になつたかわからぬ。かゝる危機一髪の間、勇躍するものは偉人である。この偉人は何人であつたか、フランス革命史上に特筆されてゐるミラボーであつた。實に彼の雷の如き聲はミラボーの聲であつた。式部長は喫驚して退いた。政府は職工を派して、傍聽席や玉座を取り壊しにかゝつた、議長はこれを一喝して止めた。王は仕方なく

『去らぬなら棄て、おけ、朕は朕と議員との争ひのために、一人でも死者を出すことを好まぬ。』



といつてそのまゝ放任し、次いで貴族、僧侶をこの三部に合はした。だが、王の爲すところは朝變暮改である。たちまちにして貴族の獻策に聽き、兵を以て議會を威嚇せんとし、ネツケルを廢し、ブローリーといふ武斷家を用ゐた。全然專制的態度に出でんとしたのである。パリーの市民はこの陰謀を聞くとひとしく不安の念を起し、ネツケルの免職が傳はると同時に一齊に立つてバスチーユ攻撃を開始した。これが七月十四日のできごとで、革命の第二の火の手であつた。

バスチーユといふところは牢獄であつて、王宮でもなければ政廳でもない。然るにこれを攻撃したのは何の故であつたか、それは同志の呻吟を救ふためであつた。群集は前日來武器店に闖入し、武器を貯藏せる廢兵院にも押寄せたが、それらの武器で武装して繰り出した。そしてバスチーユを攻撃して陥落させた群集は、三色旗を打振つて凱歌を奏したが、この暴動にはわが日比谷事件のやうな秘話がある。

日露戦争直後の日比谷事件には、彼の暴動中に金を撒いて煽動したものがあつた。その散金者はハッキリわかつてゐるが、今しばらくおあづかりにしておくとして、バスチーユ攻撃の當時の散金者はオルレアン公であつた。日比谷のは時の政府に對する腹癒せに過ぎなかつたが、オルレア

ン公のは彼れがこの機に乗じて天下を取らう、すなはち王様になりすまさうといふ野心からであつた。だから人民は彼れの散金を好意を以て取らなかつた。それは別として王はこの體たらくを聞いて大に驚き、ネツケルを復職し、且つ親しく議會に臨んで人心を鎮めた。人心は鎮まつたが、これがために王の権力は全然失墜して、政權は議會の手に移つてしまつた。然るにこゝに又東京に焼打があると必ず地方へ感傳し、大阪、神戸と順次擴がつて行つたやうに、パリーに事があるとならず地方へ感傳したが、この時の感傳は大したもの、殆ど全國に互つた。やまと新聞の支局、さては小寺某の邸宅を破壊したやうな、そんな些細なものではなく、全國における貴族の家屋敷を破壊してしまつた。貴族僧侶は面食つて遂ひに八月四日夜、租税平等、賦役廢止、宗教税廢止等、舊來の貴族僧侶がもつてゐた特權全廢の法案を議會に提出した。これは貴族僧侶の大讓歩であるが、實は降参したのである。ところが日本に反動團體なる偽忠君偽愛國者のあるやうに、フランスにも當時この手合が多くあつたので、その後ベルサイユ宮殿で、軍人に宴を賜つた時、彼の手合が勤王論を辯じ立て、王に媚び、軍人に一時の興に乗じて革命の三色旗を踏み蹂ぢらせ、それがために又もや大騒擾が持ち上がった。三色旗踏み蹂ぢることがパリーに傳はると、パリー



市民は、王は亦たしても兵力を以て彈壓政治を行はんとする準備にとりかゝつたを怪しからぬとばかり一齊に起つてベルサイユ宮殿に押し寄せた。これが十月五日のことであつたが、この時の先鋒は實に土方人足等自由労働者の女房共であつた。ベルサイユにおいては、王と王后マリー・アントアネットは大に困り、かへつて人民方のラファイエットに救はれて、辛うじて脱出した。この時王后は寢衣のまゝであつたといふから、いかに不意打を食つたかゞ想像される。

## 二五 フランス革命回顧(四)

王室の權勢がかく失墜するに反比例して、人民殊に下層民の勢力は隆々として昇り、これを代表せるマラーやダントンやロベスピエール等の羽振りが著しく善くなつてきた。案外溫和なミラボーはかへつてこれを憂ひ、王室を保全して立憲君主政體を確立しやうと骨折つたが、思はしく行はれず、その中に病んで死んだので、心から王室を保全しやうとするものはなく、これに反して議會の方では日々に極端な法案を決議するのみならず、王に薄つてその信仰心に反することを

もさせやうとした。これには王はとても耐へられないとあつて、外國に脱れて外國の力を借る外はない、と王后をつれてバリーを遁亡した。これが實に千七百九十一年六月二十日の夜のことであつたが、不幸な時には思ふやうにならぬもので、王一行はバレンヌといふところまでおちてそこで捕へられ、罪人扱の下にバリーに送還された。これは人民が王の計畫を感附いたためである。議會は王が歸來するとこれをテウレリーの宮殿に押し込めて、王權を中止し、九月十九日に至つて新定の憲法承認式の時に引出して承認させ、その日から王位に復した。同時に議會も解散して立法國民議會を召集した。この憲法といふのは、極端な三權分立説を基礎としたもので、實際に施すに至つて不便の上なく、それがため王も困れば議會も困つた。こんな次第であつたから共和主義のジロンド黨が入閣して、天下を取ると王を廢するために外國と戦争しやうと計畫した。同時に王后は亦共和主義を撲滅するために外國と開戦しやうと陰謀を企てた。そこで表面は君臣一致で宣戰を布告した。これが千七百九十二年四月二十日のことであつた。

ジロンド黨といふのは、初め労働者を煽動して、そしてその力に頼つて革命を遂げたものであるが、實は中流以上の財閥であつて、財閥を基礎とした政治を爲すに過ぎない。だからダントン



やマラーの統率せるジャコビン黨すなはち労働者の一派はつとにこれに反対し、マラーの如きは『階級的貴族に勝つて、黄金的貴族に蹂躪されるとは、とんでもない儲けものだ。』と絶叫し、ダントンは亦

『われらは革命を遂行した。代價を受取らなければならぬ。』

と主張した。だから對外戦争には反対であつたが、戦争は権力者が一致して布告したのであるから、たちまち開かれてプロシヤとオーストリアの聯合軍が押し寄せて来る、これを邀撃する國防軍は國境指して進軍する、といふありさまとなつた。然るに六月に入つてジロンド黨内閣と王と衝突して内閣が瓦解した。原因は憲法に規定した僧侶のことに關してであつた。憲法には僧侶に不利益な規定が多かつたから、僧侶はこれに服従しない、ジロンド黨内閣はこれを王に奏して、王の命で服従させやうとしたところが王はこれを肯かないで、かへつて憲法上の中止権を利用して、中止したものだから内閣は瓦解したのである。だが王が中止権を利用する、と今度はジャコビン黨が承知せず、ダントンの如きは王宮威嚇の計を講じ、パリ市長のペチオンといふものに、市民を集めて示威運動をさせた。王は亂民がチュウレリーの宮殿を襲うて来る、と自若として

『朕は決して憲法を犯かさない、朕は憲法の命するところに従つてした。汝等こそ法を犯すものではないか』

といつて亂民の爲すがまゝに任せたので、亂民は張り合が抜けて引揚げた。この時であつたナポレオンはパリに在つて、この體を觀て大に憤慨し、下のやうにいつた、

『馬鹿奴、きやつらはナゼ暴徒を内に入れたか、砲彈で四五百も追ッ拂らつたら、あとはみな亡げるだらうに。』

きやつらとは王宮護衛の兵をいつたのである。ナポレオンはかういつたが、彼れは王黨かと思へばさうではない。彼れは革命黨であつた。たゞし彼れは秩序もなく暴れ廻るものを憎んだ。だから彼のやうな激語があつたのだが、この一語は彼れが武斷家の本性をあらはしたものだ。

## 二六 フランス革命回顧(五)

王が斷乎として所信を枉げないので、ジャコビン黨は更らに勢をつくつて、非常手段に出でや



う、と七月十四日にバスチーユ陥落の記念祭開催を名として、案内状を各地に飛ばした。各地から馳せ來つた中に、ブレストとマルセーユの労働者が合せて三千人あつた。マルセーユの労働者は、マルセーイエーズをうたつて駈けつけた。マルセーユの労働者は、いづれも熱狂漢で手の附けられない連中ばかりであつたが、日本でいふと神戸か門司の仲仕といったやうな連中であつた。マルセーユの労働者の着到はジャコビン黨にとつて非常な勢力となり、同黨は爲に各黨を凌駕し、記念祭には王も臨席する有様となつた。然るにこゝに間もなく又もや王とジャコビン黨の衝突が起つた。原因は墺普の聯合軍が攻め入ると同時に、威嚇的宣言を散布したが、その宣言にフランス人が王室に對する亂暴を責め、速に降下しないと國都を粉碎するとあつたことである。愛國心の強烈なフランス人のことだから、この宣言に大に激昂し、今はもう内争してゐる時でない、舉國一致、外敵にあたらなければならぬ、とジャコビン黨は、ジロンド黨やその他の黨と聯合して、外敵を防いだ。この時ジロンド黨は好機逸すべからず、と國民の興奮を利用して王政顛覆と出かけた。こんな場合にいつも先鋒となるのはジャコビン黨である。ジャコビン黨は各黨と合して眞先にチュレリー宮殿を襲撃した。これが八月十日のことであつた。王はこれを防戦するため、

多くの死傷を出すのは道に背いたことだと言つて何等爲さず、親ら議會に行つて身の保護を請ふたがその時下の如くいつた。

『朕は罪惡を防がうと思ふてこゝに來た。』

ルイ十六世は亂民に對するといつてもこの態度である。この態度は王者としてはさうあるべきだが、さりとしてそれなら表裏なくこの態度を一貫してゐたかといふに、決してさうでない。王は時々小刀細工をやつた。現に外國の力を借つて、人民を彈壓しやうとしたところなどは、小刀細工の著例である。餘りに智慧のない行り口の一ツである。ナポレオンはこの時もチュレリーの王宮やその近隣の珈琲店に在つて、この光景を觀てゐたが、この時の感想は例に由つて亂民に同情せず、むしろ王に同情したやうであつた。その夜、兄の許に發した手紙には

『もしも王が馬に乗つたなら、勝利はその手に在つたらう、予は今朝の感想に由つてさう斷言する。』

と書いてある。

議會に行つた王は、議長のベルニオーの手に頼つて保護されることになつたが、この機會にお



いて議會は解散し、憲法制定國會の招集を決議した。議會が解散されると同時に、内外多事のをりからとて、爲政は一日も廢することができないので、爲政に従事するもの手に権力は移つた。すなはち政權はパリ市廳に移つたのである。そしてその月二十八日に、ジャコビン黨は市會の援助機關と稱してパリ委員會なるものを起し、この會の力を以て市會を壓伏し、市會の權力をその手に收めてしまつたが、それと同時に恐嚇政治の幕を開けた。先づ王黨の新聞の發行を禁止し、王黨員を牢獄に投じ、暴徒亂民に金を與へて、一時にこの入獄者を殺したが、その數三千近くに及んだ。次で翌千七百九十三年一月には、國會の決議を以て王の死刑を宣告し、王を斷頭臺に上せた、王は刑場に臨んだ時、左の如くいつた

『フランス人よ朕に罪は無いぞ、朕は朕を弑するものを許す、あゝ神よ、朕の血を以てフランス人に禍させたまふな。』

これより先、王は刑の宣告を受けて太子と別れる時『決して父のために仇を報する心を起してはならぬ。』といつたが、これといひ彼れといひ、一も善言ならぬはない。ルイ十六世はかやう善言を吐く善人であつた。だが王は優柔不斷な後人齋で、王后や策士の手に乗つて、國民を彈壓する

に當つて、外國の力を借り、かへつて國を誤り、邦家に禍した。故に議會が與へた罪名は、國民に對する叛逆といふのであつた。日本でいふなら、往時のいはゆる天皇御謀反である。國民に對する叛逆といふ罪名は法律にはなかつた罪名だらうが、でもルイ十六世は、この罪狀の動かすことのできないものがあつた。法律にはない罪名ではあるが、國民から制裁を與へたものと見れば合理的ではある。ルイ十六世から百四十四年前、英國にルイ王同様の刑弑があつた。それはチャールス一世である。チャールスは策略を弄して、國家を誤まる王であつたことは確證がある。國民の代表たる議會は議會に對する謀叛といふ罪名の下に處刑した。罪名は當を得たかどうか知らないが、國家を誤らうとした事實は掩ふことのできないものがあつた。前にこのチャールス一世があり、後に彼のルイ十六世があり、そしていづれも共に同一の運命に陥つた。歴史は繰返すと

いふ語に多少の眞理はある。

この時ナポレオンはコルス駐在を命ぜられて、コルスにゐたが人に書を寄せて

『國會は確に罪惡を犯した、予は何よりも、より以上にこれを悲しむ。』

といつた。ナポレオンには「一夫の紂を誅するを聞く、未だ王を弑するを聞かない」の論理がわ



からなかつたのだ。

## 二七 フランス革命回顧(六)

王をまだ幽閉してゐるころであつた。フランス軍は愛國熱に驅られて外敵を拒ぎにかゝつたがその勢は非常なものであつて、塙普の敵軍を撃退すること竹を破るが如く、遂には勝に乗じてプロシヤに攻め入り、ベルギーをも取つた。従つていさゝかお調子に乗つた革命黨は、一の宣言書を外國に撒布した。その内容は暴君を廢して、自由を得んとする國民は、フランスが援けるといふのである。ルイ十六世を殺したのは、この宣言を發した後であつたから、諸外國ではさては彼の宣言は威し文句ではなく、全然共和主義を世界に施かうとするのであつたか。かやうな國民は一時も早く撲滅しなければならぬ、と君主國たるイギリス・オランダ・スペイン等が普・塙と同盟してフランス攻撃に取りかゝつた。さしにも勝ち誇つたフランス軍もこれには衆寡敵せずして段々に撃退され、内へ内へと退却する。これに反して外敵は中へ中へと進撃する。これを見たジャコ

ピン黨は大に憤慨し、國家危急の時である、速に外敵撃退の策を採らなければフランスは滅亡する。外敵を撃退するには統一ある行動をしなければならぬ、それをするには、反對黨を撃排して天下を取らなければ駄目だ、といふのでダントンやロベスピエールやマラーが畫策して、國會乗取りと出かけた。その方法は先づ群衆に國會を包圍させ、そして市會の命令を以て國會からジロンド黨員の引渡を請求し、否應なしに捕縛してこれを牢獄に打ち込み、以て國會の權能を左右し、一方には亦十二名から成る、公安委員會といふものを以て、政府的政務を取り、なほ革命裁判所なるものを設けて、國事犯を裁判した。ジャコピン黨は裁判所を自由にし、公安委員會を手のものにし、國會をも左右したので、司法・立法・行政の三權を握り、こゝに始めて統一ある政治外交が行はれることになつた。

かうなると元來が主義主張で立つてゐるジャコピン黨のことゝて、することなすことがてきばきして、ドシ／＼渉が行く、外に對しては精銳の軍を以てあたり、内に對しては威力を以て壓伏したので、内は治まり、外には勝ち、このところジャコピン黨萬歳の體であつた。然るに王黨ジロンド黨の落武者が、各地方において動もすれば謀反を企て、地方民を煽動する、シャルロット



コルデイといふ、花の如き少女を憤起させて、マラーを刺させたことや、英國と呼應してツィロンを占領したやうなことはその一例である。ジャコピン黨はこれら反對黨の根を絶ち葉を枯らさなければいつまでも天下に禍するので、大英斷を以て殺戮すべく、恐嚇政治の幕を開いた。この幕が開かれるとパリイでは、革命裁判所がいやしくも國事犯の疑あるものは、ドシ／＼拘引して即決裁判を以て刑場に送り、刑場ではこれを特設の斷頭臺で殺してしまふ。それが殆ど毎日のやうに續くので、王黨やシロンド黨やその他いやしくもジャコピン黨に反對するものゝ殺されること數千人、これに地方へ派遣した委員が、溺殺、銃殺したそれらの數を加算すると實に莫大なる數に上つた。王后マリー・アントアネットや、かつては革命のために盡力したローラン夫人は、この恐嚇政治の幕があいてから殺されたが、ローラン夫人の如きは、刑場にひかれゆく途上で、有名な自由像を眺め、思はず歎聲を發して

『あゝ自由よ、いかに多くの罪惡が汝の名において行はれるか。』

といつた。この恐嚇政治は、千七百九十三年四月から、翌千七百九十四年の七月まで續いたが、この間においてジャコピン黨中に、勢力争が起り、同志相ひ打つてマラー以後の三巨頭の一人たる

エベール及びその派がダントン派に殺されダントン及びその派が亦ロベスピエールに殺されロベスピエールも亦ジャコピン黨と中立黨のために刑場に送られた。この巨頭がなぜ相次で殺されたかといふに、これはジャコピン黨が反對黨を殺戮して、敵黨を失つたため當然起り來る勢力争ひに基因したものである。尤もダントンには多少の同情すべき點がある。彼は實際家であつたから餘りに殺を嗜まぬ方であつた。エベール及其派を殺したのも、エベール等の恐嚇政治を防がんとめであつた。然るに過激派はエベールに止まらず、ロベスピエール派の如きも亦過激派であつたから、ダントンはこの派から殺されてしまつた。ではロベスピエールが殺されたのは何故かといふに、これはもはや人心が殺戮に飽いたから、これを嗜むものを殺して、防止しなければならなくなつたからである。果してロベスピエールが死ぬと同時に、恐嚇政治の幕は閉ぢられた。

## 二八 フランス革命回顧(七)

恐嚇政治の幕が閉ぢられ、年も改まつて千七百九十五年となる、と千七百九十五年の憲法なるも



のが新定されて、總裁政府ができ上つた。この政府は五人の總裁と六人の國務卿とから成立つてゐた。これより先、ロベスピエールの殘黨や、地方或は國外から歸來せる王黨や、ジロンド黨がこの新憲法に反對し、國民がその憲法草案の承認不承認の投票に就いて捫着してゐるところに附け入り、特に王黨がその人民を煽動して、チュレリー宮の國會に、一大示威運動をさせた。政府はバラと稱する將軍に命じて、その運動を防止させたが、バラはこの時、これをナポレオンに委託した。ナポレオンは當時浪人してパリにゐたが、バラに委託されると、これを引き受けて、たちまち追ひ拂つてしまつた、その方法は容赦なく大砲を浴せたのである。ナポレオンのこの果斷な處置に頼つて、王黨の謀叛を挫き、總裁政府はいよく確立されたのであるが、この總裁政府は和共政府であつたが、五人の總裁が絶對權力を以て支配したから、寡頭政治のやうなものであつた。かやうな政治はいつまでも都合よく行くものでない。唯一の缺點は無能であつた。五年の後には國民一般が愛憎を盡かして一新を願ふた。當時埃及に遠征中のナポレオンは、遙にこれを聞いて潜行して本國に入り、兵を以て不意に起つて、國會を解散し、政府を顛覆し、又新に憲法を作つて第一コンシユール(執政官)となつた。これが千七百九十九年の十一月九日であつたが、

世界史上未曾有の大事件であつたフランス大革命はこれを以て終りを告げたのである。

顧みればフランス大革命は、千七百八十九年テニスコートで、第三部の議員が憲法制定の誓約をしたことに始まり、千七百九十九年ナポレオンが政府を顛覆して、天下を取るに至つて終るまで、その間十年を費してゐる。その由來、原因、結果を考察するに、由來は中世以後の制度に在り、原因は財政の紊亂と國民生活の痛苦とに在り、そしてその結果は、ナポレオンが第一コンシユールとなつた時の憲法に頼つて、階級制度の打破と平等主義の發揮となり、且つこれを世界に及ぼすことを得たのである。相當の代價を拂へば相當の物は得られる。フランス革命は多くの犠牲を拂つた代りに、民主的國家を贏ち得た。こゝに至つてダントン、マラー、ロベスピエール等の行事を決して悪いとばかりはいへない。

ミラボーの如きは穩健な政治家であつたが、それがためにか彼の主義理想には徹底したものがなかつた。これに反してダントン、マラー、ロベスピエール等には、二十世紀の今日世界が認めて採用しつゝある社會政治の理想があつた。ロベスピエールはいふてゐる『われらの要求するところは權利の平等である、なぜならば權利の平等がなければ、自由も幸福も得られない』又いふ



『社會はその組織せる個人に對して、生活を助くるの義務を有する、勞働を與へよ、勞働することのできないものには、生活に必要な物を供給せよ。』とこの言は實に高き理想の一端を披瀝したものである。マラーとダントンも同意見であつたが、これあるが故に彼れ等は一世の人心を風靡し得たのだ。かゝる高き理想を有するものが、何故彼の酸鼻すべき恐嚇政治を敢てしたか、當時の狀勢已むを得ざるものがあつた爲めである。すなはち一方には敵頻りに薄り、一方には王黨ジョロンド黨が、隙を睨つて政權を奪取せんと待ち構へてゐる。故に敵に當らんとすれば、先づ反對黨を葬むつてしまはなければならぬ。ジャコビン黨は先づ後門の狼を殺して、前門の虎を拒いだのである。王黨がしばし陰謀を企つるはもちろん、ジョロンド黨が後來ジャコビン黨を利用しては背負投を食はし、利用しては背負投を食はすこと、幾度であつたか數知れぬほどであつた。丁度ジョロンド黨なるものはわが國における原敬時代の政友會の如きものであつた。他黨を利用して背負投を食はして平氣でゐた。ダントンやマラーやロベスピエール等のジャコビン黨が反對黨の一切合切を刑戮したのはかやうな事情からであつたから寛恕すべき點がないでもない。特にマラーの如きは、千人を殺して萬人を濟ふが人道だ、と主張したぐらゐるだから、人を殺すにも一種の主義を以てゐた。この思想は東洋にも在る『人を殺して人を安んぜば、これを殺すも可なり』とは司馬法の記するところではないか、二十世紀の今日悲惨な戰爭を敢行するのも、この思想に基くのだ。司馬法の記するところを是とすれば、マラーのいふところも亦非とすることはできない。但し帝國主義戰爭は、別である。それは決して人を安んずるものでもなければ、人を濟ふものでもない。

禪ノ所謂殺人劍は人劍に更ニ妙味アリ

## 二九 小説的結婚(一)

人世結婚ほど奇なるものはない。ナポレオンとジョセフィンヌとの結婚は實に小説的でほんとうとは思はれぬほど奇話に富んでゐる。

丁度千七百九十五年穡月十三日、ナポレオンがバリーにおいて暴徒を大砲で追拂つた時であつた。十二三の愛らしき少年が彼れの屯營に來て

『おぢさん、おとうさんの劍を返して頂戴』



といった。ナポレオンはその愛らしき少年の顔を見つゝ

『剣だ。阿父さんとは誰れか。坊やの名は何といふのだ』

と問ふた。少年は

『僕はユゼーヌ・ボーアルネーです』

と答へた。ナポレオンは、さては、この兒は恐怖時代に死刑に處せられた、ボーアルネー將軍の兒だなど覺り、手許に在つた將軍の遺劍を取つて

『さア、やるぞ。』

と少年に手渡した。少年はその劍を見て父を思ひ出し、シク／＼啜りあげ、果てはワツと泣き出した。多感なナポレオンは少年の涙に動されて貰ひ泣きしつゝ、少年をいたはり慰めて歸した。

それから二三日過ぎてからであつた。年こそ三十の阪を越してはをれ、天のなせる麗質は人を引見して、先づその清爽な容姿に驚かされ、美人が面はゆげに口を開いて

『先日は小供が伺ひましてお邪魔を致しました、その節は亦亡夫の遺劍をお還しく下さいまし

てありがたうござります』

と一禮するに至つて、ナポレオンの心臓の鼓動は變調を呈して來た。容姿の清爽、辭令の巧妙、ナポレオンが第一に氣に入つたのである。彼れは美人としばらく語り、美人を送つて、後姿に恍惚となり、この日からして戀なるものに陥つた。この美人も亦當日ナポレオンを訪れたのは、小供の事に關する謝禮のためばかりでなかつた。美人は幼時から一種の迷信を抱いてゐた。この迷信が彼れを驅つてこゝに走らせたのであつた。迷信とは何であるか、美人はその幼時豫言者や賣ト者から、成人の後必ず皇后となる運勢をもつてゐる、といはれたのを眞面目に信じ、今なほそれを忘れなかつたのである。故にユゼーヌが劍を持ち歸つて、母にナポレオンの事を語る、と美人は俄に例の迷信に胸を衝かれ、その極、熱心にナポレオンの容貌は如何に、風采はどうであつた、口の利きやうは記憶してゐるかなど、ユゼーヌに問ひただし、さて胸に手を當てゝ、もしやこの人が他日皇帝となるべき人かも知れないと考へた。考へると同時に、一目見たしとの念に矢も楯も堪らなくなつた。これがナポレオンを往訪した實情であつた。ところがそののち美人はナポレオンと結婚することができ、豫言に由る希望どほり皇后陛下となりすました。この人こそ



有名なジョセフィンヌである。ユゼーヌが遺剣を取りに行つたことが、直接原因になつてゐるか  
ら、ユゼーヌは二個の戀人の橋渡しであつた。ユゼーヌが剣を取りに行つたこと、ジョセフィン  
ヌが迷信に驅られて駈け附けて成功したことは、まことに小説的であるが、しかもそれが事實で  
あつたことは、後年ナポレオンが人に語つた、その自言が證明する。その次第の自言を記さう。

『千七百九十五年穡月十三日のことであつた。十二三の少年が予を訪れて、亡父の遺剣を還し  
てくれと請ふた。この少年が即ちユゼーヌ・ポーアルネーである。予は少年の心根に感心して、  
その請求に應じてやつた。すると少年は遺剣を見て悲しくなつて泣き出した。予もこれには貫  
ひ泣きした。ところが二三日の後の事だが、その母と稱するものが、又予を訪ねて来て、ユゼ  
ーヌに對する予の好意に對して謝意を述べた。これが予がジョセフィンヌを知つた、そもく  
の初めであるが、その時の彼れの物腰格好から、優美な心榮といつたらなかつた。實に予を深  
く感じさせた。予が彼の女と結婚するやうに決心したのも、實はこの時の感じが、次第々々に  
嵩じた結果である。』  
とそれからジョセフィンヌの迷信のことについては、下のやうにいつてゐる。

『彼れは豫言者や賣卜者の言ふことを信じてゐた。彼れは幼時、人から御身は幸運の子だ、皇  
后になるよ、と豫言されたが、少しく目の明いたものはみな彼れの人となりを知つてゐた。故  
に彼れは後年度々予に語つて曰つた。初めあたしはユゼーヌが歸つて來ての話に胸を驚かせま  
した、わたしはこの時からこれが幸福の身の上となり、豫言者の言葉が事實となる吉兆であら  
う、と見てゐました。』

小説的結婚成立の次第が、疑ひもなく事實であつたことが、ナポレオンのこの自言によつて知  
られる。

### 三〇 小説的結婚 (三)

ナポレオンとジョセフィンヌの結婚の典禮は相ひあふてから七ヶ月目すなはち翌千七百九十六  
年二月九日にバリーで擧げられたが、婚約はその前ナポレオンが『運命に』と彫刻した指輪に由  
つて間もなく結ばれてゐた。



ナポレオンのこの結婚を邪推して、人々は彼れがジョセフィンヌの財産に目を着け、ジョセフィンヌの四圍に氣を配り、この財産とこの交際とを踏臺にせんとて結婚したのである。最初からジョセフィンヌに對して、何等愛はなかつたと酷評した。今もなほさういふものがあるが、それは當を得てゐない。ナポレオンの家弟のルシアンルシアンの記するところに據る、とジョセフィンヌには遺産といつてはなかつた。交際も男子との交際はあつたが、貴婦人なんかとのそれはなかつた。當時ジョセフィンヌとの結婚を以て、ナポレオンが遺産や交際に目をくれてのことだと酷評したのは、嫉妬・邪推に原因するものであらう。後世の史家が依然これをいふのは踏襲式觀察に過ぎない。この結婚はナポレオンのジョセフィンヌに對する戀着心、とジョセフィンヌの迷信的希望とが相ひ合せる結果に外ならない。ナポレオンは交際上手でない。尊大で傲慢で人づきの悪い男であつた。しかし婚約當時は既にパリー駐屯司令官である。山の神に引廻されなければ、人に知られなかつたり、交際の得てできないやうな、そんな憐れなものではなかつた。稽月十三日に大英斷を以てまたくまに暴動を撃退したので、その名は天下にかまびすしかつた。ましてやその前前ツローンの役において偉功があつて、識者の間に知られ、更に溯れば士官學校卒業後、已に名士

間に非凡の人才として認められてゐた。かやうな男が何を苦しんで駟馬的根性を出して、一婦人の尻を追ひ廻はさうや、もしもジョセフィンヌの尻の光りを追ひ廻はさんとしたものだつたら、きつと、ほんとうにもつと光りの大きなジョセフィンヌを選んだらう。ケチな卑劣な、根性を以て大英雄の意衷を忖度するなどは、青い眼鏡で物みな青しといふの類だ。

ナポレオンがいかにジョセフィンヌを戀し、いかにジョセフィンヌを愛してゐたかそれは彼の手紙や自言が證明する。千七百九十六年七月、彼がイタリー遠征中マルメロで認めて、ジョセフィンヌに與へた返しの手紙に

『お手紙に接して喜悅に勝へない。そなたと分れて以來、一日も楽しき日を見ず、そなたの接吻と涙と口説とが、始終わたしの胸中を往來してゐる。かやうな類ひ稀れなジョセフィンヌの魔力は、燃え立つ焰となつてわたしの心を燒き盡さんとしてゐる。あらゆる塵の世の苦しみから脱れ出で、そなたを愛する外、他事なき閑生涯に入りたいと考へてゐる。そなたを愛せる赤心を證據立つるため、そなたの側に在つてそなたと樂むの日は、いつであらう。誠にそなたと初めて相ひあふてからこのかた、そなたを愛する心、一日は一日より深くなつてきた。これ



は戀は咄嗟に成るとのラブルユーエルの言葉の偽りであることを證明するものだ。さうはいふものゝ、少しくそなたの缺點を示されよ。美しくならず、可愛ゆくならず、しとやかならず、かくてやかず、泣かぬやうに、まことにそなたの涙はわたしの思量を晦し、わたしの血を沸かせる。』

とある。熱烈、火のやうな艶書とは、このやうなものをいふのだらう。更に同年十一月ヴェロナで認めたものを見ると

『わたしはもうそなたを愛しない。むしろ憎む。そなたは馬鹿だ、音信を絶ち、良人を思はない。そなたの音信が良人に取つて多大の慰藉であることを知りながら、何等たよりをしない。甚だ怪しからぬことだ。一體、昨今何をしてゐるのか、良人のために文書くひまさへないとは、どんな重大事件が起つてゐるのか。最愛の妻よ、わたしはそなたの音信を受けないでは、心配に堪へないのだ。速に何とか言ひ越して、わたしに放念させよ。わたしは近く双手を以てそなたを抱き締め、幾千の接吻を交はさうと楽しんでゐる。』

とある。ナポレオン將軍、甚くチン／＼を起したと見える。いかにも白熱的だ。艶文中での放膽文とでもいふべきものだらう。太閤が『そもじをもそばにねさすべく候』と淀君に送つたのとは大分熱度が違つてゐる。艶書ばかりひねくつてゐる當世の若き燕連中も、この艶書には三舍を避けるだらう。

### 三一 小説的結婚 (三)

ナポレオンがジョセフィンヌを愛することは尋常でなかつた。彼れがジョセフィンヌに與へた火の如き艶書は、現今傳ふるものばかりでも數十通あるが、讀む人はみな中てられる。

彼れはジョセフィーヌを愛する極、相ひ會ふて楽しく語りたいが山々で、イタリー遠征中の如き、遙々ミランの陣中に呼び寄せた。當時これを見てゐた人の話に、その愛情の濃厚なこと蜜の如くであつたとある。前掲のマルメロからの手紙の如きは、彼れがジョセフィンヌをミランに遺してマンチュアに進撃した時のものである。

ナポレオンがこの世に愛すべきもの、たゞジョセフィンヌの外にはないやうに、あらん限りの



愛情をジョセフィンヌの上に注いだため、ジョセフィンヌも亦これほど大切な主人はない、と思ひ込んでナポレオンを大切にした。彼れがナポレオンから受けた愛情について、その叔母なる人に言ひ送つた書簡に

『わたくしは何事をも望む暇がありません、わたくしの望みは良人の望みです。良人は神を拜するやうに日夜わたくしを仰いでゐられます、世の中廣しとは申せ、かやうに善き良人はありますまい』云々

とある。然らばナポレオンはいふところの妻ノロジイかといへば、決してさうではなかつた。彼れはジョセフィンヌに對して頗る嚴格であつた。帝位に即いてゐた時の如きは、ジョセフィンヌの友なる何何夫人などいふのが、ジョセフィンヌを訪問するのを厳しく監視し、その友が善良なものでないと斷乎として出入させなかつた。ジョセフィンヌが義理ある人だからといつて、ある人を出させやう、と請ふたが、それでも斷じて許さなかつた。それがためジョセフィンヌもナポレオンも共にこれらの婦人から悪評を立てられたが、ナポレオンはそんなことには少しも頓着しなかつた。これらが丹次郎でないところである。

ナポレオンとジョセフィンヌとの結婚は、遺劍一件から相思の仲となつて、心々に結ばれてゐたが、表面の媒介者はバライ將軍であつた。バライはナポレオンの偉才を見込んで、さきにバリイの暴動鎮定をナポレオンに委托した將軍である。

このことを證するにはジョセフィンヌが結婚前、人に與へた一書がある。

『わたくしはもはや客氣に驅られるほどの年ではありません、ナポレオンがどんなにわたくしを熱愛するとも、その愛情が果していつまで繼續するか、結婚後愛情を失つて冷遇を受け、且つわたくしの醜に代ふるに、他の美を以てせらるゝ時は、それはわたくしのとても堪へざるところであります。不幸にしてかゝる時節を見んか、後悔、臍を噬むとも及びません、今日の場合、どうしてよいか、御忠告をたまはりたし、過日もバライ將軍はわたくしに對し、御身にしてお、もしナポレオンと結婚せんか、予はナポレオンをイタリー軍の司令官とすることに盡力すると申されました。ナポレオンも昨日わたくしに權勢を得んがためには、軍隊の力を借るの要あり、未だ確定はしないが、予は日ならずイタリーに赴くであらうと語りました。惟ふにこの行は彼れが榮達を計つて自ら企畫したものでせう云々』



とはそれである。これを読むときはバラール將軍が媒介者であつたことが知れるばかりでなく、ジョセフィンヌが初めこの結婚をいたく躊躇したことが知られる。彼の女は思慮深き婦人であつたらうが、しかし、例の迷信はあり、ナポレオンの熱情は亦熱湯のやうに注ぐので、それやこれやで容易に結婚するに至つたらしい。

ナポレオンとジョセフィンヌが結婚した時は、ナポレオンは二十七歳で、ジョセフィンヌは十三歳であつた。六ツ違ひの兄嫁であつたが、ナポレオンは結婚届には己れを二十八歳とし、ジョセフィンヌを二十九歳とした。このあたり世間體を知つてゐたことが窺はれ、いかに英雄であつても矢張り俗人であつたことが想像される。

### 三二 ジョセフィンヌ(一)

ペーコンは、大事業をなすものは、多くは獨身者である、といつたが、妻子あるもので大事業をなすものは内助の功に待つものが多い。ナポレオンが、彼の赫々たる鴻烈もジョセフィンヌの

内助の功が多分を占めてゐる。ジョセフィンヌといふ女は、どんな女であつたか。これについて少しく觀察の必要があらう。

ジョセフィンヌは前叙の通り、ポールネー將軍の夫人であつたが、將軍が斷頭臺上の露と消えた時、彼れも當時牢獄にあつて、明日をも知らぬ身であつた。それだから、その子のユゼーヌの如きは、木匠の家に雇はれ、ユゼーヌの姉のオルタンスも、布匠の下に預けられてあつた。かくしてポールネー一家は殆ど破滅に瀕してゐた。それが不思議にもジョセフィンヌと同じく牢獄に在つた一人の女に由つて、ジョセフィンヌが救ひ出され、辛くも斷頭臺上の露から脱がれることを得て、二人の子供もわが手許に引き寄せることができた。同牢の女といふのは、敵を情夫に有つてゐたもので、その女がジョセフィンヌのことを情夫に懇へたのであつた。情夫が女の言を聽いて、ジョセインヌに同情して救ひ出したのであつた。

ジョセフィンヌはかやうな境遇を経て來たので、人生の慘苦を嘗め盡してゐた。もつて生れた發明もあるが、彼れの境遇がまた彼れを大に覺らせて、一代の才女賢婦となつたのである。ナポレオンとの結婚は、かやうな境遇を経てなほその境遇から光明を認めぬさきに執り行はれたので



ある。

ジョセフィンヌは新夫のナポレオンに對し、渾身の愛情と貞操とを獻げた。ナポレオンのためにその身を犠牲にした。夫を助けて夫の犠牲となつたのである。

ジョセフィンヌはナポレオンのために犠牲となることを運命であると自覺してゐた。彼れが賢婦であつた點はこゝにある。妻を知るものは夫にしかない。ナポレオンはジョセフィンヌに對してどんな感想を以てゐたか、彼れが後年セント・ヘレナでジョセフィンヌのことについて語つたときかういつた。

『ジョセフィンヌは良人に對して幸福を寄與した。いついかなる場合にも聽従し、誠實と多大の愛情とを獻げて、良人の最愛なる友人たらんことにつとめた。朕は彼れに對して熱誠な謝意をもつてゐる』

### 三三 ジョセフィンヌ(三)

まことにジョセインヌはその身心の一切をナポレオンに獻げてゐた。彼れが夫思ひは尋常でなかつた。夫の慰藉とならんがためには、彼れはつねにナポレオンの側近くを離れまいとつとめ、ナポレオンが旅行する時などは、いつも行を俱にした。疲労をも困難をも意とせずにつきまともた、それがためには、時には計略まで施して、その行に外づれまいとした。こんな風であつたら、彼れは平常、旅行の準備をして、いつでも隨行ができるやうにしてあつた。

ナポレオンはいかにジョセフィンヌを愛してゐたとはいへ、時には隨行を好まぬこともあつた。情婦に落ち合はうなど、考へた時などは、ジョセフィンヌの隨行を邪魔にした。或る時の如き、ナポレオンはジョセフィンヌの隨行を止めるため

『朕は遠遊するつもりだ。そなたは同行させられない。そなたはきつと辛抱ができまいから』  
といつたが、ジョセフィンヌが抜からず

『イ、エ少しも苦しいことはござりません』  
とこたへる、とナポレオンはしまつたとばかり

『朕はすぐに出發しなければならん』



と切抜ける。するとジョセフィンヌはどうして逃がすものでない、極めて軽く

『わたくしも御覧の通り、準備を整へてをります』

もう、かうなつてはナポレオンも脱がれる道がない。でも何とかしてとなほ

『行李は多からう』

といふとジョセフィンヌはきつとなつて

『イ、エ悉皆準備してござります』

これにはナポレオンも仕方なく、ジョセフィンヌを携へて行つたとのことである。これはナポレオンが後年の直話だが、その時彼れは『朕も彼れの意に従はざるを得なかつた』と附け加へてゐる。且つナポレオンは

『彼れは朕のもとに来るときには、親子團樂の樂をも棄て、駈けつけたらう』

と評してゐる。ジョセフィンヌの夫思ひは、この一事でゞも知れる。ジョセフィンヌは交際社會の花であつた。ナポレオンは元來、尊大・倨傲の方で、交際は上手でなかつた。ジョセフィンヌは其得意の交際術を揮つてナポレオンの足らざるところを補つた。だがジョセフィンヌも人間で

あるから、交際術に長じてゐただけにすることが華美であつた。華美であつたから物入りが多く、人に濫費を疑はれるほどであつた。これに反してナポレオンは節儉家で、衣服、調度に至るまで、極めて質素であり、且つナポレオンの母なるレチシアが、又非常な節儉家であつたから、この點でナポレオン親子とジョセフィンヌとの間に合はないものがあつた。レチシアはジョセフィンヌに勝るとも劣らぬ賢母勇婦であつたから、ジョセフィンヌの賢を見てこれを愛し、繊弱なジョセフィンヌを大にいたはり、少しもジョセフィンヌに對して、世間にまゝある姑氣質といふやうなものを出さなかつたが、たゞジョセフィンヌの華美好きには困つてゐたやうだつた。困つてゐたのはレチシアばかりでない。ナポレオンが大に困らされた方だつた。彼れは下の如く曰ふてゐる。

『ジョセフィンヌの奢侈と不始末とは言語に絶してゐた。これは殖民地生れの白哲人に免れない癖であらうが、餘りといへば餘りだつた。費用を定めるなどといふことは、とてもできないので、年中借をこしらへ、償却の時にいたつて、いつもそれが争論の種となつた。彼れはその時が来る、とその都度ひそかに人を商估の許に遣して、半額の請求書を出させた。彼れの勘定書は朕がエルバ島に在る時まで、イタリーやその他の地方から來ないことはなかつた位だつた。』



身、霸王の皇后となり、天性の交際上手、固より物入りの多いのは當然である。それに由つて良人の足らざるところを補つたことは、少々ではあるまいが、ナポレオン及びその母なる人が、大變な節儉家であつたから、これに反比例してその費が餘計に目立つたでもあらうが、概しては遣ひ過ぎた方らしい。ジョセフィンヌに缺點があつたとすれば、この點などがその著しいものであつたらう。

### 三四 ジョセフィンヌ(三)

愔氣のない女は愛のない女である。己れの領分を惜まぬものだ。その獲たるものに對して冷淡なる女である。戀とは何ぞや。愛の力を以てその欲するところのものを征服することだ。戀愛の成就是征服の成功である。征服したものを惜まぬものはない。愛せぬものはない。愛は惜むことを意味する文字である。愛をおしむとも訓する。まことに愛なるものが、おしむの義である以上、その力に頼つて獲たものに對して、愛着の念のなからうはずはない。愛着の念があれば、それが

他人に取られんとする場合、愔氣をせず居られやうか。愔氣は愛の閃めきである。年が年中、やかれても堪らないがたまには、やく方が閃めきが見えて頼もしい。

ジョセフィンヌは非常な夫思ひであつた。だから又愛の閃めき凄じかつた。ナポレオンはジョセフィンヌの愔氣のために、往々口論して終には宮城を飛出したこともあつた。ナポレオンは政治・外交上の事務が多忙のため、夜間遅くまで執務するのがジョセフィンヌの愔氣を買ふ原因となつてゐたといつてゐるが、事務は多忙であつたらう、精力主義の彼れのことだから熱心に事務を執つたらう。だがジョセフィンヌはそれぐらゐのことを知らない女ではない。ジョセフィンヌの愔氣は外にあつた。それは正しくナポレオンの好色に在つたのである。彼れは或は女優或は未亡人といふ調子で種々な婦人と關係した。賢女のジョセフィンヌがどうしてこれを知らないでゐたらう。ジョセフィンヌの愔氣はこれに原因してゐた。ナポレオンはその回顧録で、この點を詐つてゐる。それが證據にはいつも最後にはジョセフィンヌの意に従つてゐる。のみならず彼れはこの事を回想して、ある時はジョセフィンヌの愔氣の當然であつたことを容認し

『これも亦妻たるものゝ領分であり、權利である。』



といつてゐる。やかぬはやくにいや勝るといふが、ジョセフィンヌも人間である。情に勝つた婦人である。尋常ならぬ夫思ひである。どうしてやかすにゐられやう。やくのが普通で、やかぬのが却つてどうかしてゐるのが一般社會の實情であるから、この愷氣深いといふことでは、ジョセフィンヌの賢婦人たる評價を減らすわけにはゆかない。

豊太閤の妻すなはち北政所は、太閤がなほ微祿の時に嫁し、糟糠の妻としてその名、太閤の千古に赫々たると共に朽ちざるを得る賢婦人である。しかも彼れはなほ愷氣といふ病には勝てなかつた。太閤が段々と立身するに従ひ、英雄好色の本性を發揮して來る、とおねね御寮は毎々チン／＼を起した。ついには信長にこの事をうつたへて、却つて信長から粹な意見を頂戴したこともあつた。こんなわけで太閤もおね／＼の愷氣には困つてゐたやうだが、それでもさすがは英雄だ、女房操縦術にも長じてゐる。いつもそもじが一番好きとばかり、喜ばせをいつて堂より下さず、常に平和を維持してゐた。

賢婦人として婦人の師表となれる北政所に在つても愷氣はかやうにあつたのである。ジョセフィンヌに愷氣があつたからとて、それは深く咎むるに足らない。愷氣は女の病である。本性である。愷氣深き女は貞操が正しい、女房をもてるものは、ヌツと二本を突き出して耳の下まで口を割いて、掴みかゝられてはたまらないが、たまには、やかれた方がよからう。

### 三五 ジョセフィンヌ(四)

ジョセフィンヌには偉なる點が多々あつた。その中でも離婚問題の時に發揮した態度の如きは、さすがは賢婦だけであると内外の人を感歎させた。

ジョセフィンヌは何が故に離縁されたか、子がないためであつた。子がないわけではなかつたが、彼れとナポレオンとの間の子がなかつたためであつた。誠に一代の才女ジョセフィンヌは皇嗣なきの故を以て想思のナポレオンと永く夫婦の關係から割かれる身となつたのである。

フランス帝國の花は、その種子を遺さぬ故を以て憐れにも葬られてしまつた。離婚式は千八百〇九年十二月十五日、チュレリー宮殿で行はれた。それより前にこの事件は問題となつてゐたので、ジョセフィンヌの耳には疾く、はいつてゐた。前警視總監フーシェといふのが、この話を齎



らしてジョセフィンヌのもとに行く、と彼れは大いに驚いたが疾く知つてゐたので格別取り亂すこともなかつた。フーシェがジョセフィンヌのもとに行つたのは、ナポレオンの命を受けてのことではなかつたので、ナポレオンはこれ聞いて大に怒り、フーシェを叱責したが、しかしナポレオンは時機尙早いと考へてゐるばかりで、腹は既に決してゐたから、まもなくナポレオン自らこの事をジョセフィンヌに説き聞かせた。ジョセフィンヌはそれを聞くと

『知つてをります、もう何にもおつしやつてくださるな。』

とその場に泣き伏したが、やがて覺悟の旨を語り出た。ナポレオンも固より相思の仲であるから、ジョセフィンヌの悲歎にまけぬほどの悲歎に暮れ、その夜はジョセフィンヌと衾を同うして泣き明した、といふことである。この時のナポレオンの學校友達であつたブリエンヌが、ジョセフィンヌが自分に語つた實話だといつて、同人のナポレオン傳に記してあるところによる、とその時ナポレオンはジョセフィンヌの手を自分の胸にあてさも感慨無量の體で

『ジョセフィンヌよ、運命だ、まゝならぬ。朕がそなたに對する愛情もフランスのためには犠牲にしなければならぬ。』

といつた。ジョセフィンヌはそれを聞かされて昏倒したとある。なほこの傳記には、ジョセフィンヌは

「皇后などには決してなるものではない」

といつたとある。

離婚式は前記の如く千八百〇九年の十二月十五日チュレリー宮殿で行はれたが、ナポレオンはこの時、最愛の妻をフランスのために離別するとて、その理由を宣言し、最後に

『朕は親らジョセフィンヌに寶冠を戴かせた。今日たとひ離縁するともジョセフィンヌは永久にフランス帝國皇后の尊稱を保有する。殊にジョフフィンヌに朕の親愛の情を疑はすな。ジョフインヌは今日以後、朕の無二の親友である。』

といつた。これを聞いた時の、ジョセフィンヌの感慨はどうであつたらう。夫からは熱愛され、國內では無二の國母陛下として尊敬され、國外にも稀世の賢婦人として評判され、誰れからも批難されたことのない身でありながら、皇子を生まないばかりに、皇后の位から退き、最愛の良人たる皇帝と生別しなければならなくなつた。眞に運命といふものがあるなら、ジョセフィンヌの



このやうな境遇に陥つたのは、全く運命といふものである。

ジョセフィンヌは離婚式をすませて、新に與へられたこの世の隠れ家なるマルメーゾン宮に引き移つた。そして翌年ナポレオンがマリー・ルイズと再婚の式を挙げた時には祝賀に出で、皇子羅馬王が誕生した時にもわれを忘れてそれを祝し、心、明鏡の如くであつたが、それでもやはり女である。われに返つて身のつれなさを考へては、たゞく薄命に泣かざるを得ず、離婚後六年間泣き暮らして、千八百十四年五月二十八日といふに、更にこの無情な天地と離別した。この時來り弔したものに二萬餘人に達したといふ。その時は丁度ナポレオンも露國に大敗したのが原因で、退位を餘儀なくさせられて、エルバの島に流されてゐた時であつた。察するにジョセフィンヌの死は、ナポレオンの失敗と流竄とが原因であつたらう。たとひ原因でないとするも、少くともこれがその死を早めたに違ひない。

### 三六 ジョセフィンヌ(五)

こゝで少しく言ひ添へておかねばならないことがある。それはこの離婚に對する當時及び後世の批難である。當時及び後世の人々は、ジョセフィンヌに同情する餘り、無暗とナポレオンの處置を批難するが、それは要するに事情を知らないからである。

權兵衛、太郎作の家に繼嗣のないのは、左までの問題ではあるまいが、それでも兄弟、姉妹、親戚間の問題となつて、願くば繼嗣をとの話に皈するではないか。ましてやナポレオンはフランスの皇帝である。フランス帝國の國體はナポレオン皇帝を戴ける國體となつてゐた。故にその國體を維持せんと欲すれば、ナポレオン皇室を千代萬代に續かさねばならぬ。千代萬代に續かさねばならぬとすれば、皇統を絶やしてはならない。然るにこの大切な皇統は、ナポレオン一世において早く見らるゝことのできない事情になつてゐた。すなはちジョセフィンヌにはナポレオンの胤を宿す道が絶えてゐたのである。これが東洋式なら美女數十を後宮において、幾らでも皇子を生まることができると、一夫一婦の制の厳しい西洋では、たとひ天子さまでもさうはならぬ。そこでナポレオンが皇嗣を得んとするには、ジョセフィンヌを離縁して、新に子の産める健全な皇后を入れねばならない。これがナポレオンの、ジョセフィンヌ離婚を斷行したわけであつて、ジ



ヨセフィンヌも納得してそれに従つた次第であつた。

ジョセフィンヌは最初、ポーアルネーの遺子をナポレオンが子として、ナポレオンの後を繼がせてくれるものと信じてゐたやうだつた。ナポレオンは後年、ジョセフィンヌにこの心のあつたことを語つて

『彼れはユゼーヌのためには、何物をも求めなかつた。朕がユゼーヌにしてやつたことに對しても謝意を表しなかつた。寵眷を一身にあつめた際にも、媚を呈するでもなければ、悦びの意をしめすでもなかつた。彼はこれを當然と心得、朕にもしかく信じさせやうとしてゐた。かうしたことから考へる、と彼れは他日朕がその子を嗣子とするだらうと思つてゐたらしい。』

といつた。母親の情としてはさうあるべきだらう。ナポレオンとて或はこの考へをしたことがあつたかも知れないが、それはナポレオンが許してもフランスが許さぬ。フランスはナポレオンの正系でない限り、ナポレオン二世として、一世の後に君臨することを許容しない。これがナポレオンが決意斷行せざるを得なかつた所以である。フーシェの如きは、この間のことを能く言ふてゐる。彼れはジョセフィンヌに説いた時「フランスの利益のために」を反覆した。

ナポレオンがジョセフィンヌを去つた理由は、かうした次第であるから、それは無情でもない、冷酷でもない。已むを得なかつたことである。實にジョセフィンヌを離別したのは、ナポレオンといふよりはフランスといふ方が當つてをらう。

ナポレオンは離別後、しばらくジョセフィンヌをその獨り寂しく住つてゐるマルメーズ宮に訪れて彼れを慰めた。又何かにつけて彼の意見を徵することを樂しみにしてゐた。且つこれより以前にナポレオンは、ジョセフィンヌのつれ子のユゼーヌとオルタンスとジョセフィンヌの姪のステフワニーとを養子として、我が子のやうに愛し、ユゼーヌを千八百〇五年にイタリー副王とし、オルタンスをナポレオン自身の實弟でオランダ王にしてあるルイ・ボナパルトに嫁がせた。後年幽囚の身から一躍してフランスの大統領となり、皇帝となつて、ナポレオン家を絶えたるに繼いで、ナポレオン三世と名乗つて覇を歐洲に唱へたルイ・ナポレオンは、實にこのオランダ王ルイ・ボナパルトの子で、オルタンスの産むところであつた。オルタンスはお跳ねで、わがまゝで、ルイを嫌ひ、しばらく離婚を請求して、ジョセフィンヌを困らせた女であつた。それでさへもナポレオンは、それがためにオルタンスに對する愛を減じなかつた。



ナポレオンがジョセフィンヌに對するや又務めたりといふべきである。ジョセフィンヌが、ブリエンヌに語つたナポレオンに對する不足の如きは、それは女としての愚痴といふものに過ぎない。

### 三七 執政官から皇帝に(一)

赫々たる武勳ほど、權勢を得るに善き手段はない。ナポレオンはそれを悟つてイタリア遠征に出かけたのであつた。フランスの目的は、主として奥國を膺懲するにあつたので、ナポレオンをイタリアに遠征させたのは、實に奥軍を牽制するに在つた。然るにナポレオンは一たびイタリアに入るや、赫々たる武勳を立て、本軍の征奥軍よりは數倍の勇名を轟かせた。牽制軍がかへつて本軍の仕事をしてしまつた。

こんな調子でナポレオンは、早くもロヂの戦を終つて、ミラン府に入つた時、天下を取るの志を起したのであつた。その證據に彼れは後年、

『政治舞臺の名優となれるといふ考は、ロヂ戦の後始めて起つた。この時大望の火花が眼前に

閃いた』

といつてゐる。しかしながら彼れは頗る細心家である。當時そんなことは噓にも出さない。たゞ凱旋將軍としてパリに歸還し、人々の歡呼をよそに見て、讀書三昧に耽つてしまつた。凱旋式は行はれ、その餘榮に由つて兄のジョセフ、弟のルシアンや、ルイに至るまでが上院議員となり、全權公使となつたが、それでもナポレオンはむしろこれを煩ひかのやうな素振りして、あくまで政治上に野心のないことを装ひ、武邊一圖の人と見せかけた。

ところが政府では、更に英國征討を思ひ立つてこれをナポレオンに命じた。彼れは武勳を重ねる上において、もとより願ふところであるので、直に承諾してその計畫に取りかゝつた。が殘念ながらフランスの海軍は英國海軍に敵すべくもないので、已むを得ず計畫を中止した。だが、そのまゝで引込みはしない。彼れは本國を征する代はりに、その領土を脅かしてやらう、と埃及遠征を提議した。彼れの埃及遠征の目的は、これに由つて英國の富源とするところの、印度を經濟的に疲弊させやうとしたものであるが、亦例に由つて赫々たる武勳を重ねて、一段の權勢を得やうとしたものであつた。權勢を得るの目的は何かといへばシーザーたり、アレキサンダーたらん



とするに在つた。彼れは埃及遠征前に人に語つていつた。

『梨の實の熟する時機は未だ來ない。ちいさな仕事が何時まで人の記憶にあるものか。仕事は時と共に葬り去られてしまつた。區々たる歐洲の一隅は、余が驥足を伸ばすに足りない。埃及に行かう』

と人の噂も七十五日、褒められるも、貶されるも、七十五日間に過ぎないのが、世上の取り沙汰である。凱旋將軍が殊更に野心を秘めて、讀書三昧に入つてゐては、忘れられるのも道理である。彼れはこの世上の、彼れに對する人氣を見て、まだ／＼飛躍の時でない、更に箔を附けねばならぬ、勳功を立てねばならぬ、時機はなほ彼岸に在ると見て取つて、さてこそ英國征伐の命を機として、埃及遠征を提議したのである。

然るに政府では、彼れの赫々たる聲譽を、薄氣味悪く感じてゐた際とて、むしろ外國に追ひやつて、フランスのために働かすにしかない、と一も二もなく許可してしまつた。彼れ得たり賢しとばかり、埃及遠征に出かけた。その時、或る人は頻りにこの行を止めたが、彼れはその人につた。

『予がこの地に留つてゐたら、こんな愚劣な政府は顛覆し、その上に立たなければならぬ。それをするには時機が早い。予は決心はしてゐるが、俗物どもが予を容れないから、しばらく時機を待つのだ。遠征は時機を待つねむけ醒しき。今に彼れ等の膽つ玉を挫いてやるよ。』  
埃及遠征の目的はかうした意圖から立てられたものであつた。ナポレオンの敵は實に外にはなく、内にあつた。

果して彼れは千七百九十八年五月十九日に、四萬の軍勢を率ゐて埃及に向つた。七月一日アレキサンドリア附近に上陸して、諸方を戡定したが、翌年十月に、本國に告げないで歸國し、フレヂュス港から上陸してパリを指した。

### 三八 執政官から皇帝に(三)

ナポレオンが埃及から歸國したのは、野心を遂ぐるために、無暗な考を起してしたわけではなかつた。彼れは絶好の機會を捉へたためだつた。



丁度彼が埃及出征の不在中だつた。フランスではカムポフォルミオ條約に満足せず、フランスの共和主義を他國に擴張せんと欲して、イタリアのゼノアを共和國とするやら、スイス、オランダ、ローマに共和制を布くやら、おまけにローマ法王まで放逐して、それらの國を自國の保護下に置いたので、歐洲各地の君主國では、この主義の自國に傳播することを恐れ、英國が主唱者となつてオースタリーを語らひ、對佛同盟を起してナポレオンの不在中にとばかり、フランス攻撃にかゝり、そして對佛軍は頗る猛烈な勢で、フランスの國境に迫つた。然るにフランス政府は無能な政府で何事もすることができず、外は敵軍の攻め寄するに任せ、内は暴民の蜂起に委したので、世は再び例の九十三年の恐怖時代に逆戻りせんとし、心あるものはこの時局を收拾する大英雄を仰望してゐた。ナポレオンの歸國は、この機會を捉へたのであつた。彼れは埃及を發せんとするに當つて叫んだ。

『おしやべりがフランスを亡ぼさうとしてゐる。これを救ふのは今だ。』

彼れがフレジユスに上陸してパリに入るや、フランス國中は、彼れの歸國を歡呼喝采してやまなかつた。しかし總裁政府は彼れの無斷歸國を心よく思はず、彼れの歸國は必ず何事かしやうとするためであらうと恐れを抱いた。一部のものは彼れが軍隊を埃及に遺棄して歸國したのを批難した。これに對してナポレオンは下のやうにいつた。

『予の歸國はフランスの命に従つたものだ。フランスはその國家を救はんがために予を召還した。予はこれを救ふ権利がある。予は總裁政府から、地中海の沿岸地アフリカ及びアジアにおける一切の作戦に對して、自由行動の許可證を受けてゐる。予はロシヤ人、トルコ人、野蠻人及び印度の王公と折衝する權利を有し、なほ予は任意にわが後繼者を任命し、班師を行ひ、必要と認めた場合には、自ら歸國することができるやうになつてゐる。』

ナポレオンはかういひつゝ政府顛覆に取りかゝつた。當時、政黨はマネーヂユ、モデレー、ブルソーの三黨に分立してゐたが、外にジャコビン黨と稱する往年の過激團の殘黨もあつて、いづれもナポレオンの入黨を歓迎し、彼れを引張旗にした。ジャコビン黨の如きは彼れを獨裁官に選立しやうと唱へた。ところが彼れはこれを謝絶して、モデレー黨と結んだ。モデレー黨はシエイエが統率してゐたが、この黨と結ぶにはナポレオンの弟にして、當時五百人議會の議長であるルシアンがその間を斡旋した。ルシアンは彼れをシエイエと結ばすのみならず、策士のタレーラン



をナポレオンの味方に引入れた。

ナポレオンはルシアン、シエイエ、タレーランの三人と密議して、元老院を説き、軍隊を動かして、五百人議會を勧めて政權を己れに與ふるやう奔走した。然るに元老院と軍隊は賛成したが、議會と市民が反對の色を見せた。彼れは五百人議會を市外のサンクルーに遷させて、兵馬を以て議會を威嚇するに都合よくした。

かくして露月十八日(十一月九日)果然クーデターを行つた。ナポレオンは當日早朝、兵を配置して變に備へ、自ら又兵を率ゐて議會に乗り込んだ。議會においてはこの非常に會ふて大に驚いたが、それでも彼れを罵るもの多く、場内さながら鼎の沸くが如くであつた。さすがのナポレオンもそれがため、いさゝか面喰つてその場で例の癲癘を起し、味方のものに授けられて別室に運ばれた。かやうな騒ぎを呈したが、彼れの威嚇は確に成功して、議會は解散され、總裁政府は顛覆され、新憲法は布かれて、三人の執政官政治となつた。三人とは誰れぞや、第一がナポレオン、第二がシエイエ、第三がデユコである。執政官は統領を意味する。彼れは大統領となつたのだ。この時兄のジョセフは上院議員となり、弟のルシアンは内務大臣となつたが、その次の弟のルイ

も大佐に昇進した。

### 三九 執政官から皇帝に(三)

實力あるものには勝てない。實力あるものはおのづからその地位を占める。ナポレオンが執政官中の首席となつたのは、彼れが軍人であつたから兵權を左右することができたためだ。クーデターをやつた後は、しばらくは騒擾が已まない、政界は風雲、急であつた。それがため同僚の執政官は、兵權を握れるナポレオンを議長としないわけにゆかなかつた。彼れを議長としてからは、又彼れと争ふ氣力もなかつた。デユコは言明していつた。

『時局を收拾することのできるのは、將軍ばかりである。予は一切、將軍に聽従する。』  
と、シエイエも、デユコの言を聞いて、齒齟をしたが、遂には従ふ外なきに至り、第一回の會議の時、ナポレオンが財政、行政、軍事、政治、法律の萬般に互つて論議するや、舌を卷いて退場し、一友のもとに駈け着けて



『彼れは萬事を知り、萬事を生み、萬事を能くする。』  
といった。たしかにナポレオンは殆ど萬事を能くした。ナポレオンは他日この露月の革命を誇り  
顔に語つていつた。

『サン・レアルの謀反は、徒らに陰謀が多くて効果が少かつたが、われらのは反掌の間にやつ  
てのけた。かやうに禍害の少い大革命は他にその例がない。深望せられ、稱讃を博したのは、  
これがためだ。』

誠に彼れの革命は反掌の間に行はれ、天下の人心は彼れに歸した。無論、一部には反對があつた  
が、彼れはそれに對して辯じていつた。

『われらはこの時法律を無視したか。法律上の罪人となつたか。それについては世間で、これ  
を理論的に論議したが、今後もなほ永く論議するだらう。然れどもこれはもとより机上の空論  
に過ぎない、大勢の趨くところおのづから消滅する。かやうな議論は沈没を免れんため、帆檣  
を切斷した水夫に對して、損害を要求するのと同じだ。實にわれらがなかつたら、彼の時國家  
は亡んでしまつたらう。これは明瞭なことである。われらがこれを救つたことは争はれない事

實だ。かやうな記憶すべきクーデターをやつた主唱者大原動者は、區々たる陳辯を費やさんよ  
りは、むしろ羅馬の英漢に倣つて、傲然として非議者に對して左の如く答へて足れりだ。われ  
らはわが國家を救ふたことを明言する、われらと共に來つて神に謝するがよいと。』

成るほど當時のナポレオンは、帆檣を切斷した水夫であつた。これに對してかれこれいふのは、  
反對者かしからざれば近眼者流である。フランスは彼の時に當つて、ナポレオンがなかつたらバ  
リーは包圍され、總裁政府は顛覆されるぐらゐで止まらない。或はいかなる大殘虐が暴民に由つ  
て行はれたかも知れない。これらの不祥事がなくして、強勢な國家となつたのは、一にナポレオ  
ンのお蔭である。彼れが文句をいはずとわれと共に神前に感謝せよ、と放言したのは決して誇稱  
でも傲慢でもない。

ナポレオンは更にこの革命を以て、必然に來るべき運命に在つたことゝ、己れのしたことにつ  
いては知己を後世に待つといつて、下のやうにいうてゐる。

『當時政界の擾亂を醸したものは、義として異論を唱ふべき権利がない。ましてや人はみな改  
革の必須缺くべからざるを承認し、それを希望して各黨先を争うて、これを行はんと務めたで



はないか。われはこの時に當つてモデレー黨とともにこれをやつた。その結果無政府状態はたちまち終りを告げ、秩序、一致、勢力、名譽等を一舉にして恢復した。ジャコピン黨もしくはイムモロー黨は、果してこれに優れる結果を生むであつたらうか。それを疑つたからとて、何の不安があらう。しかし彼れ等が不平に堪へないで、反抗の聲を高めたのは、彼れ等としては自然である。われらはこの大事蹟に對する健全なる斷案を、利害に關係なき後世の士人に屬する。』

歴史的事業は三代目でないと公平な觀察、批判は望まれない。ナポレオンが知己を後世に待つたのは一大見識である。

#### 四〇 執政官から皇帝に（四）

ナポレオンが第一執政官となるや、當時世間では、彼れはブルボン家のためになつたのであつて、遠からずルイ十八世をバリーに迎へ、以てルイを王位に復するであらうと噂された。王黨は

噂ばかりでなく、かくあることを希望し、窃に運動もして見た。王が自身でナポレオンに運動したこともある。

一日、ルイ王がナポレオンに送つた書に、

『朕に王位を恢復させることによつて、卿は荏苒、日を空うしてゐる。朕は卿が好機を逸しはしないかと思つて憂慮に堪へない。卿は朕を離れて佛國の利福を計ることできないが、朕とても亦卿を離れては佛國のために何事をも行ふことできない。速に處決せんことを請ふ。』

といつてゐる。これは頗るお目出度い話である。ナポレオンは今でこそ執政官でをれ、他日、機を見て帝と稱しやうと野心満々たる男である。且つ當時のフランスは民主思想が旺盛で、再び君主を推戴するが如きは以ての外と思つてゐる。かゝる形勢事情であるに拘らず、ルイ王や王黨が王政復興運動をなすなどは、餘りに迂濶な話ではないか。ナポレオンにはルイをどうかうしやうなどいふ心は毫もない。これは彼れが後年明言したことに據つても知れる。ナポレオンはその時下の如く返書した

『宸翰正に領す、予は陛下及陛下一族の不幸について常に憂慮を禁じない。だが陛下はフラン



スに歸來の計畫をたてたまふな。十萬の骨を枯らさずしては、還御したまふこと不可能である』しかも王政復興運動は王黨に由つて、なほ巧妙になされたものだつた。王黨の一人アルトア伯といふのはギーシユ公爵夫人といふ極めて艶麗で、愛嬌に富み、人を魅する力を多分にもつた婦人を遣はして運動した。ギーシユ公爵夫人は先づジョセフィンヌに近づいて、マルメーゾン宮の饗應に出席し、その席上でよもやまの話をしつゝある間に、巧みにルイ王のことに説き及び、

『數日前でありました、アルトア伯の家にゐましたところ、去る人が國王ルイ十八世に問うて申しますには、もし第一執政官がブルボン家を恢復するなら、差し向きどういふ報酬をしたまふか。すると國王は希望するなら元帥にしやう。朕は未だこれでは足りない、朕はカルルセルに高く／＼雲表に聳ゆる大柱を立て、その上にボナパルトがブルボン家に王冠を戴かせてゐる肖像を安置しやう。と仰せられました。』

といつた。ジョセフィンヌは、これを聞いて大に喜んだ。そこは女である。ナポレオンの深い考へなどを想像する思慮がない。むしろ甚くこの話を名譽として聴き取り、やがてナポレオンがはいつて來る、と何はさておき、先づこの話を悦びに堪へない風情で語り出した。ナポレオンはき

いてきつとなり

『そなたは何とこたへた。その柱には第一執政官の屍を脚としやう、といはなかつたか』

ジョセフィンヌはこれを聞いてどう感じたか、恐らく眼を丸くしたことであつたらう。

ギーシユ公爵夫人はナポレオンが今ジョセフィンヌにいつた言葉を聞いたか聞かなかつたか、兎に角彼れはナポレオンを見て喜悅の情を面に湛へ、これも運動の一手段とあつてジョセフィンヌに感謝していつた

『ボナパルト夫人、わたくしを大英雄に御引きあはせ下さいまして、まことにありがたうございます。何ともお禮の申上げやうがございません』

かやうに世辭を使つて運動したが、その運動は何の効果もないばかりか、彼れはその夜バリーを去らなければならぬ仕合せとなつた。それはナポレオンがかやうな王政復興運動者を近づけては、人民から如何なる疑ひを受けるか知れない、と憂慮した結果である。



## 四一 執政官から皇帝に(五)

ナポレオンは第一執政官となつて政柄を握り、且つ兵馬の權を持すると、その勢ひ内外に隆々として、あたかも旭日の東天に昇るが如きものであつた。

彼れはこの勢ひに乗じて、内は庶政を改革し、外は列國と平和をはかつた。但しフランスはその主義において君主國の敵である。各君主國はフランスを亡ぼさないかぎり、自國の安寧を計ることができないと考へてゐた。ナポレオンは、この主義上から來てゐる列國の憎嫉を以て、容易ならざるものと覺り、列國に向つて平和を計りながらも、その計畫の到底行はれざるを知り抜いてゐた。そこで表面は平和な執政官と見せかけ、裏面では列國を膺懲すべく考慮した。特に英墮の兩國に對しては是非一撃の必要があると信じた。

ナポレオンが列國に對する態度は、かくの如き次第であつたから、その平和を欲するといふ心中を語るはずの書、すなはち列國の君主に與ふる書、そのものからして既に平和的でなく、むしろ詰問的挑戰的であつた。英帝に與へた書の如き

『慘憺たる戦争は八年間も續いた。なほこの上續かなければならないが、何とかしてたがひに握手する方法はないだらうか。安寧と獨立とを保護する態度を越えて、富と權とを有する國民が、蒼生の安慰と商業とを擧げて、戦神の祭壇に供へねばならないものだらうか。こゝに平和を齎すものは、最大の名譽、無限の恩惠、一つは受け、一つは授くるものであることを、列國政府が理解しないのはどうしたわけだらう。これが陛下の省慮を煩はすに至つたわけである』といつてゐる。この書を読んでどう感じたか。先づ第一に思ひ浮ぶのは、彼れの傲慢不遜である。一片の文書の中にナポレオンの面目が躍動してゐる。平和を愛好すると稱する人が、かゝる詰問的の書を送つてはこれを受け取つたものは、誰れとて肯諾するものでない。英國では時の首相ピットがこれを見て大に怒り、ナポレオンの缺點を算へて、ナポレオンを以て歐洲大陸の君主制を破壊するものとなし、悔悟の證としてブルボン王家の復興を見ざる限り、和解の申込に應ずることができない、と返書した。ところがナポレオンもサルもので、ピットに對して

『予がもしスチュアート王位の復興を見ない限り、斷じて英國と和しないと主張したら、足



下は予を指して何といふだらう。』

と逆捻じを食はし、同時にピットの返書を外交上に利用して、戦いを好むものはフランスではない。實に歐洲列國である。英國はその張本であつて證據はこゝにあると囃し立てた。そこで列國中彼れに對する同情が多くなつたが、彼れはこの機を外さず露國皇帝を口説き落して、對佛大同盟から脱退させた。彼れは先づ墺國を征伐せんと、親ら兵を帥ゐて有名なアルプス越えをやつて、ミランを占領し、マレンゴに勝ち、一方ドイツの方面へはモローを遣はしたが、これ亦連戦連勝して、墺都のウィーンに迫らんとするの概を示すに至つた。そこでさすが墺國も膝を屈し、首を垂れ、世に稱するリユーネビールの媾和となつた。又英國でもたま／＼ピットが國王と意見合はずして辭職し、對佛政策が一變したので、ナポレオンはこの機に乗じて、外交上で勝利を占めんと計畫したが、案するより生むが安く、アミアン條約の締結となつて、大に成功するところあつた。

こゝにおいてナポレオンは、對内政策に銳意し、貴族の榮號を再興するやら、行政區劃を變更するやら、舊教を再興するやら、教育を獎勵するやら、銀行を創設するやら、土工を起して交通の便を計るやら、市街を美麗にするやら、フランスをして面目を一新させた。中にも例のナポレオン法典と稱せられた法典編纂の事業は、彼れが鴻業の一として、不朽に傳ふべきものである。

## 四二 執政官から皇帝に(六)

僅に三十一歳で、君主も及ばぬ威權赫々の、第一執政官となつたナポレオンは、三四年の間に常人の數代かゝつてする功業を成し遂げ、大英雄、大偉人、大天才と内外の人々から、口を極めて褒め立てらるゝに至つた。人氣が可なれば出世も早い、成功も速かだ。彼れは任期十年の第一執政官であつたが、就任以來四年も経たない間に、早くも終身執政官に推戴された。すなはち千八百〇二年八月二日であつたフランス國民はこの大英雄たる第一執政官を、議會の提議に賛成して、終身執政官に選舉したのであつた。その時投票數は三百五十萬票あつたといふ。彼れは終身執政官に選舉されると同時に、シスアルピア共和國の總督を兼ねた。

凡そ世界中を歴史的に觀察して、信の得難いこと英國に對するが如きことはない。英國は國家



としても、個人としても、ウソをつくことが平氣で、いつもいつも、あいてに背負投げを食はすが、これが英國古來の國風である。悪い國風もあつたものだ。ナポレオンは第一執政官時代に、このウソつきの國と例のアミアン條約を締結し、フランスにおいては、その條約に従つて自國に於いてで爲すべき義務にかゝれるものは、ドシ／＼處理してしまつた。しかるに英國は例の横着氣を出して、少しも履行しない。そして遂には條約破棄の旨を宣言した。

ナポレオンは大に怒つたが、しかし今一應反省を促して見やう、と大に諭すところあつた。けれども英國はナポレオンの言に耳を假さなかつた。そこで英佛の國交は亦復斷絶したが、この時ナポレオンは思惟すらく、自個の理想を行はんとすれば、君主となり、帝王の權力を以て、命令するに如くはない。且つ外國の飽くまでも佛國に敵對するのは佛國が共和國であつて、他の君主國の主義上の敵だからである。外に對して平和を計り、内に對して理想を行ふには、君主國を再興して、己れ自ら君主となるに如くはない、とかくてナポレオンは、元老院をして共和政を停止し、己れを皇帝に選舉すべく、國民に悟らせた。これが實に千八百〇四年五月十八日のことであつて、終身執政官に擧げられてから、僅に二年目であつた。投票は行はれた、二千五百六十九票

に對する三百五十七萬二千三百廿九票の大多數を得て、首尾よく當選した。

想ひ起すフランス國民は、ルイ十六世を刑死してからこのかた、十有五年、自由と平等のために、幾百萬の生靈を犠牲にし、共和政でない國はどの國でも、主義の上から亡ぼしてしまはねばならぬと意氣込んでゐた。しかるに武斷主義のナポレオンが埃及から歸來する、とたちまちこれを頂いて第一執政官とし、次いで終身執政官とし、終には皇帝の位に登ぼせてしまつた。思想は定處のないものではあるが、僅か十五年間にこんなに變化した國は、歴史の上ではフランスの外には見あたらない。この體を見るにつけても、ナポレオンが如何にフランス人から渴仰されてゐたかゝ知れるであらう。

ナポレオンも亦いつたことがある。

『朕はフランス人といふ名稱の榮譽を、九天に揚げて、各國民を羨望させやうと考へてゐる。朕は異日天佑に依つてフランス人がヨーロッパを旅行するとき、いつも家郷にあるやうな感じであるやうになることを希望してゐる。』

ナポレオンは實にフランス人を衷心から愛した。彼れ自身からして眞正の愛國者であつた。フラ



ンス國民が最初彼れを仰望して、帝位に選舉したのは、なほ支那人が堯舜を徳として帝位に登ばせたやうなものであつた。ひとりフランス國民ばかりでない。イタリア人も亦舉つて彼れを仰望し推した。彼れはその年十二月、本國における戴冠式を濟ませ、更にジョセフィーヌを伴ふてイタリアに行幸し、イタリア王の戴冠式を行ふたが、その時イタリア人は熱狂せんばかりに歓迎した。ナポレオンはイタリア人が、どんなに自分を見てゐるであらうか、と微行して群集の間に投じてみたが、その時彼れが一老婆に近づいて

『おばあさん、昔はカベといふ暴君があつたが、今はナポレオンといふ暴君がある。これでは暴君を以て暴君に代へたばかりだ。少しの損得がないではないか』  
といふと老婆は大に反對して

『イ、エそれは大に違ひます。ナポレオンはわれらが選立した皇帝です、カベは突如として吾等の上に君臨したものです。カベは貴族の王でしたが、ナポレオンは人民の王です。』  
といつた。これを聞いたナポレオンの氣持はどんなであつたらう。きつと包みきれぬ會心の笑をもらしたことであつたらう。

### 四三 執政官から皇帝に（七）

太閤は口癖のやうに位詰にするぞといつたものだつたが、事を爲さんと欲するものは、先づ地位を得なければならぬ。實權を握らなければならぬ。地位があり實權があるものには勢力が伴ふ。そこで、この權力を以て他の勢力を壓倒するから戦はずして勝つことができるのである。位詰とはこれをいふのである。

ナポレオンが第一執政官となつたのも、終身執政官となつたのも更に皇帝となつたのも、みな實勢力を以て他を壓倒しやうといふ意料に外ならない。位詰を行らうといふ料簡に相違なかつたらう。しかしナポレオンは舊式英雄のやうに、何でもかでも位置さへ得たらよいと心得たものではなかつた。彼れは民主主義の男であつた。人類の幸福を思念して止まなかつた。彼れは帝王とやらんとする時でも、無理矢理に即位をしようとはしなかつた。フランス國民の輿論に問ふて、國民がわれを帝とするなら帝とならう、と國民投票に問ふてみた。この態度は彼れの偉大なところ







う。兎に角かやうな風評まで立てられたのだから、由つて以て彼がいかに憎嫉されたかゞ知れる。帝王たるも亦難いかなだ。

#### 四四 再 婚

當時誰れでもジョセフィンヌの賢を知らないものはなかつた。中でもナポレオンは知りすぎるほど善く彼れを知つてゐた。鴛鴦えんきのそれは繪に畫かれ、文に唄はれるが、ナポレオンとジョセフィンヌとの間の濃やかさは、鴛鴦のその比でなかつた。しかも子がないたために生別しなければならなくなつた。

ナポレオンはジョセフィンヌと別れてから、四ヶ月目に奥國の皇女マリー・ルイズと結婚した。一日も速かに皇子を得て、フランス帝國の萬歳を見んもの、との佛國民の冀望に副したものであるが、又他に大に意味があつた。すなはちナポレオン及びその周圍のものは、これを對外政略に用ゐるものである。對外政略とは何であるか、ナポレオンは威權赫々たる帝王であるとはいへ、

彼れはユルスの一貧家から起つた成上りである。列國は力が足らないので、懾服してはゐるが心の中では何に成り上りがと擯斥してゐる。この擯斥がフランスに取つては、一大苦痛であつた。列國に擯斥の心があるから、フランスから平和を希望しても、列國から破壊してしまふ。たゞきつて漸と安神と思ふと又背き、懲らしてこれでよからうと思ふと又反抗し、戦争は列國から買つて出て絶ゆる間がない。如何に戦争得意のナポレオンでもこれには閉口せざるを得ぬ。この事情がナポレオンに、歐洲の一強國と姻戚關係を結ばうと考慮させたものだつた。これが再婚の原因となつてゐるのである。フーシェがジョセフィンヌに對して『フランスの利益のために』といつた一句の中には、皇嗣の必要なこと、一強國と婚姻の已むを得ないこと、の二様の意味が含まれてゐた。

ナポレオンはジョセフィンヌを離別するや、直に列強の皇女を物色した。そして先づ露國の皇妹にアタつて見た。露國では大に喜んだが、先づその承諾前に露國の希望の數々を申入れた。又サキソンの王女にもアタつてゐたが、これもできさうになつた。かゝるところへナポレオンの義子で、當時のイタリー副王たるユゼーナから奥國皇女を持ち出してきた。かうなつては再婚問題



は頗る込み入つて、何れに決すべくもない。ナポレオンはチュレリー宮殿に樞密會議を開き、露國のとサキソンのと奥國のとの三案を諮問した。意見は三派に別れ討議數時遂に夜の二時に至つて閉會するありさまであつたが、結局奥國皇女を可とするものが多く、札はマリ・ルイズに落ちた。ナポレオンはユゼーヌがその周旋者で主張者たる關係上、早速駐佛奥國大使スクワルゼムベルク公に吉報させ、同時に外務卿をして即日奥大使と共に結婚條約に署名させた。

奥國皇室は歐洲では最も古い皇室である。それだけ箔がついてゐる。だが露國は歐洲での強國だから、政略上からいへば露國と結婚するに如くはないので、ナポレオンはどつちかといへば露國とを希望してゐた。けれども樞密會議が奥國と決議してしまつたからそれに従つた。露帝はナポレオンが奥國の皇女と結婚するといふことを聞いて、ナポレオンは我を弄んだと憤つた。露國のがなぜ樞密會議で否決されたかといふに、それは露國が希望條件として、信教の自由と希臘式會堂を與ふることを、申入れた一事に在つた。ラ・カイズは、この間の消息を記して、帝がフランス帝國の利害上、ジョセフィンヌ皇后と互ひに絶ち難い縁を絶つや、歐洲列強の皇帝は孰れもみなナポレオンと縁を結ぼうと熱望した。もしも宗教上の障碍なくして、その間永く遅延するや

うなことがなかつたら、露國の皇女は佛國の皇后となつてゐたであらうといつてゐる。これはよくその真相をうがつた説である。なほ露國のに反して、奥國のが多數で通過し、しかく速に取極られたのは、その希望が極めて婉曲に申し入れられてあつたことにあるといふことだ。奥帝はこれを聞いてその意外の速さに驚いたさうな。ナポレオンは千八百十年三月十一日シヤール親王に代理權を與へて、マリ・ルイズとウインで正式に結婚し、翌年四月二日を以て、マリを佛國皇后の位に即せた。

#### 四五 マリ・ルイズ(一)

賢皇后ジョセフィンヌに代はつた第二の皇后マリ・ルイズとはどんな婦人であつたか、誰れもこれを知りたいであらう。今記録に由つて彼れの如何なる婦人であつたかをみやう。

マリ・ルイズは千七百九十一年に、奥國の皇女としてウインに誕生した。天のなせる麗質は一世の評判であつた。目元のぱつちりしたこと、口元の愛嬌に富んだこと、ジョセフィンヌに勝



るとも劣らず、且つ體質の強健な美人であつた。彼れがナポレオンと結婚したのは、花も羞らふ十九歳の春であつたから、青春の血に燃え立つてゐる最中であつた。美は一層勝れてゐたらう。しかし彼れの品性に就いては、世間に兎角の評判があつた。世間の評判などは餘りあてにならぬものだが、でもそれに由つて少くも徳の缺けてゐたことだけは證明される。世間よりも肝腎の婚殿ナポレオンはどう見てゐたらう。

ナポレオンは始めから終りまで、彼れを無邪氣な女愛すべき女として、魂を打ち込んでゐた。マリイはいよゝゝ結婚式を擧げんとて、ウインから佛國に乗り込んだ時であつた。ナポレオンは異例にも變装して彼れを迎へ、彼れの馬車に飛び込んだ、そしてマリイがナポレオンであることを知つて驚喜すると、ナポレオンはそれを見て大に悦び、又マリイに父母からどんな教訓があつたかと問ひ、マリイが何でもすべてハイ、と聽従しなければならぬと訓へられました、といふや、ナポレオンは更に喜悅に堪へない様子であつた。

マリイはたしかにナポレオンに聽従した。ナポレオンに自分をジョセフィンヌと比較させ、二后孰れも常に氣分が平かで、親切心の深いことが見られた、と嘆賞するに至るまで忠實に仕へた。

マリイは結婚話のあつた最初、彼れにナポレオンのことを悪くいふものがあつたので、大いに恐怖、戰慄してゐたが、結婚に賛成の父帝から決してさうでないといはれ、又來て見て悪くいふものゝいふところと、大に相違してゐることに安堵した。

マリイがナポレオンに仕へた一例をいふなら、夫が室に在ると終日室に、外に在ると亦終日外にあつて、始終夫の側を離れずにかしづいた。ナポレオンがドレスドに行幸した時だつた。塙帝も皇后を伴ふてその地に行幸されたが、ナポレオンはいつもながら精力主義なので、終日何かと用事をして休息するひまをもつくない。この時マリイは始終夫と共に内に在つて、ひたすら奉仕に餘念がなかつた。そこでこの事情を知らぬものからは、マリイは夫に食つ付いて離れない、と評判され、母なる塙國皇后からは、そんなに終日食つ付いてゐると人に笑はれるよ、とひやかされたことがある。

かやうに忠實なマリイにも、女の持てる特性はあつた。それは外ならぬ恪氣である。この恪氣はナポレオンがマルメーゾン宮に行かうとする時に、特にあらはれた。マルメーゾン宮の主は誰れあらう前後ジョセフィンヌである。無邪氣なマリイでもナポレオンとジョセフィンヌとのなか



は知つてゐる。別れた後の意中をも知らないでゐるものか。これがマリイのやけたところであつた。やくも無理はない。ナポレオンはこのことについて下のやうにいつてゐる。

『朕が或る日マリイをマルヌーゾン宮に伴はうとしたら、彼れはそれを聞いて涙を流した。朕だけ行くことは妨げないが、同行することは好まぬといつてゐたが、それも朕の意中を疑つてからは妨げるためにあらゆる計略を弄し、少しも朕の側を離れなかつた。ジョセフィンヌを訪ふことが、如何にも苦痛のやうに思はれたから、朕もその後は成るべく行かないことにした。たま／＼行かねばならぬことがある、とその時はきつと泣き出すので、これがいつも風波の種となつた。』

#### 四六 マリイ・ルイズ(三)

ジョセフィンヌはナポレオンがマリイと結婚することを聞くや、大いに喜んでその慶事についての役目を、ユゼーヌに仰せつけて頂きたい、わたしも亦それについては、奥國に對して如何なることでも、用命に應じてしませうと申上げた。マリイにしてこの美しい心を知つたら、愷氣な

どしては勿體ないことだが、又一面からいへばさやうないぢらしいジョセフィンヌであればこそ、ナポレオンがいかにそれを愛してゐるだらうか、別れたとはいへ心は一つに密着してゐるだらうと考へると、かへつて餘計にやかないわけには、ゆかないだらうともいへる。マリイがジョセフィンヌに對して愷氣したからとて、さまで咎むべきではない。ジョセフィンヌでも皇后時代には、盛んにやいたではないか。

しかしながらマリイをジョセフィンヌにくらべるときは、とてもジョセフィンヌに及びも附かないところが多々あつた。誰れやらがマリイは平凡な女であつといつたが、これは明言である。特にその夫に仕ふる點において極めて平凡であつた。彼れはナポレオンに對して、まことに忠實であつたが、その忠實は妻としての忠實でなく、下婢としての忠實のやうなものであつた。彼れはナポレオンに別れた後

『わたしは良人と共に在る時ばかり幸福でありました』  
といつたやうに、ナポレオンと共に在つたときは實際幸福で、思ひまうけぬ天運に際會したものであつた。ナポレオンも



『マリイの代は極めて短かつたが、富、天下をたもつたから、充分満足したことであらう』  
といつてゐる。だがこの幸福は亦妻としての幸福ではない、皇后としての幸福でもない。唯それがために榮譽榮華ができたといふ幸福であつた。すなはちナポレオンのいつてゐるやうに、彼れが富、天下をたもつて贅を盡くしたに過ぎなかつた。ナポレオンといふ千古の大英雄と夫婦になることができたといふことを自覺して、それを幸福といふのなら聞こえるが、贅澤な暮しができたことだけをもつて幸福とするに至つては見上げた女ではない。ジョセフィンヌはかやうな考へではなかつた。ナポレオンを以て大英雄、大天才と見て取り、この大偉人と夫婦となつたのを、無上の榮譽幸福とすると喜んでゐた。こゝらがマリイとジョセフィンヌの違ふところである。

マリイはナポレオンの死後

『わたしはナポレオンに對して眞の愛情を感じなかつた』

と放言したが、この言は彼れの本音であらう。筆者が彼れの忠實を以て、下婢的忠實だといつたのは、その意こゝにあるのである。さりながらこれは少し考察を要する。マリイがなぜナポレオンに對して眞の愛情がなかつたかといふに、彼れとナポレオンとの年齢の相違もあつたらうけれ

ど、主としてナポレオンが傲慢で、克厲で、威が強く近づきがたかつたことにあるらしい。ナポレオンには優しい點が少しもなかつた。男でさへ彼れの前に行くとなつてしまつた。こんな人に若い女がどうして惚れやう。ジョセフィンヌなればこそその賢を以て、その明を以て、彼れを見抜いて惚れはしたれ、マリイのやうな若くてそして平凡な女は、夫がどんな天才か、そんなことは少しも知らない低能の姫君だ。どうしてそれが愛情など感じやう。マリイが告白は自己の眞實を語つてゐる。

#### 四七 マリイ・ルイズ(三)

マリイ・ルイズは、ナポレオンに對して愛情を感じなかつたから、ナポレオンがセント・ヘレナに流がされると間もなく侍従長のナイベル伯と姦通し、後にはそれと結婚してナポレオンのことなどは少しも思ひ出さず、世辭にも手紙一つ出さなかつた。或る日どうしたことか小さな羅馬王の石膏像一つを送つたばかりであつた。マリイがナイベル伯と姦通したのは、ナポレオン



が佛國にあつた時からで、ナポレオンはそれをうすく知つてゐたが、愛を薄らげなかつたのだといはれてゐる。

いづれにしても、ナポレオンはマリイを熱愛してゐた。ジョセフィンヌに對すると同様の愛をマリイに寄せた。彼れは死の間際までマリイのことを褒めそやした。ナイペルヒと不義の快樂に耽つてゐることを知らないで、自分が死んだら、心臓をアルコールにつけて最愛のマリイのもとに送つてくれと遺言までした。マリイがこれを知いたらどんな感じをしたことだらう。恐らくは別に大した感じもなかつたかしない。平凡な熱のない女である。感動するはずはない。しかし感じないからとて薄情者とはいへない。元來根が太<sup>た</sup>して結構なできでないのだ。その上父なる煥帝はお人善し、母なる皇后は邪慳な女で、ナポレオンから悪る智慧があつて小賢しい女だと評されたほどのものだ。かやうな父母の間にでき、かやうな父母に教養されたマリイである。道義心の缺乏してゐることは確實だ。だから薄情とか何とか評するのは、白痴に向つて道義を責むるのと同様ではないか。

ナポレオンがマリイを評して、無邪氣で淡泊だといつたのは、同情ある評であつて、善意に解

すれば將た慾目を以て見れば、或はさうも取れないことはない。だが嚴正に觀察すると、無邪氣に見える一面は、痴に近いのではないか。痴に近くて無邪氣に見えるのは、眞正の無邪氣とは斷じて違ふ。淡泊の點はさうもあつたらう。彼れは煥國の皇女である。なに不自由ない姫宮で育つてきたものだ。物事に淡泊なのは境遇の上から當然であつたらう。ナポレオンが折角熱愛した女である。ナポレオンこれに免じて大いに同情し、ナポレオンから彼れとジョセフィンヌとの比較を聞かう。ラ・カイズがナポレオンの語つたところだといつて記したものに據る、とジョセフィンヌは圓轉濶達、人を魅し、人を悦ばせた。これに反してマリイは罪にならない手練手管があるものだらうか、といつて人を魅するやうな巧妙な交際術は學ばなかつた。ジョセフィンヌは言動を否定する癖があつたが、マリイは假りにも伴つて言葉を巧みにするといふことなどはなかつた。ジョセフィンヌは物をねだらぬ代りに、自分勝手に求めて債務を到るところに負ふたが、マリイは困つてくると遠慮なく請求した、彼れは即座に支拂ひしなければ、物は買へないものと思つてゐた。但し兩人とも温良・柔和にして、深く夫に愛着した云々とある。深く夫に愛着したの一語は、マリイには取消さねばならぬ。



最後にマリーについて面白い話を紹介しやう。一日ナポレオンが煥帝の宸翰を讀んで大いに憤り、マリーを顧みて

『お前の父はガナーシユ（馬鹿野郎）だ』といった。マリーはよく佛語に通じなかつたので、ガナーシユの意味がわからない。侍従に聞いてみると侍従は當惑して『賢明慎重、好箇の助言者といふ意味でござります』といった。數日の後マリーは參事院において、議論沸騰、停止するところを知らない光景を見て、速に終結させやうと側に在つたカムバセレに命じて

『かやうな重大な場合、これを一致さすのは卿の任であるぞ。卿は裁決者である、なぜならわたしは卿を帝國第一のガナーシユだと思つてゐるぞ』といった。後日ナポレオンはそれを聞いて

『カムバセレの困惑、一座の笑聲、並に意外の成功に驚いたマリーの狼狽のさまが、目の前に見えるやうだ。』

といつて大笑した。

#### 四八 ローマ王

フランスの利益のためとあつて、最愛の妻ジョセフィンヌを去り、マリールイズを迎へて生んだ皇子といふのは、どんなものであつたらうか。皇子は千八百十二年に誕生したが、その生れる時のことであつた。マリーのお産は以外に重く、子を殺すか母を殺すか、二ツに一ツを選ばなければならぬしあはせとなつた。當時ナポレオンは別室に在つて様子いかにと待つてゐたが、女官が入り來つて難産の次第を語り、醫師の言葉であるといつて、どちらにするかを奏する。とナポレオンは言下に、無論母を助くるのだ、といつたので、醫師もそのつもりで手術の準備に取りかかつた。だがその中に皇子は無事に産み落され、マリーも綿のやうになつたが、生命には別條なく、母子共に健全なるを得た。

ナポレオンの喜びはどんなであつたらう。彼れは殆ど狂せんばかりであつた。ナポレオンの狂喜ばかりでない。パリ市民も亦狂躍した。



由來フランスでは皇子皇女が誕生すると砲聲を以てこれを一般人士に報することになつてゐた。そして皇女なれば二十一發、皇子なれば百〇一發と定められてある。この日パリーでは砲聲一發するや、全市は擧つて業を止め、耳を澄ませて二發三發と砲聲を數へ始めた。二十二發に至つた時、全市民は并舞狂躍、萬歳々々を絶叫した。且つこの慶事が歐洲列國に傳はると列國はいづれも高位高爵のものを派して賀を祝した。やがて皇子の洗禮式となると、フランスにおける一切の僧侶を召集し、各地方の代議士を集めて、その面前で式をやつたが、煥帝はその時皇子の代父となつた。

ナポレオンはこの皇子をローマ王と稱させた。彼れにしてもしへレナに流されることなくフランス皇帝としてその得意を繼續したなら、このローマ王はナポレオン二世として、父に次いでフランスに君臨するはずであつた。

ナポレオンはローマ王を理想的君主にせんものと、大に養育に注意した。傳育係としての女官を選定するに當り、頗る苦心してゐたが、モンテスキュ夫人を推薦するものあつてそれに決した。モンテスキュ夫人は淑徳の聞えの高い婦人であつた。ナポレオンはこの婦人を非常に賞揚した。

夫人も知遇に感じて熱心にローマ王を傳育した。この夫人がいかにかローマ王を傳育したかといふに、下の一事でも知れる。ローマ王の宮殿はチュレリー宮殿の向ふにあつたが、人々はローマ王を拜しやうといつても、その宮殿の窓から窺つた。一日、ローマ王はこの人々の窺つてゐるを、意に満たぬことがあつて大に憤り、果ては聲を立て、泣き出した。夫人はこれを見て人に命じて窓を閉ぢさせた。ローマ王はそれを不思議に感じて

『なぜ閉めたか』

と詰ると夫人は

『殿下のお怒りのありさまを人に見せないためにござります。殿下はいづれ臣民をお治め遊ばしますが、その臣民が殿下の只今のお有様を拜したら何と申ませう。かやうに御無理をおつしやる、と臣民も殿下のおつしやることを聴きません』

と奉答した。ヤンチャのローマ王もこれには大いに感じた見え、以後決して無理をいはぬと夫人に誓つた。

ローマ王は父の苦心、モンテスキュ夫人の熱誠な傳育に由つて、人となることはなつたが、幼



時ナポレオンがエルバに流されるとウインに送られ、次いでナポレオンがヘレナに流されて、ナポレオン二世としてフランスに君臨するの望み絶え、千八百十八年ライヒタット大公とはなつたが、千八百卅二年に、惜しや二十一歳を以てシユエンブルンに卒去した。おもへばナポレオンのローマ王における、なほ太閤の秀頼におけるが如きものであつた。

#### 四九 ナポレオンの風姿(二)

相において人を取り、われこれを子羽に失す、とは孔子のいつたところだが、誠に人相は必ずしもその人の性格を露呈してゐるものではない。しかしながら多くの場合その人相がその人自らを説明してゐることを否定できない。ナポレオンの風姿の如きは、確によく彼れを説明してゐた。

ナポレオンは小男で、青年時代には極く痩せてゐた方だが、中年から肥満した。彼れが青年時代に如何に、痩せてゐたかは、彼れがイタリー遠征中に、畫家に畫かせた畫が證明してゐる、畫は彼れが橋上に旗を持つて、兵を叱咤してゐるところのそれである。中年から肥満してゐたこと

も彼れの種々な繪畫が證明し、彼れに謁見した人の言が證明してゐる。彼れは傲慢で不遜で人を人とも思はず、我を張り通したものだ、この性質は生れてから死ぬまで、少しも變らなかつた。晩年に至つて少しは衰へたが、少年時から中年時にかけて覇氣滿々、不撓不屈、天地間、己れの爲すことにして爲し得られないものはないと自信したものだつた。それらの性格が彼れの面貌にあり／＼と露はれてゐる。

これを史實的に證明するなら、その青年時における彼れの風采として見られるものは、彼れに謁見したボアセイダングラーの話である。

ボ氏はいふ

『さきごろイタリーのちびすけを見た。痩せたあをじろの男だが、その様子は如何にも威嚴があつた。』

ナポレオンをイタリー人といつたのは、彼れがイタリー人種であるからである。又ポンテクーランは、ナポレオンの訪問を受けて後、人に語つていふ

『態度は嚴肅であるが、陰鬱で、しかも倨傲な男である。顔は痩せて長いが青銅色を帯んでゐる



たよ。彼れは軍隊からきたので、話しはいかにもその事情に通じてゐた』と威嚴のあつたこと、瘦せてゐたことは、ボ氏の言もボ氏の言も一致してゐる。又ローマ公使館の佛國書記官カコウといふものが、親しくナポレオンを目撃した結果を友に語つていふ

『君の知つてゐる通り、親愛なる大將閣下を僕は好きはする。だが彼れの相格や、勇氣や行動の敏活さ、さてはその性情などを正しく記するためには、小虎と呼ばねばならない』

小虎とは如何にも適評である。彼れの青年時代は小虎であつた。そして壯年時から獅子に向上した。彼れは動物でいへば生れて虎にして、長じて獅子となつたのであるが、従つて彼れの風采、態度には少しも閑雅なところがなかつた。

彼れの晩年における風采について、ベレロフオン號のメイトランド船長はいふ

『ナポレオンは當時極く巖丈な人であつた。身長は五呎七吋、四肢は恰好よく、踵は小さく、手も亦小にして婦人の如く、顔は薄暗黄色で、目は少し灰色を帯び、髪は暗鶯色にして、黒色に近かつた。』

と船長はなほ頭髮が頂邊と前頭に薄く、齒並はよくて、笑へば頗る樂しげで、舉止も亦快活であ

つた、といつてゐるが、同じ日に見たセンハウスといふものの言に由る、と形相は變り易くして、好機嫌の時はあれど、たちまちにして陰鬱、沈思、澁面を作つた。頭は大きく、手足は小さかつた。又同じ月に見たバムベリーといふもの言に聞く、と肥滿して腹部が膨出し、矮小なるも筋骨は逞しかつた。

人相、風采などはその時の氣分と境遇とで、多少の相違がある、又見る人の目にも由るから誰れの言を探れとはいへぬが、その代はり、その多くの人のいつてゐるところから一致點を見出すことができる。それが比較的確かなものであらう。それを確かなものとして、以上の人のいふところを總括する、と陰鬱なことが青年時から、晩年にかけて一貫してゐる。頭の大なること、手足の小なることも一致してゐて確實である。

## 五〇 ナポレオンの風采(二)

太閤の見すばらしい男であつたことは人のみな知るところであるが、ナポレオンは太閤ほどで



はなかつたけれど、決して風采の上がつた方ではなかつた。太閤は晩年に至るも、目光炯々として人を射つたが、ナポレオンは晩年その眼光甚だ薄らいだ。千八百十五年七月に會つたセンハウスは

『彼れの目は鈍くして、余が豫期してゐたとは全然反對であつた。』

といひ、同じ月に會つたバムベリーは

『目は灰色で、瞳孔が大きかつた』

といつてゐる。千八百十五年七月といへば、彼れがワートルローに敗戦して、ベレロフォン號に投じたときであつた。心緒が亂れてゐたから、自然その眼光にまで影響したのであらうが、しかし當時から彼れは往年のナポレオンではなく、物事に躊躇、逡巡し、果斷の性を缺いでゐた。眼光が薄らいでゐたのはそのせいもあらうか。尤も人の觀相はその人の如何に由るものである。二人が悪く見たとて、必ずしも悪いとはいへぬ。二人が平凡に見ても、必ずしも平凡とは決せられぬが、彼れの性格は露國に大敗歸來してからこのかた、大いに變はつたこと、取り分けその勇猛心を減じ、果決の氣象を缺いたことは、侍從等の言が一致してゐる。ベレロフォン號に投じ

て以來の、彼れの態度は往年に比して、餘程やさしくなつてゐた。バムベリーが彼の時

『莊重ではあるが沈鬱の方だつた、が、峻嚴な態度又は怒氣を色にあらはすといふやうなことがなかつた。』

といひ、千八百十七年三月、セント・ヘレナに彼れを訪ふた英國船長某が

『粗野でわがまゝな人だらうと思つたら、意外にも態度が溫和で順良であつた。』

といひ、同年九月に彼れを見たヘンリーが

『威名赫々、一時は天下に轟いたナポレオンの大武勇もたちまちにして又陽炎のやうに消失した。曾ては偉大であつた彼れは、今や肥大の一匹夫に埋没し去つた。その人を壓せる眼力、その表現の偉力、みなこれを彼れに求めてももうだめだ。』

といつたことでも推想することができる。

だが、これとても概括的の話であつて、全然その本來の性能を失つたのではなかつた。千八百十七年八月に見たパシル・ホルルの如きは、

『彼の眼光の炯々として、人を射るありさまは、とても無視することできない。彼れの身心の



力がこの時既に衰へつゝあつたとするなら、その氣力の旺盛だつたときは、その克己力の如何に大であつてか、想像するに餘りがある。』

といつてゐる。これに由つて觀れば、往年の炯々たる眼光は、甚しく失はれはしたが、見る人に由つては、なほ大いにそれがあるかに見られたらしい。

驥麟も老ゆれば騫馬にひとしい、と古人はいつたが、獅子も老ゆれば猫にひとしい。しかし獅子兒ナポレオンに限つて、その死するまで猫とはならなかつた。豐太閤は晩年に至つて大いに衰へ、果斷の性を失ひ、愚痴ツぼくなり、往年の太閤に比べると殆ど別人のやうに見えたが、それでも底をたゞげばなほ本音は出た。ヘレナにおけるナポレオンも亦太閤同様に衰へたが、本來の性能は失はなかつた。これらが英雄の英雄たるところであらう。驥麟は老ゆ、獅子も老ゆ、人も老ゆ、但し英雄は老ゆるといへどもなほ英雄たるを失はぬ。

### 五一 ナポレオンの風姿(三)

文明批評家として有名なるテイーンヌは、畫家ゲランの寫したナポレオンの肖像、とスタエル夫人の書いたフランス革命論中のナポレオン觀とを以て、一は肉體上のものとして、他は精神上のものとして、能くナポレオンの眞を穿つたものと評してゐるが、誠にその通りである。ゲランのナポレオン像、スタエル夫人のナポレオン觀には、彼れの威風の凛々たるところが、明瞭に寫されてある。彼れは晩年に至つて幾干か薄らいだが、青壯年時には容易に近づくことのできな威嚴をもつてゐた。スタエル夫人の言にいふ

『カンポフォルミオ條約後、フランスに歸國の際わたしは始めてナポレオンを見た。その時わたしの氣持は、最初の歡呼から甚しい恐怖に代つていつた』

スタエル夫人はナポレオンにお轉婆として歡迎されなかつた夫人だから、ナポレオンを決して善くはいはない。だがその夫人でさへ恐怖したことを自白してゐる。

これより先、ナポレオンはイタリー遠征軍總督として出征の途上、ツィロンにおいてその前。パリーで親しく交はつてゐた、提督ドクレーと會見したが、ドクレーはその時の感想を記して曰く『パリーで面識があつたから喜び勇んで彼れの宿舎を訪ふたが、彼れに近づいた時、その眼光、



その聲調に抑へつけられてしまった。』

又それから兩三日後、ナポレオンはアルベンガでその地の師團の諸將と會合したが、會合前諸將はいづれも彼れを成り上りものと悪口し、中にも自ら魁偉勇猛に誇れるオーゼローの如きは『バラーの家來だよ、ワンデミールの將軍だ、街上の將軍だ、戰陣に臨んだことがない、朋友もないよ。いつも考へ込んでゐるから熊のやうだ。詰らぬ人物だよ、數學者で、妄想家ださうな。』などと罵つてゐるに拘はらず、イザ會見となつてナポレオンが嚴然として現はれ、軍隊の配列を説明し、諸將に命令する、といづれも雷霆に打たれたやうになつた。これにはオーゼローも驚いてしまひ戶外に出ると、

『彼の小さな大將奴が』

と思はず口に恐怖の念を漏らした。

又ナポレオンがセント・ヘレナに流される途中、ベレロフォン號からノーサムバアランド號に轉乘する時のことであつた。新任喜望峯司令長官コツクバイン少將は、ベレロフォン號に至つてナポレオンとその一行との荷物を調べ従者の帶劍を取り上げたが更にケース提督がナポレオンの

帶劍を取り上げんとて『帶劍をお渡しあれ』といふとナポレオンは恐い眼をして、ケースを睨みつけ何とも言はなかつたが、ケースはその時早くもナポレオンの威嚴に打たれ、恐懼して再び言ふところを知らず、遂にそのまゝにしてしまつた。

誠に千軍を叱咤する猛將も、ナポレオンの前に至れば小兒の如くならざるを得なかつた。小兒で思ひ出すが革命軍の老將として有名だつたワンダムも亦ナポレオンの前に行つて小兒の如くなつた一人であつた。彼れは一日ドルナノ元師に自白して曰く

『ナポレオンのやつ、妙に僕を引きつける。僕は神も恐れない。惡魔も恐れない。然るにきやつに近づくと小兒の如く慄へるよ。きやつに針の穴を通つて火に飛びこめといはれたら、僕はきつとさうするだらう。』

要するにナポレオンは風采、堂々たるものだつたが威嚴に至つては史上稀有の人物であつた。

## 五二 ナポレオンの機智(二)



ナポレオンは『人に機先を制せしむるのは朕の態度でない』といつてゐるが、その言の如く、彼れは常に機先を制してかゝつた。機を知るはそれ神かと古人はいつたが、彼れは機を知ること鬼神の如きものであつた。そしてその機に處する智恵もなかく豊富であつた。

彼れが青年の頃の機智だとあつてその著明なものは、故國の Kors がフランスから自由を與へられ、本國同様の法律の下に支配されることゝなつた時、それを機會に『フランスは故國のために自由の懷を開いてくれた』といつて Kors 獨立運動者と手を切つたことである。彼れはこの時獨立黨と手を切つたため Kors 駐在官となることを得た。彼れにして、もしその時なほあくまで獨立運動に従事してゐたら、Kors 獨立ができないばかりか、己れもパオリと共に亡命しなければならなくなるのであつた。かやうな場合に、危きを避けて何物かを贏ち得るのは、彼れの得意とするところであつた。

ナポレオンの機智に富んでゐた例は、山のやうにあるが、その中でも最も大なる機智として傳ふ可きものは、埃及からの歸國とエルバ脱出とである。埃及からの歸國のことは、前にも記した通りであるが、その如何なる動機に由つて彼れは歸國する心を起したか。すなはち如何にしてそ

の機會を捉へたかといふに、それは彼れが英國の提督シドニー・スミスから送られた一葉の佛字新聞を讀んだ結果にあつた。スミスは敵である、もとより好意を以て送つたものではない。彼れは歐洲の天地が非常に紛亂し、イタリーの大敗、佛國の危機となつてゐることをナポレオンが知れば、定めし驚くであらうとのいたづらから出た仕事であつた。ナポレオンは新聞を見て果して驚いた。しかしそれがために彼れは歐洲に歸つて大霸王となつたのである。スミスのいたづらはいたづらとはならなかつた。かへつてそれがために歐洲の天地を震蕩すること數次にして自國をも危殆に陥れた。これを敢ていたづらとするなら、前古未曾有の大いたづらである。

ナポレオンが新聞を見たのは、アクル攻撃から引き返して、アレキサンドリアにあつてトルコ軍を邀撃してゐたときであつた。その時彼れは新聞を手にとると、讀み去り讀み來つて、夜の明るを知らなかつた。そして歐洲が意外の紛亂であるのに驚いて、斷乎として歸國を決意した。この時の彼れの心中はどうであつたらう。梨果は熟したと案を打つたが、それが今なほ眼に見えるやうだ。

彼れは直ちにベルチエーとガントームとを呼び寄せて歸國の決意を告げ、同時にガントーム提



督に船の用意を命じた。提督はアレキサンドリアに急行して、ひそかに軍艦二隻と二小船を用意し、ナポレオンは全軍の指揮権をクレールベルに委し、ひそかに海濱に至つて乗船した。船はその夜直に出帆したが、あいにく時風が死んでしまつた。加ふるにほど遠からぬところに英船の碇泊してゐるのさへ見えた。その内にこの幸運兒を送る風伯は勢ひよく吹き出したので、船は進路を定めて走つた。

ナポレオンはこの航海には細心の注意を拂ひ、遠く海上に出で、英艦に遭遇するの不利を考へて、アフリカ沿岸を航行した。かくして船は風波と戦ひ、英船の目を避けて二十日餘りの航海の後十月八日の朝フレジユスに入港した。ナポレオンはこゝでフランスの形勢事情を聞いて直にパリを指した。彼れがフレジユスに上陸すると人々はみな「ボナパルト歸る、く〜」といつて歡呼した。パリに至る途中でも到るところで熱烈な歓迎を市民からうけた。かくしてナポレオンはパリに乗込んだが彼れが足をパリに入れるや、たちまちにして議會は解散され、政府は顛覆し、彼れは第一執政官となり、こゝに喧々たる議論政治は、一朝にして葬られてしまつた。機を見るに敏に、機に處するに巧みなこと彼れが如きは眞に稀れであつた。

### 五三 ナポレオンの機智(二)

次はエルバを脱したことであるが、彼れは如何にしてこの機會を捉へたかといふに、ナポレオンが去つてから後のフランスは英國に長らく漂浪してゐたルイ十八世が歸國して王位に即き、最初は人民を喜ばせるやうな態度に出たが、間もなく國會議員選舉權を制限し、國會の權限を滅殺する勅令を發布した。人民は折角血を流して得た自由が奪はれるので大いに不安を感じ、遂には大動搖を見るに至つた。一方には亦列國がウインに會議を開いて、歐洲多年の變亂善後に關し、手前勝手の注文を出して紛議を極め、且つナポレオンを歐洲から追放せんと議するに至つた。かうなつてはいはゆる時艱にして偉人を憶ふで、フランス國民は一齊にナポレオンを憶ひ、彼れの再起を願望した。ナポレオンはこの形勢を察知してエルバを脱出したのである。

ナポレオンは最初パリを去る時、その近親にむかつて『堇の花の咲く頃には亦歸つて來られるだらう』といつたがらゐであつたから機會を捉へると寸時も躊躇することなく、エルバ脱出の